

K-846

米沢市八幡原中核工業団地造成予定地内
埋蔵文化財調査報告書

第 1 集

昭和 50 年 3 月

米 沢 市 教 育 委 員 会
地 域 振 興 整 備 公 团

米沢市八幡原中核工業団地造成予定地内
埋蔵文化財調査報告書

第 1 集

八幡原中核工業団地内遺跡調査団編著

昭和 50 年 3 月

例

言

1. 本書は、山形県米沢市東郷の八幡原中核工業団地造成予定地内の文化財調査にかかる第1年次の報告書である。
2. 本書は、二つの部分からなる。第Ⅰ部は八幡原の概要をとらえるため、1973年に山形県教育委員会文化課が実施した分布調査の結果と、従来のこの地区的考古学・民俗学的調査の記録をあわせ集録した。心よく資料を提供された山形県文化課および調査員各位にお礼を申し上げる。第Ⅱ部は1974年度におこなった発掘調査の記録である。
3. 発掘調査は1974年7月31日から11月26日まで、遺物整理は12月1日から翌1975年3月31日まで行った。発掘調査および遺物整理にあたっては、第Ⅰ部第2章にかけた調査員以外に、置賜考古学会会員および山形大学の学生諸君の協力を得ることができた。記して感謝申し上げる。
4. 発掘調査および遺物整理について、つぎの諸氏および諸機関から種々なるご指導、ご助言をたまわった（敬称略、A B C順）。あわせて深謝申し上げる。

安孫子昭二、保角里志、藤沼邦彦、川崎利夫、木本元治、小林達雄、工藤雅樹、真室公一、名和達郎、丹羽茂、小間昌一、酒井忠一、佐々木洋治、佐藤洋行、佐藤禎宏、芹沢長介、須賀はる、鈴木利一、鈴木雅宏、高橋郁夫、手塚孝信、上野秀一、氏家和典、横戸昭二、横山昭男、文化庁、宮城県教育委員会文化財保護課、置賜考古学会、札幌市教育委員会文化財保護課、東北大学文学部考古学研究室、東北歴史資料館、致道博物館、山形大学教育学部歴史学研究室、山形県理科教育センター、山形県立博物館、山形考古学会。
5. 本書の執筆は、各調査員が担当した。それぞれの文責を文末に記した。しかしながら公務その他の都合で執筆に加らなかった調査員各位にも資料整理の段階で種々の考察、資料提供、作業をしていただいた。その限りにおいて、本書は全調査員の著作であるといわねばならない。なお、編集は加藤 稔があたった。

1975年3月

米沢市・八幡原遺跡群調査団長

柏 倉 亮 吉

本 文 目 次

はじめに

例 言

第Ⅰ部 序 論

第1章 八幡原の環境	1
第1節 地理的環境	1
第2節 米沢市八幡原の年中行事 -細原部落を中心とする-	4
第2章 調査までの経過	15
第3章 分布調査の概要	22
第1節 調査の経緯	22
第2節 調査結果 -44カ遺跡群の概要-	23
第4章 従来の考古学的調査	43
第1節 №33(細原)遺跡	43
第2節 №26(堂森B)遺跡	52
第3節 №31(竹井境B)遺跡調査の概要	70
第4節 №24(堂森H)遺跡	101
第5章 八幡原遺跡群の性格(予察)	113
第6章 要 約	124
第Ⅱ部 各 論(その一)	
第1章 昭和49年度発掘調査の経緯	125
第2章 八幡原遺跡群(1)	130
第1節 №19(清水北D)遺跡	130
第2節 №18(清水北B), №23(八幡原C)遺跡	136
第3節 №24(清水北C)遺跡	139
第3章 牛森辻ノ堂地区の遺跡	162

第1節 №35, 36, 37遺跡の地形と現状	162
第2節 №35(長塙)遺跡	162
第3節 №36(辻ノ堂A)遺跡	163
第4節 №37(辻ノ堂B)遺跡	164
第5節 №35, 36, 37遺跡の調査結果	166
第4章 №39(細原前川原)遺跡	167
第5章 次年度への展望	168

図版

挿 図 目 次

第1図 細原部落全景	5
第2図 細原部落の農家(鉢木利一氏宅)	6
第3図 墓前の塗飾り	8
第4図 細原部落の鎮守	10
第5図 細原部落の墓地	12
第6図 八幡原№5遺跡出土の土器	24
第7図 八幡原№9遺跡の近景	26
第8図 八幡原№16遺跡出土の土器	28
第9図 八幡原№23遺跡の近景	30
第10図 八幡原№25遺跡出土遺物	31
第11図 八幡原№43遺跡出土の土器	33
第12図 八幡原№31遺跡出土の土器	35
第13図 八幡原№40遺跡の近景	38
第14図 八幡原№33遺跡周辺の地形図	44
第15図 八幡原№33遺跡出土土器実測図	45
第16図 八幡原№33遺跡出土石器実測図	48
第17図 石器製作工程概念図	49
第18図 八幡原№26遺跡付近地形図	53
第19図 八幡原№26遺跡出土の土器(1)	54
第20図 八幡原№26遺跡出土の土器(2)	55

第21図 八幡原№25遺跡出土の石器・石製品	56
第22図 八幡原№26遺跡土層柱状図	57
第23図 八幡原№26遺跡第1号住居跡復式炉実測図	58
第24図 八幡原№26遺跡住居跡内出土の土器(1)	59
第25図 八幡原№26遺跡住居跡内出土の土器(2)	61
第26図 八幡原№26遺跡ピット内出土の土器	62
第27図 八幡原№26遺跡炉跡埋設土器	63
第28図 八幡原№26遺跡第1号住居跡内出土の土器実測図(1)	64
第29図 八幡原№26遺跡第1号住居跡内出土の土器実測図(2)	65
第30図 八幡原№26遺跡第1号住居跡内出土の石器実測図	67
第31図 八幡原№31(竹井塚B)遺跡全体図	71
第32図 八幡原№31遺跡層位別遺構配置図	73
第33図 八幡原№31遺跡層序	75
第34図 八幡原№31遺跡配石遺構	76
第35図 八幡原№31遺跡第1号住居跡	77
第36図 八幡原№31遺跡構造遺構	78
第37図 八幡原№31遺跡土器実測図	80
第38図 八幡原№31遺跡土器の口縁突起スケッチ	81
第39図 八幡原№31遺跡土器拓影図(1)	82
第40図 八幡原№31遺跡土器拓影図(2)	84
第41図 八幡原№31遺跡土器拓影図(3)	86
第42図 八幡原№31遺跡土器拓影図(4)	88
第43図 八幡原№31遺跡土器拓影図(5)	90
第44図 八幡原№31遺跡土器拓影図(6)	92
第45図 八幡原№31遺跡土器拓影図(7)	93
第46図 八幡原№31遺跡土器製品実測図	96
第47図 八幡原№31遺跡石器実測図(1)	97
第48図 八幡原№31遺跡石器実測図(2)	98
第49図 八幡原№24遺跡地区剖面図(1970年度調査)	102
第50図 八幡原№24遺跡遺構配置図	104
第51図 八幡原№24遺跡出土土器拓影	107
第52図 八幡原№24遺跡出土土器実測図	109
第53図 八幡原遺跡群№18, 19, 23, 24遺跡グリッド配置図	130~131
第54図 八幡原№19遺跡構造遺構実測図	132
第55図 八幡原№19遺跡土層柱状図	133
第56図 八幡原№19遺跡土壤実測図	134
第57図 八幡原№18, 23, 24遺跡地区剖面図	136~137

図 版 目 次

第58図 八幡原No.18, 25遺跡南北方向断面図	137
第59図 八幡原No.18遺跡東西方向断面図	138
第60図 八幡原No.24遺跡H44-48北壁断面図	141
第61図 八幡原No.24遺跡遺構配置図	142~143
第62図 八幡原No.24遺跡土壙実測図(1)	144
第63図 八幡原No.24遺跡土壙実測図(2)	146
第64図 八幡原No.24遺跡土壤実測図(3)	148
第65図 八幡原No.24遺跡出土石器実測図(1)	150
第66図 八幡原No.24遺跡出土石器実測図(2)	151
第67図 八幡原No.24遺跡出土石器実測図(3)	152
第68図 八幡原No.24遺跡出土土器拓影・実測図(1)	154
第69図 八幡原No.24遺跡出土土器拓影・実測図(2)	156
第70図 八幡原No.24遺跡出土土器拓影・実測図(3)	158
第71図 牛森辻ノ堂地区の遺跡群(No.35, 36, 37遺跡)グリッド配置図	162~163
第72図 八幡原No.35, 36, 37遺跡断面図	165

付 表 目 次

第1表 木沢市×八幡原>周辺の遺跡地名表	16
第2表 八幡原地域村々開発沿革表	17
第3表 木沢市八幡原中核工業団地および周辺の遺跡一覧	40~42
第4表 八幡原No.33遺跡土器分類表	45
第5表 八幡原No.26遺跡回石計測表	68
第6表 時期区分による八幡原遺跡群一覧	116
第7表 東北地方兩半島と対比した木沢市の原始古代編年表	120
第8表 八幡原遺跡群の地区別特色	125
第9表 八幡原中核工業団地内遺跡群の発掘調査計画(昭和49年度分)	128
第10表 八幡原No.19遺跡出土土器一覧	135
第11表 八幡原中核工業団地内土地利用総括表	168

第一 図 版	米沢市八幡原遺跡群周辺の地形図
第二 図 版	米沢市八幡原遺跡周辺の航空写真
第三 図 版	八幡原各遺跡出土の石器(1)
第四 図 版	八幡原各遺跡出土の石器(2)
第五 図 版	八幡原各遺跡出土の石器(3)
第六 図 版	八幡原各遺跡出土の土器(1)
第七 図 版	八幡原各遺跡出土の土器(2)
第八 図 版	八幡原No.26遺跡発見の遺構と出土物 1 号土居跡 2 亂設土器内部の石器 3 No.26遺跡出土石器 4 D群3類土器(ピット4出土器) 5 B群土器
第九 図 版	八幡原No.31遺跡の調査状況(1) 1 遺跡近景 2 発掘風景
第十 図 版	八幡原No.31遺跡の調査状況(2) 1 発掘区全景 2 第1号住居跡
第十一 図 版	八幡原No.31遺跡の調査状況(3) 1 A 4区 IIb 層六角棒石の出土状況 2 B 4区 IIb 層配石遺構
第十二 図 版	八幡原No.31遺跡の調査状況(4) 1 C 2区 IIb 層磨製石斧出土状況 2 B 3区 IIa 層土器出土状況
第十三 図 版	八幡原No.31遺跡の調査状況(5) 1 B 5区 IIa 層土器出土状況 2 B 3区 III層土器出土状況
第十四 図 版	八幡原No.31遺跡の調査状況(6) 1 B 3区 IIa 層二角垂飾品出土状況 2 B 4区 IIb 层石器出土状況
第十五 図 版	八幡原No.19遺跡の発掘(1) 1 I区グリッド設定状況

- 2 土 壤
- 第十六図版 八幡原No19遺跡の発掘口
- 1 溝状造構
 - 2 発掘状況
- 第十七図版 八幡原No24遺跡の発掘口
- 1 遺跡近景
 - 2 発掘状況
- 第十八図版 八幡原No24遺跡の発掘口
- 1 第11号土壤発掘状況
 - 2 第11号土壤西側断面
- 第十九図版 八幡原No24遺跡の発掘口
- 1 第11号土壤東側断面
 - 2 第11号土壤完掘状況
- 第二十図版 八幡原No24遺跡の発掘口
- 1 第19号土壤
 - 2 第19号土壤断面
- 第二十一図版 八幡原No24遺跡の発掘口
- 1 第14号土壤
 - 2 第24号土壤
- 第二十二図版 八幡原No24遺跡の発掘口
- 1 第15号土壤完掘状況
 - 2 第15号土壤発掘前状況
- 第二十三図版 八幡原No24遺跡の発掘口
- 1 第1号住跡
 - 2 第35号土壤石組
- 第二十四図版 八幡原No24遺跡の発掘口
- 1 第1号住跡土器出土状況(1)
 - 2 第1号住跡土器出土状況(2)
- 第二十五図版 八幡原No24遺跡の発掘口
- 1 第1号集石構
 - 2 第1号集石下土器出土状況
- 第二十六図版 八幡原No24遺跡の発掘口・八幡原No24遺跡出土の弥生式土器(-)
- 1 第1号集石下土器
 - 2 色描文の壺と蓋
- 第二十七図版 八幡原No24遺跡出土の石器
- 1 背 面
 - 2 旗 面
- 第二十八図版 八幡原No24遺跡出土の縄文土器(-)
- 1 早・前期縄文土器 (A・B類土器)
 - 2 中・晚期縄文土器 (C・E類土器)
- 第二十九図版 八幡原No24遺跡出土の縄文土器(=)
- 1 早期縄文土器 (D類土器)
 - 2 晩期縄文土器底面
- 第三十図版 八幡原No24遺跡出土の縄文土器(=)
- 1 晩期縄文土器 (D類土器)
 - 2 晩期縄文土器 (D類土器)
- 第三十一図版 八幡原No24遺跡出土の弥生式土器(=)
- 1 第11号土壙出土土器(1)
 - 2 第11号土壙出土土器(2)
- 第三十二図版 八幡原No24遺跡出土の弥生式土器(=)
- 1 第1号土壙出土土器(1)
 - 2 第1号土壙出土土器(2)
- 第三十三図版 八幡原No24遺跡出土の弥生式土器(=)
- 1 第1号土壙出土土器(3)
 - 2 第1号土壙出土土器(4)
- 第三十四図版 八幡原No24遺跡出土の弥生式土器(=)
- 第三十五図版 八幡原No24遺跡出土の弥生式土器(=)
- 第三十六図版 八幡原No24遺跡出土の土師器
- 1 内 面
 - 2 側 面
 - 3 底 面
- 第三十七図版 八幡原No35遺跡の発掘
- 1 遺跡近景 (西側より)
 - 2 L5グリッド縄文土器出土状況
- 第三十八図版 八幡原No37遺跡の発掘(-)
- 1 遺跡近景 (東側より)
 - 2 J6グリッド東壁断面
- 第三十九図版 八幡原No37遺跡の発掘口
- 1 U32グリッド東壁層序
 - 2 P26グリッド内敷石群
- 第四十図版 八幡原No39遺跡の発掘
- 1 発掘状況
 - 2 土層断面

付 図

米沢市八幡原中核工業団地周辺の道路分布図（1/10,000）

第Ⅰ部 序論

第1章 八幡原の環境

第1節 自然

米沢盆地は、山形県の南端に位置する。北に幅広く南に尖る菱形の陥没盆地である。南北の長さは24kmで、もっとも幅の広いところは18kmあるが、南端に近い米沢市付近の幅は約7kmにすぎない。面積は約250km²ある。最上川流域の低地群のなかでは、もっとも上流にあり、盆地床の海抜高度は200~300mである。すなわち、南方の松川扇状地の扇頭付近は海抜300mを越すが、次第に北に向かってゆるやかに傾斜し、北方の吉野川扇状地の末端付近は200mにすぎない。

東は奥羽背梁山脈を切る豪士山断層崖がこれを限り、西は猿野山断層崖が玉庭丘陵を切っている。北の山形盆地と西の長井盆地との間は自然的な通路があるが、それ以外の地域との連絡は、大井、板谷井、和田井、二井宿跡などの急峻な峠を越さなければならず、いわば孤立的性格の強い盆地である。

南方の吾妻山系を源とする羽黒川、松川、鬼面川の諸河川は盆地中央で合流し松川となって西流する。また東方の奥羽山脈から発した梓川、砂川なども松川へ合流する。米沢盆地は明瞭な扇状地を形成しており、南部の梓川、羽黒川、鬼面川の3箇状地は、松川の扇状地と合成して複合扇状地となっている。扇状地面4傾斜はきわめて緩かで、礫はあまり多くない。羽黒川扇状地においてこの傾向はとくに著しい。これらの扇状地の上には、黒色粉末状の火山灰性的黒土がおおっている。ノバクあるいはクロボクとよばれており、一般に酸性に富み地味は良好とはいえない。

ここに報告する八幡原は、米沢市街地東部を流れる梓川、羽黒川の流域にあり、東部・南部および北東部を奥羽山脈の山麓部に囲まれた南北1.5km、東西2kmほどの範囲を中心とした地域である。主として米沢市万世町堂森、牛森、細原および上郷上竹井に属する範囲である。その中心部は、主として梓川によって形成された扇状地であり、中にふくまれる牛森集落の北東には牛森山、さらに北には焼山と呼ばれる小丘があり、堂森集落の北には堂森山(311.2m)がある。牛森集落から牛森山東部、八幡原一帯にかけての約500haの地域は、米沢市第4次建設振興計画において、米沢東部工業団地に計画され、今回通産省の工場適地に指定され、工業再配置・産炭地域振興公団の手によって工業団地として造成されることになったのである。この地域内には数多くの埋蔵文化財包蔵地(遺跡)があるが、それらは主として梓川扇状地の扇端部分、海拔255~260mのところに集中している。

る傾向がある。この部分には、地下水が層状地帯有の被圧地下水となって湧き出る清水が多く存在する。八幡原の大半は地下水の伏流して水利の便が悪く、今なお原野をのこす畑作農業地域である。

米沢盆地は、地理的には山形県の最南端にありながら、冬期の多雪、低温に加えて、夏期の高温、年間の日照率など、気象上の特異性をもった地域である。盆地の西側の越後山脈は荒川の峡谷によって東西方向に切られているため、この幅広い盆地をとおる北西季節風をまともに受け冬期間は多雪地域となるのである。一般には、積雪深は西部において大で、東部において小で、米沢市街地はその中間を示す。125cm前後というのが年平均の積雪深であって、多い年は200cmを越す。初雪は11月上旬、根雪終日は3月下旬である。ただ、東部山地の山間部や山麓は全体的に少雪であり、場所の変化も少ない。とくに梓川層状地は、積雪深分布の上から相対的に寡雪で、かつ根雪期間も短いことが指摘されている（吉田 1968）。

冬期の低温の記録としては、1988年2月上旬の-17.5℃などがある。1月平均-12℃、2月平均-9℃で、12月および3月が2℃前後である。年平均気温11.1℃では、山形とはほぼ同数値であるが、春先3～4月の気温の低いことが残雪の影響もあって非常に目立つ。また、4～5月には揚子江気団の移動性高気圧によって異常乾燥となりやすい。高気圧の中心に入り放射冷却による冷込みあるいは霜霑のみられることがある。5月に入りてなお、4年に1回ぐらいたり割りで氷点下の気温が現われる。6月から7月上旬のヤマセの卓越する季節は、二井宿峠からオホーツク海気団の流れ込むことがあり、局部的な冷害を受けることもある。

梅雨明けは、7月中旬ころである。その後小笠原気団の勢力の強いとき、フェーン現象によって高温多湿の天候がつく。米沢盆地の中の気温は、関東地方内陸部の前橋や宇都宮にまさっており、気温の高極が36℃以上のこととこの30年間に6回あった。台風季、多湿な赤道気団は、板谷峠から侵入し局地的に集中豪雨をもたらしやすい。秋10月には割合に晴天が続くが、冬は早い。

以上のような地勢・気候の土地の樹木相はどうか。八幡原の中心地城は、戦時に八幡原飛行場として整備され、戦後の一時引き続き競技場となった。その後、原野となった部分は、スキおよびアカマツの生育が目立っている。米沢盆地一帯に最も多く繁栄している樹木はハンノキ、ヤナギの類などの落葉広葉樹であり、もし放置されるならばそうした樹類が増加するかもしれない。ただ、八幡原の東方の山地は、江戸時代以来、入会山として各村競って濫伐しながらも植林を行わず、山林を保護し水源を涵養することが放置され

てきた。加えるに凝灰岩質の土質はアカマツが成育しやすいものの水漏れ地としては不適当であり、これがため梓川は水量が少く八幡原をして今まで水田の少い地域としてきた大きな理由となっているといえる。

米沢盆地の孤立的性格は、古くから村山地方とは行政区画を異にしてきた。律令制下における陸奥国置賜郡はその最初である（後、出羽国置賜郡）。郡の中心部は高畠町から南陽市にかけての盆地北東部の平野部であった。小郡山、郡山の地名が今に残り、その周囲には横穴式石室をもつ末期古墳が点在する。尾瀬川流域には、弥生時代から古墳時代にかけての集落跡の発見が予想されるが、なお精査されていない感がある。八幡原周辺は、弥生時代以降の開発の跡がみられるが、羽黒川沿い沖積面からはじまった堂森丘（八幡原No.24）遺跡や堂森D（八幡原No.43）遺跡の存在がそれを物語る。しかし、古墳時代末から奈良時代にかけて、その開発が八幡原内部にどの程度及んだか未詳である。北方の戸塚山古墳群や木和田古墳の存在は、羽黒川沿いの農耕地の生産力を背景にしてのことであった。八幡原内にある牛森古墳（八幡原No.40）は奈良時代の古墳であるが、これの造営を可能にした農業生産力が何であったかは今後光明すべき課題である。平安時代の集落跡も規模の大きさのものはまだ発見されていない。

中世には大江氏が米沢盆地を領有し、その後は伊達氏が譲り受け、山形の斯波氏と対立していた。堂森の善光寺には、長井時広夫妻の肖像彫刻が現存する。1598（慶長3）年からは上杉氏30万石（のち15万石）の領地となつて維新にいたった。上杉領内には、その当初から郷士集落が構成されたらしいが、八幡原地内に牛森は1778（安永7）年諸組手伝で開墾に着手されている。貧困士族を土着させ、生活の安定とウルシ植付けによる蓄収を目的としたものであった。牛森には30戸の郷士が屯置され、1936年現在29戸が残っていたが、これは原野の開墾利用という目的の外に、福島方面の街道警備をも考えてのことであったらしい（長井 1986）。

次節において、牛森集落の東方にあった細原集落の民俗的記録を取りあげておく。

（加藤 稔）

参考・引用文献

- 石黒 正人（1965） 山形県置賜地方植物（木本部） 米沢東高等学校生物教室
- 長井政太郎（1966） 上杉藩の郷士屯置の研究 山形県郷土研究会
- 長井政太郎（1942） 改訂山形県地図 山形
- 長井政太郎（1960） 日本地図編纂大系2 東北地方 東京 誠文堂新光社
- 長井政太郎（1971） 日本地図 第4巻 宮城県・山形県・福島県 東京 二宮書店
- 長井政太郎（1960） 日本地図ゼミナールⅡ 北海道と東北 東京 大明堂
- 手塚孝・藤昭紀・安彦政信（1972） 米沢市八幡原開拓の遺跡 犀飼考古学 P.7-17
- 米沢市（1944） 米沢市史
- 米沢市（1968） 米沢市建設総合計 結論
- 吉田 義信（1968） 山形県米沢市とその付近の積雪分布 大東文化大学《経済学部》紀要6 P.1-12

第2節 米沢市八幡原の年中行事

——細原部落を中心として——

1はじめに

置賜盆地の最東南端に位置する八幡原は人口の移動の極めて少ない地域であった。かつては米沢藩に野菜を供給する地として考えられておったし、東方に広がる山地は山菜を多く産した。中でも細原地区などは松茸の産地として知られている上に、猪なども行われていた所である。

八幡原を中心に、東に細原、西に堂森、北に竹井・川井、南に牛森の各部落があり、堂森の善光寺、木和田の感興院、上郷の桃源院、慶福寺の仏寺の他に、各部落に八幡神社、市姫神社、福荷神社などがあり、信仰の中心をなしていたが、その他にも民間信仰が多く見られ、大宮講、不動明王、念仏講などがあったが、特に「山の神」に対する信仰は部落の組織と結びついていたといふ点で配慮されるべきであろう。

部落ごとに「契約」があり、ほとんど人口の移動が見られなかったから、各部落では旧来の組織が今日まで及び、移転を余儀なくされた細原部落などは、移転先の羽黒川畔の团地に「細原公民館」を設立して、その付近に住居を定めたのを考えても、村落共同体が移転に際しても大きい意味をもっていたことを物語っていたと言える。

今回の調査では特に細原部落における「年中行事」を主として報告したい。

細原部落は、越後より上杉家が移封されて米沢城主となった時、細原の森家が細原に居を構えたのが始まりと言われ、1746(延享2)年であったといわれる。その後、須賀家が森家の山守りとして住み今日に到ったと言い、細原部落16軒は古くから住みついたものと言う。移転して住みついたことで配寺は善光寺7軒、慶福寺4軒、桃源院3軒、感興院2軒となっている。

部落の「契約」は代々庄屋を勤めてきた佐々家で取りしきってきただが、明治に入り、部落推進による部落長の制度に代り、その下に「若衆組」があり、部落の道路、水の管理などをしたものであるが、部落の東方山中にある「不動明王」の管理は佐々家にゆだねられ、細原内の三部落（上、中、下組）より1名ずつ選ばれて祭祀などの世話をすると、部落内にある祠堂の管理にも当り、佐々家に手伝うことになっているという。また葬礼のような場合も部落全体の行事として実施してくれるようになっていた。

山の神は部落の東方、山への入口に祀られている。祭日は旧暦2月17日と10月1日で、部落全戸が加入しており、山を買って初めて仕事に入った者などが木で男根を作って供える風習があった。祭礼は若衆全員が建元として集まり、山仕事を休んで神酒をいたぐるが、若衆組に初加入の者、新入りの挨拶を兼ねて酒1升



第1図 細原部落遠景

を出したものであった。山の神はこの山の神の祭日には山の木を数えるので、山に入ってると木に間違われると、本当に木になると伝え、また山の神は田の神と交代するという言い伝えをしている。

通婚圈は部落または村の範囲が一般的であるが、米沢市閑から線に入った者が比較的多く、斎藤家へ3人、須賀家へ1人、他1人があるという。

2 年中行事

年中行事は部落及び各家において慣行的に行われるものうち、一定の日、一定の期間ごとに行われる伝承行事であるが、各家によって、いくらかのニュアンスの差異が見られる。元来は「モノビ」であるから、家に籠り精進潔斎する日のことである。いつしかその日が休み日と考えられるようになって今日に至ったものと言えよう。従って、本来の姿を見る場合、正月と盆を中心にして、さらに月毎の行事として見ることが望ましいと言える。さらに農山村では生産暦と結びついている面も強く、「季節の名によって行われる行事」「毎月行われる行事」「年中行事」と区別する場合もある。但し年に1回しかない行事は、毎月行われる行事に先行するから、例えば1月は「恵比須・大黒のお日待」、3月は「不成就日」となっているが、正月元日、3月3日はそれぞれに元日の行事、桃の節句の行事を行うことにしているという如きである。

1年のどこを年中行事の始めと見るかは特に定説はないが、歲寒神を迎える大晦日の諸行事の準備からと考みたい。その意味で12月8日を「コトオサメ」、2月8日を「コトハジメ」とし、共に「コト8日」と呼んでいること、地域によって白鷺町菖蒲でのように、12月8日を「コトハジメ」、2月8日を「コトオサメ」という（『置賜の民俗』第1号）例もあり、節の折り目として重要な役割を果していた点に注目したい。

I 八幡原の環境

(1) 正月行事

・コトオサメ（12月8日）

一年の仕事が終ったということで、事納めのヨゴレモチ（タダケ）を掘き、12個、ただし開年には13個の餅をとって供え、仕事を休む。針子が師匠の家で針供養もする。

・耳あけ（12月9日）

大黒さまの祝いで、二股大根を朴の葉で包み、薑の帯をして神棚に供

え、豆を煎って一升瓶に入れ、盆で蓋をして、「お大黒さま、お大黒さま、今晚は耳あけの御祝儀につき、耳あけており申すから、当年より来年はええ耳聞かせておくやい」と3べん唱言を旦那が唱え、豆をまく。

・納豆ネセ（12月25日）

2升か3升の大豆を小指でつぶれる位柔かく煮て、20~25個の^{2合}盆に入れ、コタツで温めるか、白納豆と称して臼に薑クダマを入れそれに煮汁をかけ、苞の大豆を置いて蒲団をかぶせておく。家によっては雪に埋めて作る例もある。須賀家では「にわかにさまざぬがよい」と言った。出来た納豆は大晦日に使うが、火櫃に下げて、田植の時に食べるためにとっておく。

・ススハキ（12月27日）

薑を竹の棒の先につけた薑籠を作り、ススをかき集めてアキの方角へ捨てるが、川井部落では、そのススを取って置き、苗代のときに撒布すると、害虫が出ないと言っている。

・モチツキ（12月28日）

一日がかりで餅を焼くが大抵の家で2日から3日は焼いたもので、とり餅は仏前、恵比須・大黒・一代神・屋敷神・水神・村の鎮守の山王さま・不動・山の神に供える分も取る。その時の餅は残しておいて、1月11日の稼ぎ初めの朝、力餅として食べるようとする。

・ツツムカエ・歳徳神ムカエ（12月31日）

松迎えは朝方に川原に行って三松松をとってきて、雪の上に刺し、晩方に松飾りをするが、大黒柱の他に、恵比須・大黒・戸の口、鹿及び木小屋にも飾る。大晦日の晩の料理は家によって決まっているものがあり、黒豆、数の子、塩鮭、神酒を供えるが、煮ものには大根（代々伝わるように）、薑子干し（借金なせるように）や人參などを入れた。また、



第2図 細原部落の農家（鈴木利市宅）

2 木沢市八幡原の年中行事

「九・五・一」と称して年令に家族の中でこれに当る者がいれば縁起が悪いといって、誰かが親戚に行ったりする。オミダマを月の数だけ握り、五升桶の中に並べるのが一般であるが、須賀家ではオミダマを作らないと言う。どんな理由か明らかでない。炉には太い木の根を入れるのは「大歲の火」の昔話同様、歳徳神の灯明といった考えがあつてのことである。

・元日（1月1日）

若水汲みの特殊な行事はないが、朝起きて元日宿題は屋敷神から鶴音管・山王社・不動明王・山の神・大宮様・明神・白山さまに行く。精進料理で朝食をとるが、その時には必ずスベリヒュ（ひょっとええ事があるように）と粕汁（金を貸せるように）を食べる。餅を焼いて食べる家もあり、川井、竹井では元日トロロと称してトロロを三日間食べるところもあり、初詣を米沢に出かける家では初船で御面めとして家族が隠れるところもある。

・カイゾメ（1月2日）

貰い初め、書き初め、譯い初め、初夢などの日で、川井部落では占いを頼んで運勢や作柄などを占ってもらったりした。夜は白紙で舟を折り、宝舟と称し、吉夢の時には神棚に供え、凶夢のときは「裏に食わせろ」と3回唱えて川に流した。

・テラネンシ（1月3日）

不成就日で寺年始であったが、村内では「3が日は外さ騒がねなんだ」と言っていた。なお善光寺の和尚の各種家への年始は1月8日だったという。親戚への年始は1月5日より始まり、嫁は夫を伴って実家に行くことになっていた。特に夫婦の初正月の場合は嫁の家で手拭ぐらいいのものを用意して「近所廻り」をして妻の顔見せをやった。なおこの地区には1月7日の「七草」の行事は見られない。

・カセギゾメ（1月11日）

朝早く暗いうちに起き、墓を切って堆肥を小さく7・5・3に結んで7個または9個作って、且那が重そうに背負って田に運び、アキの方角に置いて来る。「鳥追い」も同時に行なう。帰って来て薑仕事をする男は背負網や馬の手綱・モチなどを作り、女は草履・ジンベなどを作った。また取り餅を神棚からおろし、最も大きいものは「鉛頭」が食べ、他の者もそれぞれ餅を食べ、力餅という。部落の中ではオミダマをカヌにして食べる家もある。大抵の家で薑汁を食べる。

・コモチノシリトリ（1月15日）

子持の年取りとか女の正月と呼ぶ。朝餅を搗き、12月28日と同じように餅をとり、12月28日に供えた餅をおろし、オミダマを小豆も入れて「アカツキガユ」として食べる。早朝

I 八幡原の環境

薺・豆殻木・カヤの棒を月の数束ねて雪中田植をする予祝行事がある。細原部落にはなかったが、カセドリの行事をするところもあり、子どもらが「コロコロ、コロコロ」と各家を回って餅をもらって行った。朝食後は団子さげを行ない、薺ミゴに切餅をつけ、マユ玉だとして下げる。一把握のミゴもその年の月の数と合わせて12本作る。団子下げが終らないうちに掃除をしていけないことになっていて、「掃除すると水口が掘れる」としていた。団子下げは大黒社・仏前・ウマヤ・木小屋・便所にも飾りつける。16団子と言って大きい団子を16個加えるのが普通である。



第3図 焙前の盆飾り

夕方までに子どもらが各家の松飾り、旧年のお札を集めて薺で包み、夜集まつがオサイトヤキをする。唱言は「ヤハエロー、センキスンバコ、ふっとんで行け」と言うが、細原では上・中・下組がそれぞれ一つづつ作る。オサイトの火に紙をかざし、それで体を拭くと病気にならないという「身拭き紙」、オサイトの火でその日掘った餅を焼いて食べる虫に刺されない（その日に掘いた餅を焼いて食べるにはオサイトの時だけという）。オサイトの火で煙草を喫うと虫歯にならないという。1月16日と同じに「地獄の釜の蓋も開く日」といって休みとする。

○廿日正月（1月20日）

子持ちの年取りの餅を下ろし、団子下げをする。団子の木の股は火伏せということで、火棚に下げるカギとし、団子の木を焚いてあたると若返りすると言う。その年に「年直し」の人がある場合はそのままにしておく。

(2) 2月より益までの行事

○年直し（2月1日）

土地によって1月29日または30日、31日というところもあるが、次第に2月1日が多くなった。男15・25・42、女13・19・33の年直しでは男42と女33の年直し盛大に行ない、男42の年直しは自分でとか、相祝いをしないと言われている。三滝松を飾り、祝宴の後に庭で小さいオサイトを作って焼く。62の年祝いは子どもがやってくれることになっていて、さらに喜寿、米寿、白寿と年祝いをする。なお「節分」の風は少なく、特に川井の安

2 米沢市八幡原の年中行事

郷では、「福は内、鬼は外」を行わない代りに大豆の枝にヤッカガシをはさみ雨戸の横にはさんで、「あお虫、ずい虫、はり虫」と唱えたというが、細原部落の須賀家も「節分」はやらない家だという。

○コトハジメ（2月8日）

12月8日と全く同様にヨゴレ餅を焼いて食べる。小餅を月の数だけとり、神棚に供えて仕事は休む。針供養の日でもあり、豆腐に折れ針を刺して川に流す。

○ヤマノカミコウ（2月17日）

春1月から3月までの17日は山へ登らない。山の神が立木を数える日だという。この日は若衆組の山の神講が山の神社で行われ、新加入者は挨拶することになっている。川井部落では新加入者は木で男根を作つて供えるという風習があった。一切は男子一つで行われ、昔は若衆頭が宰配をふって山の神の祭りをやったという。

○オミヤコウ（2月18日）

大宮子易大明神を祀る娘の講である。その日は餅を焼いて、子どもらも共に宿に集まつた。宿は頃り宿として、部落全戸加入であった。費錢を出して押み上げをする。「極めて汚なきことは、溜りなければ、汚き事はあらじ、内外の玉がき清く淨し」と唱言を18回くりかえし、神酒を汲み餅を食べる。その際部落に出産近い人があれば、短かいローソクを買って行き、そのローソクがなくなるまでには安置すると言っていた。小国町または高畠町泉間に代参を立てることもあった。17日は山の神講で男の休み、18日は大宮講で女の休みと考えていた。置賜地方全域の大宮講については江田忠氏の「大宮講の研究に関する覚書」（『生活文化』（米沢女子短期大学）vol.8. No.3～7）にくわしい。

○オヒガソ

「暑さ寒さも彼岸まで」と言い、彼岸は仏教上の行事であると同時に、農作業暦にも重要な一つであった。毎日変り御飯を作り、中日は牡丹餅をし、寺には吊し団子といって7つの団子を吊して持つて行った。7本仮に供えるということである。またこの日には米沢割出町のワカに死靈を出してもらいに行った。「彼岸漬」と言って種を水に浸したもので、「水20日、岡20日」と言って苗を作る準備に入ったが、塩水運が行われるようになって行われなくなつた。また牛蒡播きは雪代が退かぬうちに薄くと言って、畑仕事の始めと考えたものである。大抵の種は八十八夜を境に行ない、また種蒔桜、吾妻山の「3つ兔」（雪が消えて3匹の兎の姿になった時）のうちに薄くとよいなどとも言ったし、八十八夜から夜仕事を止めて本格的な田、畑仕事に入ったものである。

・モノノセック（3月3日）

女の節句であるが、置賜地方全般では5月節句のように盛んでないといふ（『東置賜郡史』下巻参照）が、人形を飾り、瓶に桜の花をさし入れ、桃酒を飲み、切餅を作つて田植時の茶菓子とした。草餅か赤飯をする家もあった。梅型の菓子を行商で米沢の菓子屋が売りに来たものともいう。



第4図 細原部落の籠守

・フドウサマの祭り（4月8日）

佐々家で不動様本尊を管理保管してゐるので、そこで開帳する。俗に「涙不動」と呼ばれ、盲目の者を助け、不動様が目が悪くなつたとも言われる。

・タカイヤマ（4月17日）

運開きと称して近くの山に登り酒を飲む風習があり、神遊ばせ行事で、白鷹町虚空蔵に参詣することもあった。

・5月節句（5月5日）

5月4日が菖蒲句で、菰巻きを作る。他にツノマキを作る家もある。戸口の屋根に菖蒲と蓬を束ねてさし、菖蒲酒、菖蒲湯を立てる。菖蒲湯を立てるとな蛇の害に合わないといふ。夕食にはアザキを味噌で食べ、鬼の侵入を防ぐのだと言つたり、アザキを鬼の牙と言つてゐる。5日には農作業の休日で「節句代をかくな」「節句代とかくと凶事に合う」とか「旱魃になる」とか言つてゐる。所払いされたということもあった。「節句の雨は虫になる」「裸代はかくな」「五月芹は食うな、ハンショウの卵が入つていて毒だ」と言つて忌むが、村落共同体意識が端的に表現されている禁忌とも言える。

田植は5月節句の前後に行われ、猫の手も借りたいと、かつては言ったものであるが、終了した日を「サナブリ」と呼び、手伝い衆を夕餉に招んで、朝を搗き酒を出し、来れない家には重箱で餅を配つた。サナブリの日には苗2把を田の神に供えるのは一般的な風習である。

・ムケノツイタチ（6月1日）

早朝は桑の木の下に行くなど言う。人の皮がむけると言う。スカナ（大黄）の実をとつて寝所に撒くがその時に「蚕の目ん玉、ふつぶせ」と唱える風習が竹井・川井部落に見られる。細原にはないが、蚕はスカナの実が好きなので、蚕が出たときには席の下に撒く

と、人の体に這い上つたりしないのだという。また夏の土用には藁草を探つて干したり、冬に食べるスペリヒユなどを採取しておく家も多かった。土用丑の日に鰯を食べる習慣はかなり古くからあったと思われる。

（3）盆行事

・タナバタ（7月7日）

七夕という語よりもこの地域では「七日浴び」と呼んでいる場合が多い。細原では東方の堤に子どもが小屋掛けして7日の早朝に水浴びをすると体が丈夫になると言つていた。川に近い場所では川原に小屋掛けをした。川の上流から薬水が流れてくるとも言われているが、ネブタ流しの名称は聞かなかつた。七夕飾りをするようになったのは、むしろ近年のようである。この日に墓掃除をし、川原から柳箸をとつて来て、盆益としたものである。

・墓掃り（7月13日）

この日から20日まで盆と言ひ、精霊迎えをする。大抵7月11日頃に蚕が上がる。この日の午後に仏壇の前に盆棚を作り、四角の棚の前面に掛け素顔をし、糸で吊した姫瓜、ホオズキ、夏リンゴ、コンブ、8寸ササゲ、さらに左右側面に経文を書いたものを下げ、繪入提灯を下げる。精霊棚の下にはこの季節の果物を盛る。墓脛にはガズギゴモ（墓座）の上に蓮の葉を敷いて果物、団子などの供物を供え、同時に無縫仏の供養もし、精霊を家に迎えるために、墓から帰つて家の戸口まで来ると、提灯の火から迎え火を焚く。細原では杉の葉を積んで火をつめたものといふ。川井部落では迎え火を15日まで焚くといふ。

7月14日は餅を抛いて笹にくるみ、15日にはアンガク餅（味噌をついたもの）を供える。嫁または娘の「お盆礼」は大抵嫁家の墓掃りが終つた14日か15日に行く。16日には「送り盆」で1月16日と同じに「地獄の金の盃も開く日」と言つて、盆踊りがある。歎前まではこの日から20日まで盆踊りが行われたもので、娘、甥はこの日まで実家で休んで来るのが通例であった。この20日盆で盆行事は終る。16日には「送り盆」で送り火を焚いて、精霊を寺へ送っていく。20日盆は20日正月と同じだと言つて休むのは、盆が畢る仏教上の行事としてよりも、節の折り目として、1年を半分に分けての新しい年という考えがあつたことの片鱗と見ることができる例とも言えよう。なお米沢市内には盆行事の1つとして一間とび團子」というものがあり、団子と茄子を串に交互に刺したものを畠味噌で食べる風習があることは注意しておいてよいことであろう。

・地獄様の釋日（7月23日）

上竹井の福泉庵の地獄祭りで、夜は念仏踊の甚句をもつて地獄供養をしたが、六地蔵に

I 八幡原の環境

夜泣きの子のために前掛けを奉納することもある。



第5図 細原部落の墓地

(4) 秋から冬の行事

・ハッサクノツイタチ（8月1日）

餅を捣いて仕事を休みにする風習があったが、山仕事の忙がしい細原などでは特別な休みはなかった。

・マメメイゲツ（8月15日）

枝豆・栗・柿・茄子・胡瓜など10

余穂のものを集めて、お盆に盛り月に供える。茹でた青豆を食べるが、隣部落の李山では、その日の豆はどこの島から盗ってもよいと言っていたところもあった。

・カザマツリ（9月1日）

立春から数えて210日の前夜に風祭りが行われる。稻の穂を剥いて神廟に供え、神酒を上げて行うが、平年は米粒12個、閏年は13個で豊作を祈念する。天の川が頭の上に来ると新米が食べられると言い、220日が過ぎれば稻刈り時期となる。

・ミクニチ（9月9日、19日、29日）

菊の節句の9月9日に餅を搗くが、菊の節句というより、19日、29日と共に苦の供養をすると言って休みとする。29日は「刈上げ祝い」にも当り、この日の餅は「梅の下の乞食も飢く」として、田の神・恵比須・大黒と子育て地蔵に供える。また9月20日頃が秋の彼岸の入りに当り、春の彼岸同様にする。ただし稻刈りの多忙な家では朝夕の供養だけをやり、中日だけ立派にすることにしていた。中日は牡丹餅を搗いて供える。またその年の月の数の餅を捣いて3日後に食べる家もある。稻刈りの多忙さを「秋サツキ」と呼ぶところもある。

・イモメイゲツ（9月15日）

豆名月の時のように、ハダゲイモ（炮芋＝里芋）を洗って、栗・葡萄などと共に供え、合せてその年の畓からの収穫を月に供える。川井の安部家では曾祖母が小さいときにホウソウを患い、ホウソウ神に願をかけて、「子どもの代に芋明月の夜に芋を食べないから、ジャガ（あばた）にならないようにしてください」と祈願したので、それ以来芋明月の夜は芋を食べないという。

・ヤマノカミコウ（10月1日）

刈り上げを境にして、田の神が山の神に帰る日なので、山仕事は休みとして、2月17日と同じ行事を山の神社で行なう。若衆全員が朝食後に集まり、手元をわざわざ手に酒を汲み交すもので、湯を沸かして入浴をし、掛軸をかけて拝み上げする。春の山の神講の折に供えた男根を並べて礼拝するが、その後1人1升ずつ出し合った米で餅を焼く。この日に山に登らないのは「この日山の神が山の木を数えるが、間違って木に数えられると死ぬ」と細原部落では伝えている。また「三股の木は山の神の休息場だから伐らない」とか「山の神はきびしい神で、山で謹をやると、やっかんで怪我をさせたり、殺したりする」とも伝えている。61才になることを「木の段」など呼び、娘捨て伝説を語るものこの日だったと言う。

・ナノトシリ（10月10日）

この日は菜・大根の年取りの日で、この日に大きく太くなると言って葉類は食べない。またオタナサマの祭りをする家もあり、オタナサマは大旦那様とかお田の神などとも言われるものであるが、置賜地方独特の神で、本家筋に多く、この地域については安部忠内氏の調査がある（『置賜民俗』置賜民俗学会第7号所収）。

・オミヤコウ（10月18日）

大宮様のお年越しで、順宿にして講中が餅搗きをし拝み上げをする。旧来は各月18日に順宿を開いて、代参で小国町の大宮子易神社に参詣したり、高畠町泉岡の大宮社に行っていた。講員は各戸から1人で、さしつめ縁講として骨休みの意味もあった。2月18日の場合と同様である。

・エビスコウ（10月20日）

赤飯を炊き、尾頭付きの魚を供え恵比須さまの年越しをするが、各家でやるようになって来たが、元来は商家の間で講を行なっていたものが、米沢市との接触から部落に入り込んで定着したものと思われる。山の神講・大宮講が部落組織と結びついた一種の義務制であったのに対して、恵比須講は各家で行われ月待行事との「お廿日講」の日にも当ることから、これと混交して存在したものようである。旧家である川井の太田家では餅を供えるという。廿日講の場合には順宿の制度をとっている。

・アブラシメ（11月15日）

「秋行」といって嫁が実家に帰り、骨休みをする行事が県内に広く見られるが、油絞めがそれと類似のこの地域の行事である。娘が竹管を持って実家に帰り、一年間に使う斐油を貰って来る。実家では菜種油を絞り、餅を捣いて娘を待つ。

I 八幡原の環境

・オダイシコウ（11月7, 13, 17, 23, 27日）

弘法大師がわれわれの代りに修業されているので粥を供えるのだと言い、23日が祭り上げの日である。そのとき御飯に塩の入らない黄粉をかけ、萱箸を供える。これには伝説がついている。長い坐禅から立たれたとき、よろけてしまって熱い汗で顔を火傷してしまったので、塩味はつけないという。またその朝に旅に出ようとしたら、丁度薙のかくれるほどの雪が積っていたので、この雪を「難かくしの雪」と呼んだり、これが続ると本格的な雪の季節になるといいて、23日朝の雪を「オダイシ荒れ」とも言う。昭和の初め頃までは7大師講を行なっていたが、戦後は3大師講しか行わなくなつた。これもまた冬への節の折り目と考えられる行事と言える。

・カビダシモチ（12月1日）

家によって「カブダシ」「カビダレ」「カビダシ」と呼ぶが、「株出し餅」ということで農家では餅を搗く。また魚屋とか水車米搗き、湯屋、豆腐屋のような水や川を利用して商売をする家では1日仕事を休み、餅を搗いて水神（川神）に捧げる。このような本来の「川浸れ餅」が農家に入って「株出し餅」に変形したのは、一種の予祝あるいは祈願に結びついたものであろうと思われる。

なおこの調査には細原部落の鈴木利一氏及び須賀はるさんの御協力を得たが、参考文献として川井部落の故安部忠内氏の『上郷の民俗』（武田正編、昭44年）を利用したことをしておきたい。

（武田 正）

第2章 調査までの経過

上述の工業団地造成計画予定地は、主として米沢市万世町堂森地域の内に属するが、これをとりまく集落としては、やや離れて東方に万世町牛森、西南方に万世町金谷、北方に竹井などの小さい村落がある。南方15kmのところを、そのかみの綱木みち、三崎県令改修の万世大路（国道13号線）が垣々と走っている。とはいものの、団地予定地域は山ふところに抱かれて雜音かそけきところであった。それだけに開発の面では、長い間、むしろ停滞的であり、豊かに恵まれていたのは、自然の景観であったといえよう。しかもこの地域には、天王川（梓川）から浸透する地下水が廻所の田地に湧水となってほとばしって泉となり、これが自然景観にさらに水色風情を添えるのである。

この自然に恵まれた地域に、遠い先祖たちの遺跡が豊かにあるであろうことはいうまでもない。ここでの遺跡の分布状態を調査し始めたのは、今は高橋堅治、宮坂善助氏らであった。高橋氏は昭和30年代前半に置賜地方を調査して廻ったが、その所見結果を、氏は五万分の一地形図に、土器・石器の出土地として締密にドットさせていた。同じころ宮坂氏も持ち前の建脚によって、置賜地方を広くかけ廻り、遺物片の採取に年月をかけておられた。昭和37年度における山形県の遺跡分布調査に当っては、われわれは、米沢市付近の遺跡については、主としてこれらの人びとに助力を仰いだが、その結果は『山形県遺跡地名表』となって公刊されている。工業団地予定地付近では、梓山・牛森・木田・長手などに5つの地点を算えている。そしてこの計数はその後数年間、更新されることがなかつた。

これに続く頃、地元に住む考古学愛好の若人たちは、この地区にある遺跡の発見に懸命の努力を積み重ねていた。手塚孝・秦昭繁君たちは、工業団地予定地の中枢部にあたる堂森地区で8ヵ所（A～H）、また、程近い金谷地区で2ヵ所（A, B）の遺跡を確認するまでになっていた。特に、昭和45年6月の堂森H地点の弥生文化遺物の採集は注目すべきものがあり、これが端緒となって、同年秋の山形大学教育学部考古学資料室による発掘調査（加藤稔・佐藤庄一両氏が中心）が行なわれたのであった。調査経過等は横尾秋子氏により「米沢市堂森遺跡出土の弥生式土器」として記述されているが、これによつて、本県の原始稻作農業は、從来知られていたよりも土器型式でさるに一型式は古く遡らせ得ること

Ⅱ 調査までの経過

とが明らかになった。

このような機運は、一方において、地元の若い考古学爱好者の力を結集する動きともなった。すなわち、「置賜考古学会」という名の学術研究の体制の発足である。同じ45年の残暑きびしい9月であった。橋爪健・真室公一氏らを代表とし、龜田晃明・安彦政信氏らと前掲の行動力ある青年研究者が地元への好意に支えられて活動の歩を踏み出したのである。そして同年11月に刊行された機関誌『置賜考古』の創刊号には、堂森遺跡(H)の弥生式土器・管玉などが図示されている。^④

さらに翌々47年の夏には、地区の北部にある上竹井の遺跡が、橋爪健氏を団長、佐藤鎮雄氏を委員長とする調査団の手によって発掘調査され、遺跡例を新たに追加している。同年8月の発掘手引書は、この地方における縄文後期の文化様相を把握しようとしたものである。

こうして置賜地方の原始文化の研究は、この頃、とみに八幡原周辺に集中された観があつた。同じ47年10月に刊行された『置賜考古』第3号には、所載の調査報告文9篇のうち、6篇までが堂森遺跡とその周辺の遺跡を扱っているのである。このうち間もなく、米沢日報紙は、昭和48年元旦号の半面のスペースを割いて、「米沢の考古学」と題する真室公一氏の論文を載せ、米沢周辺の遺跡とその重要性を紹介している。堂森遺跡などの団地予定期の遺跡群が大きく述べられていたのはいさまでない。

上記の『置賜考古』第3号によると、昭和47年10月の時点で確認された遺跡は、八幡原周辺に限ってみても、16カ所に達している。そしてそのかわる年代は縄文時代早期から

第1表 米沢市八幡原周辺の遺跡地名表(1972年1月現在 手塚・秦・安彦(1972)より)

No	遺跡名	所 在 地	地目・標高	縄 年 期	出 土 遺 物
1	猪 原	上 畑	山林・261m	糞山Ⅱ・室窯・大木1・5・6・10	縄・馬・搔器・石皿・土師器 ・須恵器
2	竹井A	上 畑・上竹井	畠	256	表杉ノ入
3	竹井B	" "	"	256	土師器・須恵器
4	竹井C	" "	"	256	大木10・墓之内Ⅰ・Ⅱ・加賀利
5	室森A	万世町・堂森	"	256	大木10・織文後期・平安
6	" B	" "・八幡原	原野	256	縄文早中期・大木10・織文後期
7	" C	" "・堂森	水田	256	大木6・織文後期
8	" D	" "	"	254	縄文中期・南川泉Ⅱ
9	" E	" "	"	250	大木4・5・6
10	" F	" "・八幡原	原野	256	縄文早中期・室窯・大木6・9・10
11	" G	" "・堂森	水田	256	縄文前期
12	" H	" "・八幡原	原野外255	羽佐中畠御用(樹形山・円山)	縄・石盤
13	金谷A	" "・堂森	畠	260	大木10・加賀利B・大前A
14	" B	" "	田林・262	大木10・平女	縄・土器・須恵器
15	" C	" "・牛森	畠	262	縄文(?)
16	牛森古墳	牛森3148	"	268	古墳(未)

歴史時代まで数千年の長きにわたるという多彩さである。第1表のごとくである。

一方、この地域はどのように開発されてきたか。観察してみよう。

遠く杳かな昔はさておき、今(1975年)から600余年前に眼を向ける。豊かな地下水による泉は、この地域開発を局部的に進めたこともあるらしい。たとえば、堂森の湧泉(清水)には、14世紀の中頃(延長2年11月)、今善光寺という寺院が建ち(今松心山善光寺)、そこでは、大部巻(600巻)の大般若経が筆写される程の僧衆を擁していたことがある(立石寺蔵写經奥書)。

200年すぎるこの地域の村々は「や代之庄」に属していた。同庄32カ村の内、当初の部分に、北かた・つき山・たけい・中の目・くわ山などの村があげられている。北方・梓山・竹井・中の目・桑山の村のことであろう。これら諸村に支配者から課せられた反当課税が段鉄帳として記録されているが、^⑤その額は開発の程度を示すものと思われる。その額は次表第I欄のようである。記される村名は現堂森の周辺の村々であるが、堂森部落と覺しき村名は見当らない。しかしその後、半世紀余の年月が過ぎると、堂森の村の名が記録されてくる。それは蒲生卿安によって文禄4年(1595年)に編さんされたという『邑鑑』である。これによると、堂森部落およびその周辺の村々の戸数・人口・石高は次表第II欄のようである。^⑥

第2表 八幡原地域村々開発沿革表(柏倉 1975)

I 文政7年 (1858)	II 文禄4年 (1595)	III 文政10年 (1827)	IV 明治11年 (1878)			V 明治24年 (1891)								
			村名	没戸数	戸数	人口	石高							
堂森	メ文	44	人	166	418.7	18	石	110	355.543	52.7811	21	125	21	139
梓山	つき山	7.252	石	57	375	1227.07	82	481	1160.159	1442.2909	118	697	117	732
竹井	たけい	5.000	人	73	313	1124.17				222.8424	106	538	104	585
桑山	くわ山	3.400	人	42	194	543.19	23	140	477.102	131.2303	27	163	27	175
金谷										53.3624	26	138	25	150

これによると、南方の梓山・北方の竹井が、ともに千石を越える石高が帶びているに對し、堂森は、南の桑山にも劣って418石余であった。それだけ開発が遅れて始まったというべきであろう。蒲生卿領内218カ村の内96カ村だけが堂森より石高で劣っていたのであった。

この状態から、その後の時代経過とともに開発が進んだかといふと、必ずしもそうではない。232年たった文政10年(1827)の村目録によると、街道沿いの梓山部落は別として、堂森・桑山などは戸数も人口も著しく減少していた。特に堂森は、文禄4年度よりも人口で34%、家数で59%の減少となって、減少度の他の部落よりもだって落ちこんでいる。表の第III欄はこの事實を物語っている。

Ⅰ 調査までの経過

19世紀初頭におけるこのような過疎化の現象は、19世紀の後・末期になっても著しく変ることはなかった。明治11年（1878）の記録によると、^⑯ 街道沿いの桟山などは、文政10年以來50年の間に、戸数・人口ともに44倍の増になっているのに、堂森部落は家で3軒（17名）、人口で16人（15%）の増になっているだけである。表の第Ⅲ欄はこの事を物語っている。13年後の明治24年になんしても、堂森部落では、戸数の増加ゼロ、人口の増加13人という、同じような停滞性が続いている。^⑰ 第V欄にこのことが現れている。

総じていえば、堂森を中心とする一帯の地域には、溢れているものは、豊かな自然風光であり、その景観の中にいたりかれて静まりかえって小さな集落がひきづいていたということである。

このような状態のところにおし寄せてくる最初の開発の波は、日本が戦争気構えに入りつつあった頃である。その波は飛行場の建設という形をとっていた。すなわち、昭和10年4月、^⑱ “八幡原飛行場”が着工されたことである。敷地 88,000坪（290,400m²）、そこを作られる格納庫の敷地は 120坪（396m²）、その工費 33,000円の予定であった。

この八幡原飛行場に、4年後の昭和14年11月7日、某航空所属の飛行機、8機が飛来した。4日後の11日には米沢市内に米沢航空株式会社が創立され、主として海軍飛行機の部品製作を始めたのは、このような機運に相応したものであろう。^⑲

続いて16年7月には、八幡原飛行場に練武廠舎が建設された。同年末に日本は太平洋戦争に突入したのであったが、そのさ中の昭和18年5月8日に、同地に米沢市の弁護士・西海枝信一氏の頌徳碑が建設されたが、その理由は、同氏が米沢市会副議長・米沢図書館長の要職を歴任しながら、終始、八幡原飛行場の建設に尽力したその功を頌えるためであった。ただ氏はこの時より5年前の昭和13年1月3日、66才を以て永眠している。^⑳

昭和20年8月、太平洋戦争の敗北は、この開発を決定的に挫折させた。飛行場であったところは、このうち、ある時期は競馬場として利用されたこともある。観覧用の桟敷なども構築されたようだ。桟敷の基礎部分は、今回の遺跡調査に一部を現わし、調査団をびっくりさせたこともあった。その後、面積の半分程は農地として改良されてきている。アカマツ・カラマツ・スギなどの林や原野が畑地を包みこむ景観を呈し、所々には扇状地特有の清水が湧き、野鳥のさえずりも聞かぬ風情である。こうして南置賀郡万世村の一画として、この地は山すそのどかな農村となっていた。

この豊かな自然景観の地に、大きな開発の波が再び押しよせてくる。昭和20年代末期の町村合併の大きな潮流にあって、万世村は、近接の広瀬・六郷・塙井の三カ村とともに、

昭和29年10月1日、米沢市と合併することになったのである。^㉑ この前後の期間中に、周辺の10カ村を合併して、人口3.3倍、面積30倍に膨れあがった新生の米沢市は、地方自治体として、市の経済的高度化を図ることとなった。そして企画されたことは、古くからあった織維工業の他に、新規企業の誘致の方針であった。昭和32年2月に、企業誘致委員会による誘致計画が立てられ、その建設振興計画は順を追って進められた。

第一次計画は昭和33年に始まり、各次計画の実施に3年ないし7年をついでし、昭和47年には第三次計画がかなり進行していた。この期間の計画は、企業業種ごとに関連企業とまとまって然るべき立地地点に集まるものであった。市中央部から見て東部の八木橋地内（米沢団地）、東南部の東松原付近（南団地）、北部の中田地区（北団地）が、それぞれ一次、二次、三次にあてられた。いずれも市街部に近接し、国鉄奥羽本線からは西側、すなわち市街側にある。こうして進んだのち、さらに大規模な計画が第四次として登場する。

昭和47年5月、田中内閣が成立して間もなく、その政権構想であった日本列島改造論が正式に行政の計画にあがつた。この所論では、大規模な工場を首都圏・近畿圏から追い出そうとし、それらの工場を中心的に、人口25万程度の人間・自然・産業の調和した理想都市を造ろうというのである。

國の側におけるこの動きと時を同じくして、米沢市においても第四次建設振興計画が胎動しようとしていた。米沢市の計画とは、從来のそれより確かに大規模の工業団地を作ろうというのである。場所は国鉄奥羽本線の東方、八幡原界隈、そこで見込まれる広さは從来の最大面積の八木橋地内のそれの数倍である。付近に山あり森あり、団地内にとり入れて生かすべき自然景観に事欠かぬ。さらに考えられる広域都市圏には関わる人口23万人を超えることが指標とされる。

米沢市の立てたこの構想は、昭和47年の末、「工業再配置・炭坑地域振興公團」に対し示された。翌年には同公團に対して、山形県知事・米沢市長から、工業団地として造成することについて要望書が提出され、これが受理されている。公團がそのための調査を開始したのは48年10月末であるが、その前月14日に調査を着手する旨の通知を市側に發している。^㉒

この該当地域内に數々の原始・古代の遺跡が分布していることは、これより前にすでに明らかにされていた。その数も16を算えていた。しかし、それで悉くしているとはいえない。したがつて、この時、改めて出来るだけ精密な遺跡分布の実態を把握が必要がある。こうして県教育委員会は、米沢市教育委員会・置賀考古学会の協力を得て遺跡分布調査を行なうこととなった。期間は48年9月7日から19日まで、条件と日数との関係で試掘は行な

Ⅰ 調査までの経過

わない。そしてその結果は、これまでに確認された16カ所の遺跡に加えて、新しく28遺跡を確認することができた。合計44遺跡。その古きは繩文早期から新しきは歴史時代に及ぶ。¹⁵

昭和48年8月、米沢市議会に、米沢八幡原中核工業団地特別委員会が設けられてから、回を重ねて委員会が開かれ、該団地の基本計画が練られてきた。その計画作成方針の5カ条の1つに「貴重な自然環境及び文化財資産等を極力保全する」という条項がある。これによって、当然、調査せらるべきことは、すでに確認された44の遺跡の各々が、如何なる性格をもち、学問的に如何なる重要度をもつものなのか、そして新しく生れる工業団地の中に如何なる程度に保存せらるべきものなのか、ということである。この調査が、団地造成工事と関わりながら進められなければならない。

この調査のための組織を規定する要綱（6カ条より成る）が作られ、昭和49年7月15日から施行。これによって結成された組織が「埋蔵文化財調査委員会」として発足したのは同月20日である。調査委員会の構成は次の通り。

調査委員長	柏倉亮吉	山形県文化財専門委員（山形大学名誉教授）
調査委員	栗林茂雄	山形県教育庁文化課長
“	沢田万勝	工業再配置公団米沢開発所長
“	佐藤基助	米沢市開発部長
“	山田武雄	置賜考古学会会長
“	橋爪健	“ 副会長
調査副委員長	加藤稔	山形大学講師・山形工業高校教諭
横山一郎		米沢市教育委員会教育長
橋本寛一	“	教育次長
稻葉信隆	“	社会教育課長

実地に調査に当る調査団が委員会の下に設けられた。年度半ばの発足のため、少なからぬ困難があつたが、49年度は下記の人々が当った（順不同）。

調査団長	柏倉亮吉	山形県文化財専門委員（山形大学名誉教授）
調査副団長	加藤稔	山形大学講師・山形工業高等学校教諭
調査員	平吹利数	白鷗町立東中学校教諭
“	手塚孝	米沢製作所
“	佐藤穏男	米沢東高等学校教諭
“	橋爪健	米沢市立南原小学校教諭
“	龜田晃明	米沢女子高等学校教諭
“	小池一志	自営
“	安彦政信	村山保健所

“	秦昭繁	日立米沢電子株式会社
“	武田正	米沢東高等学校教諭
“	大友義助	山形県立博物館
“	佐藤鎮雄	山形県教育庁文化課
“	佐藤庄一	“
“	佐藤正俊	“
“	尾形与典	“
“	舟山良一	“
“	渋谷孝雄	東北大学文学部研究生
“	東海林次男	山形大学人文学部専攻生
事務局員	稻葉信隆	米沢市教育委員会社会教育課長
“	皆川恒夫	社会教育課長補佐
“	金子正俊	社会教育課主事
“	須藤俊克	社会教育課嘱託

7月20日の調査委員会で検討されたことの一つは、さし当って調査すべき地点はどれかという件であった。結論として、公団地域内に予定される幹線道路にかかる遺跡を第1年次に行なうことになった。こうして発掘調査は加藤後を中心として7月24日から開始された。

注

- ① 遺跡地名表 昭和38年3月 山形県教育委員会
- 全国遺跡地図(山形県) 昭和41年3月 文化財保護委員会
- ② 遺跡地名表(山形県史・資料篇II・考古資料) 昭和44年3月 山形県
- ③ 堂森遺跡発掘調査資料集 昭和45年10月 堂森遺跡調査団
- 木沢市堂森遺跡出土の弥生土器(1) 昭和48年11月 横尾秋子
(山形史研究会「最上川流域の歴史と文化」)
- ④ 置賜考古(創刊号) 昭和45年11月 置賜考古学会
- ⑤ 全(第3号) 昭和47年10月 置賜考古学会
- ⑥ 米沢日報 昭和48年元旦号
- ⑦ 天文7年御段錢古帳 昭和42年 東北大学日本文化研究所(日本文化研究所研究報告別巻5集)
- ⑧ 邑羅(文永4年、蒲生齊賢によって編纂されたといわれる)
- ⑨ 文政10年村目録(吉田義信博士著 “置賜民衆生活史”による)
- ⑩ 山形県一覽圖 明治11年9月 佐藤周哉編
- ⑪ 全国町村現況 明治24年
- ⑫ 増補訂正・米沢大字表 昭和46年12月 米沢郷土史研究会
- ⑬ 山形県町村合併誌 昭和38年10月 山形県
- ⑭ 米沢広域都市圏の構想
- ⑮ 米沢八幡原中核工業団地造成係団地分布調査報告書 昭和49年3月 山形県教育庁文化課
- ⑯ 米沢八幡原中核工業団地基本計画 昭和49年6月 工業再配属・産炭地域振興公園

第3章 分布調査の概要

第1節 調査の経緯

米沢八幡原中核工業団地造成計画が確定したので、昭和47年11月山形県教育委員会と米沢市教育委員会は現地視察を実施した。視察は地元置賜考古学会の協力で、16の遺跡を見るとともにそれらの遺跡より出土した遺物を確認するなど大きな成果を得た。これら16の遺跡の保護のため協議した結果、造成計画予定地内の分布調査を実施することになった。調査は県教育委員会が市教育委員会と協力して昭和48年度に実施する予定で、試掘を含む大規模な調査が計画された。しかし用地買収が難航し、昭和48年度早々に実施する予定が大幅に遅れ、ついに試掘を断念せざるを得ない事態に追い込まれた。にもかかわらず分布調査は急ぎ必要があったので、昭和48年9月分布踏査を実施した。

調査は9月7日より19日にかけて実施した。橋爪 健（米沢市立愛宕小学校教諭）・亀田晃明（米沢女子高等学校教諭）・手塚 孝（米沢製作所社員）の置賜考古学会会員の協力を得て佐藤鎮雄（県文化課技師）・尾形与典（同嘱託）・横戸昭二（同委嘱調査補助員）の三名の山形県教育厅文化課職員が調査にあつた。地元米沢市教育委員会では英 進（社会教育課主事）が地図・地籍図面の手配等を行なった。

調査方法としては、同市金谷・堂森・八幡原・牛森・川井細原・上郷竹井にかけて約800haの地域を縦密に地表面観察踏査（聞き込みも含む）・ボーリング探査する方法を用いた。畠地等では地表面観察により表面採集を行ない、原野・林では既存の掘り穴の観察とボーリング探査を行なった。後者の場合、非常に困難であったが、八幡原等ではすでに盆栽・庭木用の松の木等を掘り出した穴がたくさんあり、しかも地元の研究者が試掘を含んで相当縦密な分布調査をしているので比較的詳しい内容をつかむことができた。表面採集資料は断片的なものが多く困難ではあったが、遺物の種類や散布量、散布範囲によって集落跡等の遺構に結びつくものと、そうでないものを区別した。範囲については、表面観察とボーリング探査だけでは正確に把握し得ないが、遺物の散布状況と土地利用状況・立地その他の条件を総合判断しておおよそのところを把握し、5千分の1地形図に記入した。

調査の結果、置賜考古学会で確認した16遺跡に加えて新しく28遺跡を確認できた。すなわち、金谷地区に10カ所、堂森・八幡原地区に17カ所、上郷井地区に6カ所、牛森辻の堂地区に3カ所、竹井横山地区に2カ所、細原前川原地区に2カ所、牛森・桑山地区に2カ所の合計44カ所である。

第2節 調査結果—44カ遺跡群の概要—

調査結果にもとづき、確認した44遺跡の概要を述べる。遺跡の位置および範囲については付図を参照されたい。なお遺跡の範囲は前述した方法によるものであるため大いに変更される余地があることをことわっておく。また、先に発行した報告書（山形県教育委員会 1974）には誤植もあり、さらにその後の調査で確認したことも加えて修正してあるので、今後はこれによりたい。

1 金谷遺跡群

金谷・堂森の一帯・桑山の一部に10カ所の遺跡がある。工業団地の西隣にあり、直接団地内には入らないが、将来は開拓した住宅地になるとみられているところである。国道13号線と堂森山の間の地域であり、置賜地方でも古いとされる金谷八幡神社の東側一帯である。この一帯は柿川原状地層縫隔部の西側にあたり、西を流れる羽黒川によっても影響されたとみられる。特有の湧水や小川が流れ、微高地となっているこの一帯は縄文時代遺跡の立地としても良い地形である。以前は畑が多かったらしいが最近次々に開田されてきている。

No.1（小谷地）遺跡（第四図版1）

所在地は、米沢市大字桑山字小谷地1877～1894、1849、1867、1863、番地である。標高265mの平地で、現状は水田および原野となっている。昭和44年には場整備が行なわれた際に、堂森在住の手塚 孝氏が石器を発見した（第四図版1）。調査員が現地を訪れたときは水田が耕作され、原野には草が一面に茂っていたためそれ以上のことは確認できず。縄文時代遺物散布地とみられ、範囲は水田の状況等により東西85m×南北60mの中にあると推定された。

No.2（水神前）遺跡

所在地は、米沢市大字桑山字水神前3413～3417、3419～3422、3425～3436、3459、3465、同字上柿の木3244番地。標高265mの平野で、現状は畑および林である。畑より縄文時代土器片・石器剥片4点を採集した。採集地点がばらつき、畑の状況からみて70m四方の中に範囲をもつ縄文時代遺物散布地とみられる。

No.3（大通水）遺跡（第四図版9）

所在地は米沢市大字桑山字大清水3185～3195、3222～3224、3227～3238、3241～3243、同字上柿の木3247～3255、3258、3286～3270、3273～3282、同大字牛森字堂森4265～4268

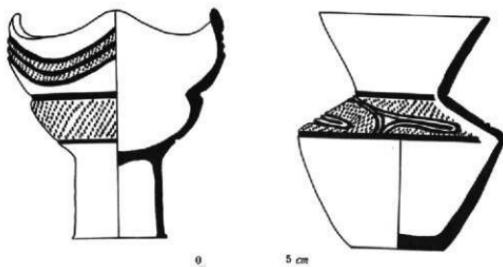
番地。標高 262 ~ 284 m の畠および林で、南に小川が流れている。昭和42年堂森在住の手塚孝信氏がブルで削られた一部の畠より繩文時代土器片数点を発見した。その後、石鏡・石槍・石器剥片10箇点を採集している。調査員も繩文土器片10点を採集している。おそらく繩文時代の集落跡とみられ、範囲は遺物の散布状況により東西 150 m ・南北 190 m の中ににあると推定される。以前に“金谷C遺跡”と称されたところである（真室 1970；p.16, 手塚他 1972；p.13）。

No.4 (柿の木) 遺跡 (第三図版 12, 15, 24, 第五図版 7)

所在地は、米沢市大字桑山字下柿の木3311, 3321 ~ 3327, 3330 ~ 3332, 3295番地。標高 262 m の平地で、南に小川が流れる。現状は畠および水田で、水田部分は開田工事のブルによって大半部分が破壊されたとみられる。開田工事は昭和43年で、堂森在住の手塚 孝氏が遺物を発見した。遺物は、大木10式併行期の磨削繩文土器片、石鏡 6 個、搔器 2 個および砥石 1 個等繩文時代中期のものと土器器片・須恵器片の歴史時代のものである。調査では偶然に井戸掘り穴を発見し、三つの地層まで確認した。I 層（黒土層、遺物包含層）～II 層（黄色砂質土層、無遺物層）～III 層（黄色砂礫層）であり、I 層に遺構らしいお立ちこみも確認した。そして石器剥片 3 点を採集した。繩文時代集落跡および歴史時代遺物散布地とみられ、東西 90 m × 南北 70 m の範囲をもつとみられる。以前に“金谷 B 遺跡”と称したところである。（真室 1970；p.16, 手塚他 1972；p.13）。

No.5 (ニタ俣 A) 遺跡 (第 6 図, 第三図版 1, 11, 23)

所在地は、米沢市大字堂森字ニタ俣 267 ~ 270番地。標高 261 m の平地で、現状は原



第 6 図 八幡原 No.5 遺跡出土の土器（『置脂考古』創刊号 1970 より）

野および畠地である。堂森在住の手塚 孝・金谷在住の秦 昭繁両氏により昭和43年に発見された。このとき、楕円形の石臼（80 × 40 cm）および多量の遺物を採集した。大木 9 ~ 10式併行期の土器片・加曾利 B₁ ~ B₂ 式併行期の合付鉢、壺、大洞 A 式併行期の土器片および石匙・石鏡・石鏡状石器・石錐・磨石・凹石・石皿等19点である（手塚 1972；p.13）。調査においても繩文土器片および石器剥片を採集できた。まだ完形を含む土器器も以前に得ていている。これらにより繩文時代中期・後期・晩期末および歴史時代（平安時代）の集落跡の存在を推定できる。遺跡の範囲は 60 m 四方におよぶとみられた。以前に“金谷 A 遺跡”と称したところである（真室 1970；p.13）。

No.6 (ニタ俣 B) 遺跡

所在地は米沢市大字堂森字ニタ俣 257 ~ 259番地。標高 261 m の平地で、現状は水田および畠である。堂森在住長沢氏が開田されたときに遺物を採集している。遺物は分銅型打製石斧・石器剥片 11 点である。水田部分は開田のブルにより相当破壊されたらしい。繩文時代遺物散布地で、範囲は 70 m 四方の中にあるとみられる。

No.7 (東原) 遺跡

これは遺跡である可能性をもってとりあげている。所在地は米沢市大字堂森字東原 234 の 1 番地。標高 262 m の平地にあり、現状は林である。径約 7 m の塚であり、人為的な土盛りである。ボーリング探査では内部に石があるようでもあった。古墳もしくは歴史時代の墳墓の可能性をもつ。

No.8 (下原田) 遺跡 (第三図版 5)

所在地は、米沢市大字堂森字下原田 214 ~ 215、同字上原田 125番地。標高 261 m の平地。現状は水田および林であり、昭和43年の開田工事の際に一部破壊されている。金谷在住我妻氏が石鏡・石槍等の遺物を採集。また昭和45年堂森在住手塚 孝氏が石鏡・石器剥片等を採集。このことより繩文時代集落跡とみられ、範囲は 70 m × 40 m におよぶものと推定される。土地の人は通称“原田遺跡”といっている。

No.9 (八幡堂) 遺跡 (第 7 図)

所在地は米沢市大字堂森字八幡堂 295 ~ 305、311 ~ 328、字大門 436 ~ 445番地。標高 257 ~ 259 m の微高地にあり、現状は水田および畠である。昭和45年開田工事の際金谷在住の秦 昭繁氏により発見される。遺物は繩文時代前期の土器（大木 4 ~ 6 式併行期）・石器（石鏡・楕円形石匙・石錐・磨石）多数である。またこのとき秦氏は住居跡の柱穴とみられるピットも発見している。その後繩文時代晩期とみられる土器片を手塚 孝氏が採集している。東西 160 m × 南北 140 m の範囲が推定される。繩文時代前期および晩期の集

II 分布調査の概要

落跡とみられる。開田工事の際にかなり破壊されている。以前に“堂森E遺跡”と称したところである（真室1970；p16, 手塚・秦他1972；p11）。



No.10 (前野) 遺跡 (第五図版8)

所在地は米沢市大字堂森字前野
282～288番地。標高260mの平地で、現状は水田および畑である。昭和43年墳場堂森在住の手塚 孝氏が磨石や

第7図 八幡原跡9遺跡の近景

石器片を少量採集している。調査のときは、草のため遺物を確認できなかった。おそらく縄文時代遺物の散布地である。範囲は40m四方の中にあるとみられる。

2 八幡原遺跡群

堂森山より焼山に至る間は、即ち堂森より八幡原にかけての一帯は大変遺跡の密集したところである。極端な言い方をすればこの一帯が一つの遺跡である。工業団地西辺にあたり、一部水田もあるが、林および原野・畑である。桟川扇状地の末端にあたり、湧水の豊富な一帯である。南より北にかけて緩く傾斜しているが、概して平坦である。この一帯には17カ所に遺跡がある。殆んどが縄文時代遺跡であるが、弥生時代・古墳時代のものもある。

No.11 (堂森東) 遺跡

所在地は米沢市大字牛森字堂森東巷4428～4430番地。標高259mの平地。現状は畑および道路である。調査により石器破片・剥片を数点採集できた。縄文時代遺物散布地であり、範囲は東西40m×南北25mと推定された。工業団地に入らない。

No.12 (耳取B) 遺跡

所在地は米沢市大字堂森字耳取614～620、大字牛森字慶治清水4505～4508、4492番地。標高259mの平地。現状は畑である。昭和42年に堂森在住の手塚 孝氏が石器剥片を探集したが、調査においても採集できた。縄文時代遺物散布地とみられ、範囲は東西60m×南北50mの中にあると推定された。工業団地には入らない。

No.13 (耳取A) 遺跡 (第三図版2)

所在地は米沢市大字堂森字耳取631～641、字干場上386～390番地。現状は水田・畑

2 調査結果

および宅地である。標高257mの平地である。昭和43年堂森在住の手塚 孝氏が遺物を発見している。遺物は石鏃・石ベラ・不定形打製石器・石核・石皿および棒状磨製石器等である。縄文時代集落跡とみられるが、時期不詳である。水田部分は昭和45年の圃場整備で相当破壊されている。以前に“堂森G遺跡”と称したところである（真室1970；p16, 手塚他1972；p12）。工業団地内には入らない。範囲は東西130m×南北150mの中にあるとみられる。

No.14 (慶治清水A) 遺跡 (第三図版29)

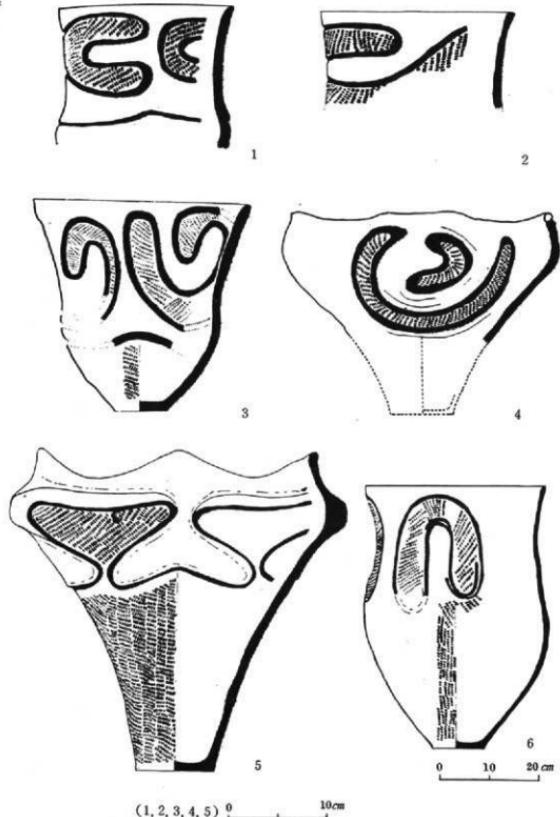
所在地は米沢市大字堂森字慶治清水661、665～669、676～679、字山影557、563～568番地である。堂森山北東山麓の標高257mの緩傾斜地。現状は水田・畑および原野で、水田部分は開田工事により大部分が破壊されている。昭和42年に手塚 孝氏が遺物を多量に採集している。調査においても遺物を採集できた。遺物は、蛇鱗による連続山形文・円形および幾形の貼付文を有する縄文前期大木5、6式期の土器、平行弦文・捺糸文を有する縄文後期初頭の土器および石鏃・石錐・磨製石斧・磨石・凹石・石皿等の石器である。縄文時代前期および後期の集落跡である。範囲は160m×120mにおよぶとみられる。一部工業団地に入れる。以前に“堂森C遺跡”と称された遺跡である（真室1970；p16, 手塚他1972；p10）。

No.15 (慶治清水C) 遺跡 (第三図版18, 第四図版10)

所在地は米沢市大字牛森字慶治清水4469、字清水北5276～9番地。標高258mの平地で、現状は畑および原野である。昭和38年に堂森在住の手塚武夫氏が石槍を発見したのがきっかけとなって手塚 孝氏によって石鏃・幾形石匙・石器剥片が少量採集されている。縄文時代の集落跡とみられる。範囲は50m四方の中にあるものと推定される。工業団地内に入る。

No.16 (慶治清水B) 遺跡 (第8図1～2, 第三図版3～4, 6～10, 13, 19～20, 25, 27～28, 第六図版6)

所在地は、米沢市大字堂森字慶治清水642～649、653、657～659、670～693、字平井林691～693、大字牛森字慶治清水4458～59、4469、4484～4490、4508、字清水北5276番地。堂森山北東の激高地および湧水地で、標高255mのところである。現状は林、畑および水田である。昭和42年土地改良により水田部分が破壊されている。これが発見のきっかけで、手塚 孝氏によって調査されている。その結果によれば、縄文時代の早期・中期・後期の三時期にわたる集落跡とみられる。早期では条痕土器片（栗山Ⅱ式期）および局部磨製石鏃を、中期では磨消繩文土器（大木10式期）および石鏃・幾形



第8図 1・2八幡原No.16遺跡出土の土器、3～6No.25遺跡出土の土器
(手塚他 1972 P.16～17より)

石匙、石槍、搔器、打製石斧、石鎌状石器、石錐、凹石、磨石等の多量の遺物を採集している。また後期では撫糸文土器片(後期初頭)・ベンダント状石製品等少量の遺物を採集している。さらに縄文中期の堅穴式住居の一部も確認されている。黄褐色砂質土層を掘りこみ、壁を切っているピットが2ヶ検出されている。今回もボーリング探査によって確認された。範囲は東西130m×南北190mの中にあるとみられる。工業団地である。以前に“堂森A遺跡”と称されたところである(真室1970; p.16, 手塚他1972; p.9)。

No.17(清水北A)遺跡

所在地は米沢市大字牛森清水北5276の21～26、字焼山下5275の21番地。堂森山と焼山の間にある微高地の中心部で、標高255.5mのところである。八幡原遺跡群では中央に位置を占めている。現状は畑および原野である。縄文時代土器片および石器剥片数点を採集できた。縄文時代遺物散布地としておく。範囲は50m四方の中にとみられる。工業団地の中に入る。

No.18(清水北B)遺跡 (第三回版17)

所在地は、米沢市大字牛森清水北5276の17～20、25、48～49、字八幡原5277の17、30番地。標高255mの平地で、現状は原野および道路である。周辺は湧水が著しい。以前に打製石斧が手塚 孝氏によって発見され、地元万世小学校郷土資料室に寄附されたといわれる。昭和42年手塚 孝氏によって採集された遺物をみると、縄文時代前期土器片(大木6式併行型)・石鎌・石器剥片等多量である。また弥生式土器片1片が混じっていたが、No.24遺跡と重複しているとみるべきである。縄文時代前期の集落跡とみられる。範囲は70m四方におよぶものとみられる。工業団地に入れる。

No.19(清水北D)遺跡 (第三回版16)

所在地は、米沢市大字牛森清水北5276の27～31、43～46、字焼山下9、15～19、22番地。標高256～257mの緩傾斜地。現状は水田・畑・道路・原野で、飛行場・競馬場・畑と地目が変更され、元は崖地であったところに盛土されたところもあるといわれている。以前に手塚武夫氏が石槍を発見し、万世小学校に寄附したという。その後、手塚 孝氏は石鎌・くさび状の磨製石器を採集しており、調査においても縄文時代土器片・凹石数点を採集している。採集地点はばらつき、東西110m×南北150mの範囲を推定し、縄文時代遺物散布地とした。時期は不明である。工業団地に入れる。

No.20(焼山下)遺跡

所在地は、米沢市大字牛森字焼山下5275の11～12、14番地。焼山西山麓の緩傾斜地、標高258.5mである。現状は畑および山林である。石器剥片1点を採集したのみであるが、

■ 分布調査の概要

立地条件からみて遺跡の可能性をもつとみられる。縄文時代遺物散布地とする。範囲は40m四方の中にあると考えられる。工業団地に入る。

No.21(中焼山下)遺跡

所在地は、米沢市大字牛森字中焼山下4574番地。焼山の西麓の緩傾斜地で標高261mの地点である。現状は養鶏舎および水田であり、調査期間中には確認することが困難であった。

昭和34年堂森の手塚武夫氏が石槍1点を採集している。ここも遺跡の可能性をもってとりあげておく。縄文時代遺物散布地とし、範囲は40m四方の中にあるとみられた。工業団地に入る。

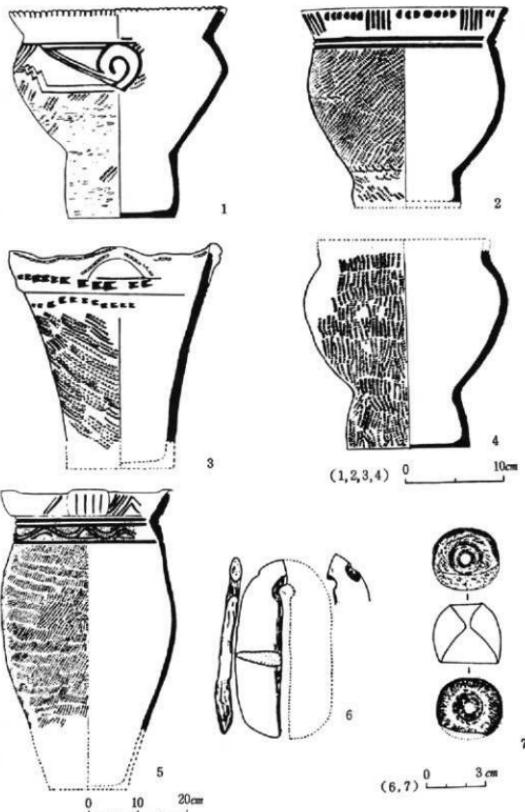
No.23(八幡原C)遺跡 (第9図、第五図版4、6)

所在地は米沢市大字牛森字八幡原5277の17~20、字清水北5276の49、大字川井字飛田4263、4265番地。八幡原遺跡群の中心部で、254.5mの標高である。現状は原野および貯水池である。昭和46年、貯水池をつくるためブルドーザーで掘りかえした土の中より、手塚孝氏が遺物を採集している。縄文時代土器片・磨製石斧・フレーク等少量である。時期は不明。縄文時代集落跡とみられ、範囲は60m四方の中にあると推定された。工業団地に入る。

No.24(清水北C)遺跡

所在地は、米沢市大字牛森字清水北5276の33~36、49、字八幡原5277の12~14、16、18~19。堂森山東、燒山西にのびる舌状の微高地、標高256mの地点である。現状は原野および道路である。遺跡の発見は手塚孝氏によるが、昭和45年10月堂森遺跡調査によって発掘調査が実施されている。その経過内容は、第1部第4章第4節に詳述してある。また、昭和49年の発掘調査にも該当し、第2部第2章第3節に記述してるので、ここでは簡単にふれる。縄文時代晩期より弥生後期に至る土壤堆群で、多量の良好な遺物を採集している。範囲はNo.24の他にNo.19~18にものびていくようである。100m四方におよぶとみられる。工業団地に入る。

No.25(八幡原A)遺跡 (第10図1~7、第三図版14、22、26、第四図版2~7、第五図版3、5、第六図版1~5)



第10図 八幡原No.25遺跡出土遺物(手塚他 1972 P.15より)

所在地は、米沢市大字牛森字八幡原 5277 の 23~29, 字六本松竹井境 5302 の 11~16, 大字川井字飛田 4257, 4259, 4262 ~ 4265 番地。堂森山・焼山北方にのびる舌状微高地の中心部、標高 254 m の地点である。元競馬場コースの一部で、松林で覆われている。付近には湧水が多い。昭和 42 年、手塚 孝氏が発見した。この辺は盆栽・庭木用の松の木が掘られた穴が点在するが、その穴より遺物を発見したのである。手塚氏による採集品は多量にのぼり、整理すると次のようになる。

- 土器 (a) 表裏縞文、爪形文土器（少し繊維を含む）。縄文時代早期末のものらしい。
- (b) ループ文、縦状撚糸圧痕文、結節羽状縞文土器。（多量の繊維を含む）縄文時代前期初頭のものである。
- (c) 半載竹管による平行沈線文・爪形文・太い棒による山形文等、貼付文、撚糸圧痕文を有する土器。縄文時代前中期のものである。
- (d) 磨消縞文による「C 字文」を有する土器。縄文時代中期末のものである。

石器 縞形石匙、石鎌、石鋸、石槍、四石、磨石、石皿、块状耳飾その他である。以上により、縄文時代早期末～前中期における集落跡であることがわかる。範囲は東西 80 m × 南北 120 m と推定された。工業団地内に入る。以前「堂森 F 遺跡」と称されたところである（真室 1970； p.16, 手塚他 1972； p.11）。

No.26（八幡原 B）遺跡

所在地は、米沢市大字牛森字八幡原 5277 の 8 ~ 24, 字六本松竹井境 5302 の 1 ~ 2, 9 ~ 13, 字竹井道中西 5301 の 21 ~ 23 番地。堂森山・焼山北方にのびる舌状の微高地で、標高 254 m のところである。八幡原遺跡群では最も広い範囲にわたって遺物が分布する。現状は林・原野および水田であり、林の中には盆栽・庭木用の松の掘り穴が点在している。遺跡の発見は昭和 45 年手塚 孝氏によってである。その手塚氏は度々同遺跡を訪れ、試掘を含んで予備調査を行ってきていた。この成果については第 1 部第 4 章第 2 節で述べるのでここでは概略にふれるのみである。今回も遺物を採集しているので加味して要約すればつきの通りである。

遺構 住居跡一棟（堅式で壁は高く、まっすぐ立ち上がる。プランは未確認）。炉跡は 1.5 m × 1 m の南北に長い石組の複式炉である。北側に埋設土器炉を有する。

- 遺物 土器 (a) 表裏縞文・撚糸文を有する土器。縄文時代早期末のものとみられる。
- (b) 縦状撚糸圧痕文・結節羽状縞文・爪形文・撚糸文を有する土器。縄文時代前期初頭とみられる。
 - (c) 爪形文、平行沈線文、貼付文を有し、ボタン状の小突起をもつ土器。

縄文時代前中期のものとみられる。

(d) 磨消縞文による「C 字状」文および「S 字状」文を有する土器。縄文時代中期末のものとみられる。

- 石器 石鎌・石匙・石槍・搔器・石錐・石箆状石器・磨製石斧・凹石・磨石等である。块状耳飾り

以上により縄文時代早中期・中期の集落跡であるとみられる。範囲は東西 90 m × 南北 200 m におよぶとみられる。工業団地内に入る。以前に「堂森 B 遺跡」と称された遺跡である（真室 1970； p.16, 手塚他 1972； p.10）。

No.44（山影）

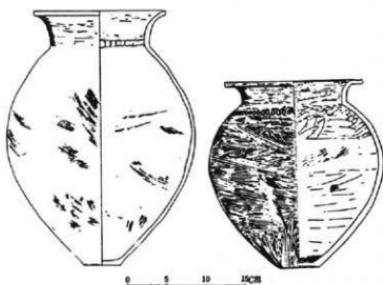
所在地は、米沢市大字堂森字山影 571 ~ 573 番地。堂森山北東山麓の緩傾斜地で、標高 255 m の地点である。現状は原野であるが、以前は宅地や畑にされていたところである。石器剥片が数点採取されている。縄文時代遺物散布地である。範囲は、50 m 四方の中にあると考えられる。工業団地には入らない。

No.43（比丘尼平田）遺跡

所在地は、米沢市大字堂森字比丘尼平田 540 ~ 554, 字白山堂 487, 489 ~ 495 番地。堂森山北西にのびる舌状の微高地で、標高 252 m の地点である。羽黒川扇状地形成に伴川原状地形成が複合した地形のところである。現状は水田である。本遺跡は昭和 44 年の土地改良工事によって手塚 孝氏が発見した。八幡原遺跡群に含めるには無理があるけれども一応含めた。

本遺跡出土の遺物の概略をあげると、次の通りである。

- (a) 縄文時代土器片（中期大木 7 式併行）、石鎌・石箆状石器・搔器等約 20 点
- (b) 古墳時代土器（南小泉 II 式併行）とみられる古式土器



第 111 図 八幡原 No.43 遺跡出土の土器（小野 1972 R.43 より）

■ 分布調査の概要

・**壹各 1 点** 黄褐色土層を30cmほど掘り込んだビット内に横向きに設置された状態で発見されている。覆土は黒色土層で、周辺は2~5cm厚さの木炭が多量に散布していたといわれる。

以上より縦文時代中期および古墳時代の集落跡とみられる。範囲は広範で、東西300m×南北260mの中にあると推定される。工業団地内には入らない。遺跡は土地改良工事によって破壊されたが、どの程度であるか不明。調査時は水田の稻穂のため確認できなかった。

3 上竹井地区に点在する遺跡

No.27 (沼田) 遺跡

所在地は、米沢市大字木和田字沼田 676 番地。梓川扇状地末端よりさらに下位にある平地で、標高250mの地点である。川井地区に近い県道金谷・置局停車場線より八幡原に少し入りかけたところにある。現状は林および原野である。遺跡として断定はできないが、林の木立の中に10mの方形をなす塚（高さ1.5m）が不自然に存在する。土地の人から聞いても不明瞭で、以前に墳墓ではないかということで掘ってみようとした人もあったといわれている。今回の調査でも表面からは確認できなかった。一応墳墓の可能性をもつ塚ということでありておく。工業団地に入る。

No.29 (玉ノ木 B) 遺跡

所在地は、米沢市大字竹井字玉ノ木 2585 の3、大字牛森字竹井道西 5297 ~ 5298 番地。焼山北側の八幡原に近い緩傾斜地、標高253mの地点である。現状は畑および原野である。調査時に橋爪・亀田両調査員が休憩もとらず苦労して発見した遺跡である。採集された遺物は、土師器の破片数点で、いずれも土師器の中では新しい方のものとみられた。平安時代の集落跡と推定される。範囲は60m四方の中にあるとみられる。工業団地の中に入る。

No.28 (玉ノ木 A) 遺跡

所在地は、米沢市大字竹井字玉ノ木 164 ~ 165、168 ~ 170、264 番地。上竹井地区内、梓川下流の段丘上、標高249mの地点である。現状は畑で、今回の調査により確認した。採集遺物は、畑が野菜で一面に覆われていたためか、須恵器破片1片のみである。平安時代の遺物散布地としてとりあげておく。範囲は、50m×40mの中にあるものとみられる。工業団地の中には入らない。

No.30 (竹井塚 A) 遺跡 (第七回版 6)

所在地は、米沢市大字竹井字玉ノ木 2585 の9 ~ 14、18、21、36 ~ 37、41 ~ 50、77 ~ 78、

2 調査結果

84, 86, 3685 の11,

大字牛森字竹井塚 5158

~ 5162, 5165 ~ 5168

番地。市道竹井・細原

線の中間丸清水の近く

である。梓川（天王川）

の沖積段丘上、北に張

り出す舌状の微高地

（標高254m）に立地

する。現状は、畑およ

び道路である。本遺跡

は昭和46年7月手塚

孝氏によって発見され

た。調査においても遺

物を採集し確認できた。

遺物は土師器（内墨の

他）・須恵器の破片

で多量である。平安時

代~鎌倉時代の集落跡

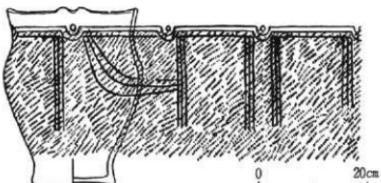
とみられ、範囲は東西80m×南北130mの広範なものと推定せられる。以前に“竹井 A 遺跡”と称せられた遺跡である（真室 1970 : p.16, 手塚他 1972 : p.8）。次のNo.31遺跡と同一遺跡であるが一応分けておく。工業団地に入る。

No.31 (竹井塚 B) 遺跡 (第12回、第六回版 7 ~ 8、第七回版 7 ~ 9)

所在地は、米沢市大字竹井字玉ノ木 2585 の15 ~ 17, 36, 84, 86, 大字牛森字竹井塚 5164 ~ 5165 番地。梓川（天王川）の沖積段丘上（標高257m）に立地する。No.30遺跡と同一遺跡であるが時代によって区別したもので、No.30遺跡の南にある。現状は畑・林および道路である。本遺跡の発見も手塚 孝氏によるものである。昭和47年8月上竹井遺跡調査団によって発掘調査が実施されている。その結果については第1部第4章第3節で述べている。ここではふれない。遺跡の概略は次の通りである。

遺構 立石遺構を伴う住居跡、配石遺構等が確認されている。

遺物 土器 磨削陶文による円文・楕円文等を有する土器（大木9・10式期）、ステッ



第12回 八幡原No.31遺跡出土の土器

■ 分布調査の概要

キ状文を有する土器（縄文後期初頭），撚糸文土器（縄文後期初頭），縞走磨消縦文を有する土器（縄文後期初頭）等。

石器 石鏃・石匙・打製石斧・磨製石斧・石皿・凹石・磨石・三脚石器等。

以上のことから縄文時代中期末～後期初頭の集落跡と推定される。範囲は東西70m×南北90mにおよぶとみられる。工業団地内に入る。以前に”竹井B・C遺跡”と称されたところである（真室1970；p.16, 手塚1972；p.8）。

No.32（竹井境C）遺跡

所在地は、米沢市大字牛森字竹井境 5162番地。梓川（天王川）の段丘上、標高258mの平地に立地する。現状は林および原野である。本遺跡も遺跡としての可能性をもてとりあげる。直径7mの円形の塹である。高さ1.5m。表土は黒色土である。土地の古老によれば、明治の頃に据て太刀を12振得たという。頂上より西側に1.5m～2mの東西に長い穴があり、発掘した形跡がうかがえる。ボーリング棒をさしてみると中に石があり、その下は空洞になっている。墳墓としての可能性がある。範囲は10m四方の中にある。工業団地の中に入る。

No.33（横山A）遺跡・No.34（横山B）遺跡（第七図版1～3）

所在地は、米沢市大字竹井字横山 2520～2521、字住方 2593の3番地。梓川（天王川）の河岸段丘上、標高255mの地点である。旧河川の突出部が、河川改修によって切り離され、張状に残されたところで、背後に木和田の山々がせまっている。かつては段丘上に立地していたが、侵食作用によって遺跡が半分近く削られ、河床面との比高4mの崖面に遺物包含層が露出している。表土より約1.2mの沖積土6層が遺物包含層である。手塚・秦両氏によって昭和45年に発見された。現状は林および原野である。北半がNo.33遺跡、南半がNo.34遺跡である。地点と時代のちがいにより二つに分けられる。

No.33遺跡は、第4～6層を包含層とし、多量の遺物が採集されている。その概略は、
土器 (a) 表裏縦文、表裏条痕文、撚糸文を有する土器。縄文時代早期末とみられる。

(b) 羽状縦文、隆線貼付文、沈線文を有する土器。縄文時代前期の室窓・大木1
・5・6式併行のものとみられる。

石器 石鏃・縞形石匙・搔器・石笠状石器・打製石斧・石皿・凹石・不定形石器等。
以上により縄文時代早期末～前期の集落跡とみれる。範囲は東西80m×南北70mである。
No.34遺跡は、第1～2層を遺物包含層とし、多量の遺物が採集されている。その概略は、
(a)カメ・で台付きが多く 糸切り底を有する内黒の土師器 (b)カメ形の須恵器である。
これにより平安後半の集落跡と推定できる。範囲は70m四方である。工業団地に入る。

以前に”細原遺跡”と称したところである（真室1970；p.16, 手塚1972；p.8）。またNo.33遺跡について第1部第4章第1節で述べてある。

4 牛森辻の堂地区の遺跡

No.35（長権）遺跡

所在地は、米沢市大字牛森字長権 5113～5114、5117～5118番地。梓川（天王川）の河成段丘上、258mの平地である。わずかに南から北へ傾斜している。焼山北東部の丸清水との中間に位置する。現状は畠および原野・林である。縄文土器片が少量発見された。昭和49年度に発掘調査を実施したので、詳しいことは第Ⅱ部第3章において述べる。縄文時代遺物散布地である。範囲は、60m四方の中にるとみられる。工業団地に入る。

No.36（辻の堂A）遺跡

所在地は、米沢市大字牛森 4999～5005番地他。No.35遺跡の南方100m程のところで、市道竹井・細原線の中間のX字形交叉点の北東部分である。梓川（天王川）の河成段丘、標高260～261mの緩傾斜地である。現状は畠・水田である。調査の際に、磨製石器の破片1点・須恵器破片2点を表探している。縄文時代および歴史時代の遺物散布地である。範囲は、100m×50m位の中にあるとみられた。昭和49年度に発掘調査を実施しており、その結果は第Ⅱ部第3章で述べる。工業団地に入る。

No.37（辻の堂B）遺跡

所在地は、米沢市大字牛森字辻の堂南 5025～5026、5038～5040、5050番地。焼山に続く福荷山の東麓の微高地261.5mのところである。現状は畠である。調査の際に土師系土器（内黒土器も含む）破片を採集した。歴史時代の集落跡とみられる。範囲は60m四方におよぶものとみられる。昭和49年度に発掘調査を実施しており、その結果は第Ⅱ部第3章で述べる。工業団地に入る。

5 細原橋周辺の遺跡

No.39（縄原前川原）遺跡

所在地は、米沢市大字牛森字細原前川原 3179～3188、3192～3193、3253番地。牛森より細原に至る細原橋の手前牛森よりのところ。梓川（天王川）の段丘の微高地266mの地点。現状畠および原野である。須恵器の底施釉土器破片1点を採集した。歴史時代鍾乳以降の遺物散布地である。性格不明である。範囲は、50m×40mの中にあるとみら

れる。昭和40年度に発掘調査を実施しており、その結果は第Ⅱ部第4章に述べる。工業団地に入る。

No.40（牛森古墳）遺跡（第13図）

所在地は、米沢市大字牛森字細原前川原3149番地、梓川（天王川）の段丘上、標高265mの地点。牛森より細原に至る中間細原橋の手前に位置する。現状は、畑である。昭和38年発行の『山形県遺跡



第13図 八幡原No.40遺跡の近景

地名表の100番の遺跡である。約5mの封土を有し、東側に石室の一部とみられる積石が露出している。墳丘の東南に漢道部周辺に用いたとみられる1×0.5m程度の凝灰岩の切り口がみえる。戦前に上野地区阿部某と細原地区鈴木某が発掘し、須恵器の堆および鐵製直刀2振を採集し、金谷八幡神社に奉納したが、戦時中盗難にあって紛失したといわれる。昭和37年に本古墳を調査した亀田調査員によれば、昭和37年当時は現在よりも1m余大きい封土を有していたという。市道牛森・細原線および畑の耕作により墳丘の大半が崩されたものとみられる。これらの点もふまえて、円墳を呈する末期古墳とみられる。範囲は、現状より大きいこと、群集墳の可能性をふまえて東西70m×南北60mを推定した。工業団地に入る。

6 牛森地区的遺跡

No.38（牛森山南下）遺跡

所在地は、米沢市大字牛森字牛森山南下4859～4861、字權荷山5075の1番地。牛森山（稻荷山）の南麓の平地264mの地点。稻荷神社入口周辺である。現状は畑である。土器類・須恵器の破片を少量採集できた。いずれも表形ノ八式割の平安時代後半のものとみられた。平安時代の集落跡とみられる。範囲は50m四方におよぶとみられた。工業団地には入らない。

No.22（十文字西）遺跡

所在地は、米沢市大字牛森字十文字西4282～4285、字十文字南4228～4229番地。牛森山（稻荷山）の南、牛森部落の中、市道桑山、細原線にそったところである。現状は畑である。縄文式土器片とみられる土器片1点を採集した。表探遺物1片のみで、遺跡の

性格は不明。一応縄文時代遺物散布地としておく。範囲としては、60m四方の中にあるとみられる。工業団地には入らない。

7 牛森・桑山にかけての地区的遺跡

No.41（井ノ鼻）遺跡

所在地は、米沢市大字牛森字井ノ鼻4667～4669、字玉ノ木道南二4133、4135番地。梓川扇状地の中央で、標高271mの平地である。牛森より南東にのびる道路（第一門前橋に至る）の中間である。現状は陸種畠であるが、一帯は表土から礫が多く目立った。縄文式土器片とみられる土器片および石器片を数片表探した。遺跡の性格は不明。一応縄文時代遺物散布地としておく。範囲は、50m四方の中にあるとみられる。工業団地に入る。

No.42（原ノ上）遺跡

所在地は、米沢市大字桑山字原ノ上4078～4079、4086～4087、字北原屋敷4119～4120番地。梓川（天王川）扇状地の中央よりやや上ったところで、標高273～275mの緩傾斜地。現状は畑である。土器類もしくはそれに近い土器の破片とみられるもの1点採集した。これだけでは遺跡の性格は不明。平安時代墳の遺物散布地としてとりあげておく。範囲は畑の状況からみて100m×90mの中にあるといえる。工業団地に入り、その南辺に位置する。

以上の44遺跡の確認をもって調査を終了した。草木のおい茂る9月の上旬は分布調査に不向きであることは事前に承知していた。しかも、作物のある畑より1片の遺物を見つけることは容易ではなかった。もっと条件のよい時期に、試掘を含めて実施することができたならばと思うのが調査担当者の胸の内である。このような状況なので1片の遺物の表探といえども可能性のあるところはすべてとりあげたのである。即ち遺跡がないと思っていて遺跡を破壊する事態ができる限りないようにする意味である。もちろん後に確かめられることを前提としている。また、遺跡の名称や種別についてはいくつかの訂正をしている。遺跡名については研究者以外の人にもわかり易いように字名をもって整理した。種別の訂正是前回発行の報告書の誤植によるものが多い。

以上の44遺跡を一覧表にまとめたものが、第3表である。

III 分布調査の概要

第3表 木沢八幡原中核工業団地および周辺の遺跡一覧

No	遺跡名	所在地	地目	立地	種別	編年期	出土品	推定範囲	備考
1	小谷地	○桑山・小谷地 水田	平地	散布地 (廃文)			石器	85×60 m	
2	水神前	○桑山・水神前 ・上総の木	畠林	平地	散布地 (廃文)		フレーク	70×70 m	
3	大清水	○桑山・大清水 ・上総の木 ○牛森	畠林	平地	事務所 (廃文)		土器・石輪・石器 フレーク	150× 190 m	“金谷C 道路”
4	柿の木	○桑山・下総の木	畠水田	平地	事務所 (廃文) (半井)	大木10	土器・石器・残瓦 上器・瓦器	90×70 m	“金谷B 道路”
5	二タ俣A	○堂森・二タ俣	原野	平地	集落跡 (廃文)	大木9 10 加曾利 大木4A 杉枝之入	土器・石器・石匕 ・石器・石器・磨石 ・石器・石器 土器	60×60 m	“金谷A 道路”
6	二タ俣B	○堂森・二タ俣	水畠	平地	散布地 (廃文)		打斧・フレーク	70×70 m	
7	北原	○堂森・東原	林	平地	堆積			7×7 m	
8	下原田	○堂森・下原田 ・上原田	水田	平地	集落跡 (廃文)		・石器・石器 ・フレーク	70×40 m	
9	八幡宮	○堂森・八幡宮	水畠	平地	集落跡 (廃文)	大木4,5 6	土器・石器・石匕 ・石器・磨石	160× 140 m	“堂森E 道路”
10	前野	○堂森・前野	水畠	平地	散布地 (廃文)		・磨石・フレーク	40×40 m	
11	堂森東	○牛森・堂森東 宅	畠地	平地	散布地 (廃文)		・フレーク	40×25 m	
12	耳取B	○堂森・耳取	畠	平地	散布地 (廃文)		・フレーク	60×50 m	
13	耳取A	○堂森・耳取 ・千船山	水畠	平地	集落跡 (廃文)		・石器・石器 ・石器・不定形石器 ・石核	130× 150 m	
14	愛宕南水A	○堂森・愛宕南 水・山影	水田	平地	集落跡 (廃文)	大木5, 6 後期初	・土器・石器・石器 ・磨斧・凹石・磨石	160× 120 m	“堂森C 道路” 一部工業 団地内
15	愛宕南水C	○牛森・愛宕南 水・水北	畠野	平地	集落跡 (廃文)		・石器・石器 ・フレーク	50×50 m	工業団地 内
16	愛宕南水	○堂森・愛宕南 水・半井林 ・牛森・愛宕南 水・水北	林	平地	集落跡 (廃文)	早期末 大木10 後期初	・土器・石器・石器 ・石器・磨器・打斧 ・石器・石器・磨石 ・磨斧・ペンドント 石器・石器	130× 190 m	“堂森A 道路” 工業団地 内
17	沿水北A	○牛森・沿水北 ・鶴山下	畠野	平地	散布地 (廃文)		・土器・フレーク	50×50 m	工業団地 内

施設名	所在	地目	立地	種別	編年期	出土品	推定範囲	備考
18 清水北B	○牛森	清水北 ・八幡原	路	野路	255 m	集落跡 (廃文)	大木6	・土器・石器 70×70 m
19 清水北D	○牛森	清水北 ・鶴山下	水田	半地	256 m	都市地 (廃文)		・土器・石器 ・さざなわ石器 ・磨石 110× 150 m
20 鶴山下	○牛森	鶴山下	畠林	平地	258.5 m	散地		・フレーク 40×40 m
21 中鶴山下	○牛森	中鶴山下	小水田	半地	261 m	都市地 (廃文)		・石器 40×40 m
22 十文字西	○牛森	十文字西 ・十文字南	畠	平地	264 m	散布地 (廃文)		・土器 60×60 m
23 八幡原C	○牛森	八幡原 ・川井	原野	平地	264.5 m	集落跡 (廃文)	・土器・石斧 ・フレーク	60×60 m
24 清水北C	○牛森	清水北 ・川井	雁野	半地	265 m	嘉林 (生)	・土器・石器・石匕 ・石器・石器 ・御玉製菅玉	100× 100 m
25 八幡原A	○牛森	八幡原 ・六本松 ・竹井塙	林	平地	254 m	集落跡 (廃文)	・土器・石器 ・石器・石器 ・石器・块状耳飾 草創期 室浜 大木1 大木2 大木6 大木8 大木10	80× 120 m
26 八幡原B	○牛森	八幡原 ・六本松 ・竹井塙	林	平地	254 m	集落跡 (廃文)	・土器・石器・石器 ・石器・石器 ・磨斧・凹石 草創期 室浜 大木6 大木10	90× 200 m
27 沼田	○木和田	沼田	林	平地	250 m	堆積?		10×10 m
28 玉ノ木A	○竹井	玉ノ木	畠	平地	249 m	散布地 (半井)	・磨器	50×40 m
29 玉ノ木B	○竹井	玉ノ木	畠野	平地	253 m	集落跡 (半井)	・土器	60×60 m
30 竹井塙A	○竹井	玉ノ木 ・牛森	烟道	平地	254 m	集落跡 (半井)	・土器 ・竹井 ・竹井塙	80× 130 m
31 竹井塙B	○竹井	玉ノ木 ・牛森	烟道	平地	257 m	集落跡 (廃文)	・土器・石器・石器 ・磨斧・凹石 ・磨石・三脚石器	70×90 m
32 竹井塙C	○牛森	竹井塙	林野	平地	258 m	堆積?	・鐵刀?	10×10 m
33 横山A	○竹井	横山	段丘	林川	255 m	集落跡 (廃文)	・土器・石器 ・磨斧・凹石 ・磨石 ・細通路	80×70 m

III 分布調査の概要

No	遺跡名	所 在 地	地 目	立 地	種 別	編 年 期	出 土 品	指定範囲	備 考
34	横山B	○竹井・横山 +住方	林 川	段丘 255 m	集落跡 (平成)		・土師器	70×70 m	「細原遺跡」 工業団地内
35	長 墳	○牛森・長堀	畠 野	平 地 258 m	敷布地 (縦文)		・土器	60×60 m	工業団地 内
36	辻の堂A	○牛森・辻の堂	畠 水 田	平 地 260 ~ 261 m	敷布地 (縦文) (中安)		・帶輪石器 ・須恵器	100×50 m	工業団地 内
37	辻の堂B	○牛森・辻の堂 道南	畠	平 地 261.5 m	集落跡 (歴史)		・土師系土器?	60×60 m	工業団地 内
38	牛森山下	○牛森・牛森山 下 +横荷山式	畠	平 地 264 m	集落跡 (平成)		・土師器 ・須恵器	50×50 m	
39	細原 前川筋	○牛森・細原前 川筋	畠 野	平 地 266 m	敷布地 (縦文)		・施輪土器 (須恵系・茶底)	50×40 m	工業団地 内
40	牛森古墳	○牛森・細原前 川原	畠 道	段 丘 265 m	培 地 (古墳)		・枕刀? ・須恵器	70×60 m	「牛森古 墳」 「No.100 遺跡」 工業団地内
41	井ノ鼻	○牛森・井ノ鼻 +玉ノ木 道南	畠	平 地 271 m	敷布地 (縦文)		・土器 ・フレーク	50×50 m	工業団地 内
42	原ノ上	○原山 +原ノ上 +北原屋敷	畠	平 地 273 ~ 275 m	敷布地 (歴史)		土師器?	100×90 m	工業団地 内
43	北丘尾平 田	○宝森 +北丘尾 平田 +白山堂	水 田	平 地 282 m	集落跡 (歴史) 大木ト 高木小屋 II (古墳)		・土器・石器・器 ・古式土師器	300×200 m	
44	山 影	○宝森・山影	原 野	平 地 285 m	敷布地 (縦文)		・フレーク	50×50 m	

* 備考内の“ ” 内の道路名は昭和47年10月、手塚孝・栗昭繁・安彦政信『米沢市八幡原周辺の遺跡』遺跡考古第3号 p.7~17による。

* No.100遺跡は昭和38年3月『山形県遺跡地名表』山形県教育委員会による。

参考文献

- 真室 公一(1970) 「山形県米沢市の考古学(Ⅰ)」 遺跡考古1号
手塚 孝・栗 昭繁・安彦政信(1972) 「米沢市万世町八幡原周辺の遺跡」 遺跡考古第三号

第4章 従来の考古学的調査

第1節 No.33(細原)遺跡

1はじめに

本遺跡は、1970年10月に確認した遺跡で、「細原遺跡」と呼んでいた(安彦・手塚・栗 1972, 栗 1973)。しかし、1973年に山形県の文化課によって、分布調査が行なわれ、No.33・34遺跡と分割して整理されたものである(山形県教育委員会 1974)。今回ここで紹介する遺跡は縄文時代の遺物を主体にしているNo.33遺跡である。

遺跡は、米沢駅より東に3.5kmで、工業団地内では北東にある。山麓のゆるやかな斜面に広がる。桙川が木和田の南側の山にぶつかり、急に蛇行する地点にある(第14図参照)。遺跡の標高は225~260mで、桙川との比高は3~5mあり、この川の侵食作用によって遺物包含層が露出ししつつほどで消滅している。遺物包含層は山際に行きけば厚くなるが、平均1m前後で、地層は地山まで6層に分けることができる。遺物はこの侵食崖から抜き取ったものである(第14図)。

縄文時代の遺物で出土層の分るものは、すでに報告した(栗 1973)ので、今回はその時報告出来なかった土器と石器についての考察と、その後採集した縄文時代各期の土器について報告したい。

2 縄文時代早期末から前期初頭の遺物

本資料は4~6層より出土した、縄文時代早期末から前期初頭の遺物である。

[土 器]

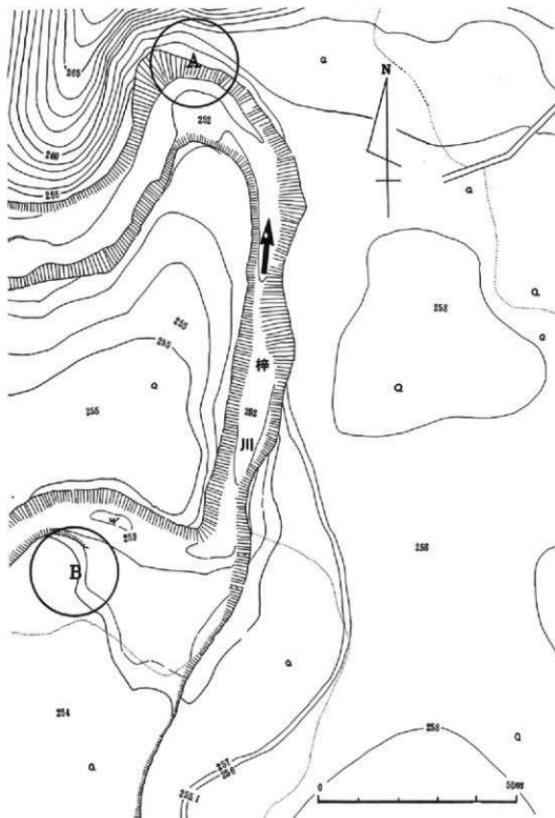
器形の分る略完形土器1点と、土器片53点が出土している。これらの資料を下記の基準に分けて概観した。

一 航 土・焼成一

- (1) 砂粒を含む微砂質で繊維を少量に含み、焼成は良くない。
(2) 砂粒を含む微砂質で繊維を多量に含み、焼成は(1)より良い。

一 器 形 一

- (1) 口縁部が外反する深鉢形で、尖底土器と考えられる。
(2) 口縁部が外反し、あげ底を呈する深鉢形土器



第14図 八幡原№33遺跡周辺の地形図 (A地点: 繩文土器出土地点, B地点: 土解體出土地点)

一文様構成一

1. 表裏条痕の文様をもつグループで、個体により条痕の方向が一定しない (第15図-1・2)。
2. 表裏縞文の文様をもつグループで、羽状縞文になるものもある (第15図-3)。
3. 表面にのみ縞文をもつグループで、菱形状の単節斜縞文、連結のある単節斜縞文、ループ文、撚糸文がある (第15図-4~8)。
4. 単節斜縞文に沈線文が施されるグループ (第15図-9)。
5. 単節斜縞文に爪形文が施されるグループ (第15図-10)。
6. コンパス文と爪形文が施されるグループ (第15図-11)。
7. 沈線文と爪形文が施されるグループ (第15図-12)。

第4表 八幡原№33遺跡土器分類表

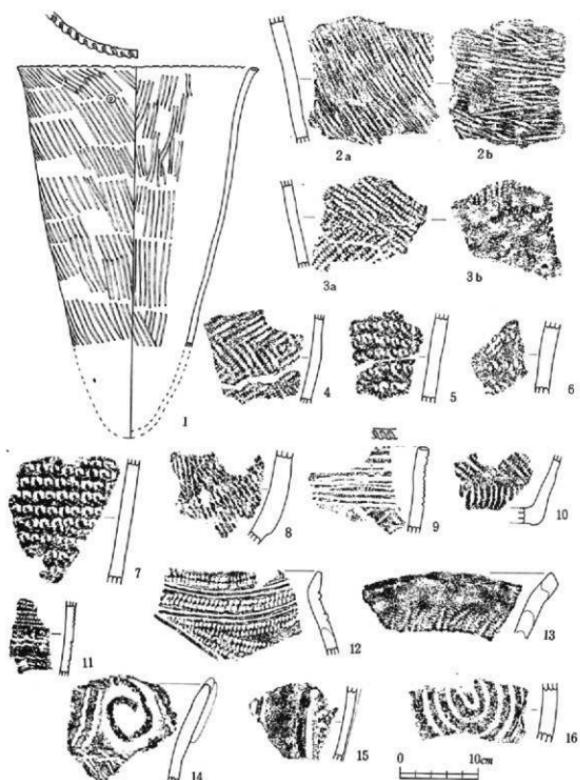
区分 大 小	文 様 構 成		胎 土	器 形	数 (片)	排 図 番 号 (第15図)
	表 面	裏 面				
A	条 痕 文	条 痕 文	(1)	(1)	30	図-1・2
	縞 文 (単 節)	縞文(単節)	(1)	-	2	図-3
3	縞 文	無 文	(2)	-	13	図-4・5・6・7・8
4	縞 文 +沈 線 文	"	(2)	(2)	3	図-9
B	縞 文 +爪 形 文	"	(2)	(2)	2	図-10
6	コン パ ス 文 +爪 形 文	"	(2)	-	2	図-11
7	沈 線 文 +爪 形 文	"	(2)	-	1	図-12

〔土器の縦年の位置〕

以上の観察事項をもとに土器群を検討すると、大きく2つに分類できる（第4表参照）。

(A) 胎土は(1)、器形は(1)で、文様構成において土器の表と裏面に条痕文や単節斜縞文を施しているもので、口唇部にはシュリツ文を施しているものもある。以上の様な特徴の土器は宮城県上川名貝塚下層土器（加藤 1951）や、同吉田浜貝塚の第1・2類土器（後藤 1968）に相当すると考えられる。ただし、この両遺跡とも縞文条痕文土器が報告されているが、本遺跡からは発見されていない。これは資料が少ないので原因と思われるが、今後の調査の問題点としたい。

(B) 胎土は(2)、器形は(2)で土器の外側だけに文様を施し、文様構成において3~7を示し、



第154図 八幡原№33遺跡出土土器実測図

文様単位の組合せが多くなるもの、口唇部にシリツ文を施しているものもある。以上の様な特徴をもつ土器は山形県大峰原遺跡（佐々木 1971）や、宮城県大木田貝塚（興野 1967）に類例があり、縄文時代前期初頭と考えられる。

以上の様に大別して見ると、(A)では器形が尖底で施文は土器の表と裏面を使用しているのに対して、(B)では底盤が広げ底で施文は土器の表面だけを使用している点や、文様単位の組合せが多くなるなどの相違点が明らかになった。この事は(A)と(B)の時期の間に、土器の変化史の上で大きな変化が生じた事を意味するものと考えられる。これはすでに山内氏が縄文時代の五期区分を発表し、その後土器の細別と大別の基準が問題になった（山内 1987）が、本遺跡の(A)と(B)の資料の相違点は、縄文時代早期末から前期初頭への土器変化史のメルクマールとなると思われる。

(石 器)

上記の土器に伴った石器が10点ある。出土数が少ないとから分類は思う様にいかなかつたが、石材・形態・製作技術・使用痕について観察した。

—石材—

磨石2点は安山岩で、他は全部頁岩製である。しかし、同質母岩の石器や接合資料はなかった。なお、圓面では自然面を頁岩の場合ドットで表わしている。

—形態・製作技術—

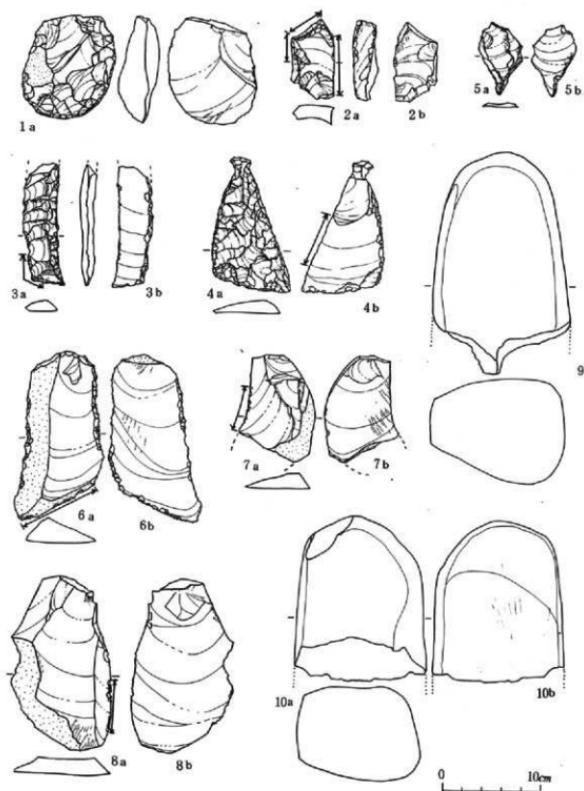
1. エンドスクレイパー的な刃部をもつもの、母指状搔器を大型にしたような形態をしている（第16図-1）。打面は自然面で、背面にはバルブをのこしている。背面の二次加工は連続的な剥離を加えて整形している。この連続的な剥離は左から右へ剥離して成形した所が2カ所、剥離面の切り合から観察される。

2. つまみをもち刃部が「く」の字形になる縦形石匙で2点ある（第16図-3・4）。腹面の右縁辺にそって二次加工を行ない、次に背面を剥離している。特に背面の左半分の剥離面は上から下へ連続的に二次加工を行ない整形し、最後につまみ部を作ることが剥離面の切り合から分った。これを分りやすく図化すれば、第17図の様な方法で製作されている事になる（第17図参照）。

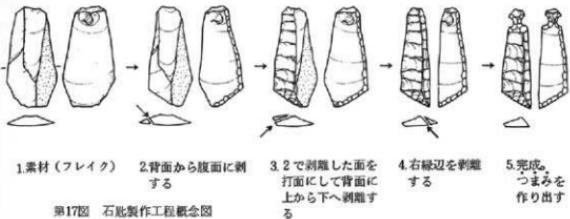
3. フレイクを素材にして、刃角80度前後の線上に若干の二次加工したもので、その場所に使用痕が観察される（第16図-2）。

4. 縦長のフレイクが4点ある（第16図-5～8）。自然面が残っているものが多く、いずれも若干つまみをもつ剥離の様な使用痕がある。

5. 細長い自然石で縁辺と裏面が加工されているもので2点ある（第16図-9・10）。両方



第16図 八幡原№33遺跡出土石器実測図



1. 材料（フレイク）

2. 背面から旗面に割する

3. 2で剥離した面を打面にして背面に上から下へ剥離する

4. 右縁辺を剥離する

5. 完成。つまみを作り出す

第17図 石器製作工程概念図

とも一方の縁辺と裏面が幅2~3cmにわたって加工され下部が欠損している。

— 使用痕 —

上記の形態の石器について使用痕を観察すると、2つに分類できる。なお、図面上では使用痕を矢印(→)で表している。

- 1) 剥離面や稜線上に磨滅しているもの。資料の中には擦痕のついている資料はなかった。
- 2) 刃部の縁辺にそってこまかい剥離がついているもの(刃こぼれの様なもの)。

1) の様な使用痕が観察されるものは3点ある。第16図-4は腹面の左縁辺にそって幅1.5cmにわたっている。第16図-3は刃部が「く」の字形になった所にある。石匙でこの様な場所にあるものはめずらしく、松原遺跡の場合は使用痕の観察されたものは全部、第16図-4と同じ場所であった。第16図-2は三縁辺の80度前後の刃角の場所にある。材料加工にこの様な高い角度の刃が必要だったと考えられる。

2) の様な使用痕が観察されるものは4点ある。いずれもフレイクで刃角の小さな20度前後の場所にある(第16図-5~8)。

以上の様に観察した資料は、縄文時代早期末から前期初頭の土器に伴ったものである。これだけでも土器編年上へスライドした場合の位置が判る。しかし、ここで他の遺跡からの資料を使ってこの時期の特徴などを解説したい。

形態の種類としては母指状の搔器、線形石匙、スクレイパー、使用痕のあるフレイク、磨石などの資料が本遺跡から出土した。縄文時代前期初頭の資料を出す山形県東中町遺跡(保角 1973)からは、これらの他に石鋤、石槍、石鎌、凹石、磨製石斧が出土していることから本遺跡出土の石器は、この時期の石器組成を全部含むものではなく、一部分の形態しか示していないことが分る。資料が少ない事が原因と思われる所以、今後の調査の問題点をしたい。

石匙は形態、剥離技術、使用痕のつき方など特徴的である。この様な特長をもつ石匙を出す遺跡に吉田浜貝塚がある（後藤 1968）。報告によれば第1類土器（船入島下層）に伴なったもので3点あり、いずれも本遺跡の資料と同じ様に腹面の石縁にそって二次加工を行なっている。この様な剥離を行なっている資料は他に松原遺跡（秦 1971）があり、時期は前期初頭の上川名Ⅱ式～柱島式の土器を出す遺跡である。この様に他の遺跡からの出土例を考えると、本遺跡から出土した様な石匙は、縄文時代早期末から前期初頭にだけしか出土しない特徴的な形態をしたものと考えられる。その他の種類の石器は類例がとほしく分らないので今回は報告だけにしたい。

3 縄文時代前期末から後期初頭の遺物

ここで報告する資料は『山形考古』に紹介した（秦 1973）後に採収した遺物である。出土層は2・3層で、遺物は土器のみで12点ある。

〔土 器〕

風化しているため時期、特徴など観察できない物もある。しかし、本遺跡の歴史期間を明らかにする意味から貴重であるため概要を述べてみたい。

1. 胎土は0.8～1.0cmと厚く焼成は良い。第15図-14は粘土紐を渦巻状に貼付けた物で、胴部には単節斜縄文が施される。第15図-13は土器製作時の粘土紐接合面が断面で良く観察された。文様は口縁部に幅2.0cmの無文帯をのこし、単節斜縄文が施されている。これらの土器は縄文時代前期末の資料と考えられる物で2点あった。
2. 胎土は0.6cmと薄く焼成は良く堅い。第15図-15は単節斜縄文を施し、つねに沙線や粘土紐を貼付る磨消縄文の方法によって製作されている物で、他の胎土、文様の同じ物が1点ある。これらの土器は縄文時代中期末の資料と考えられる。
3. 胎土は1.0cmと厚く土器の表面の風化が進んでいる。第15図-16は北縁による渦巻の部分だけであるが、胎土や文様から縄文時代後期の摺ノ内式に見られる渦巻文と考えられる。これ1点だけである。
4. 胎土は0.7～1.2cmで土器の風化が激しくて文様が判らない物が7点ある。

以上の様に本遺跡からは新たに縄文時代前期末、中期末、後期初頭の資料が発見された。この他平安時代の土師器、須恵器がある。しかし、今回は資料の関係上報告出来なかった。

4 ま と め

① 遺跡は桙川の河岸段丘上に山麓のゆるやかな斜面にある。

- ② 包含層は6層あり厚く保存が良い。
- ③ 本遺跡は縄文時代早期末、前期初頭、前期末、中期末、後期初頭、平安時代の長い間利用された遺跡である。

- ④ 縄文時代早期末と前期初頭の土器は器形、胎土、文様構成の面で異なる。
- ⑤ 縄文時代早期末から前期初頭には、特徴的な石匙が出てくる。

以上が本遺跡より分った事として整理しておきたい。

最後にこれを書くに当り加藤 稔・佐藤雄雄・藤沼邦彦・佐藤庄一・丹羽 茂氏に色々と教えていただいた。また、手原 孝・佐藤洋行氏より本遺跡出土の資料を一部貸していただき。厚く御礼申しあげたい。その他の石器に関する見解は『さあべい同人会』の「縄文時代の石器について」と題する勉強会で取り上げられた事があり、この時の話題が参考になっている。

（秦 昭繁）

注

- ① この様に分割した理由には、出土する遺物の中心部が№33の方は縄文時代の遺物が主体で、№34の方は平安時代の遺物が主体であることが原因と思われる。しかし、両遺跡が接近しているため同じ様な遺物が出土する。特に平安時代の遺物はこの山麓全体に広がっていると考えられる。
- ② 石器を研究する場合、製作技術、製作工程の解明が必要と思う。遺跡を調査した場合多量の石器が出土する、それは材料→製作→使用→廃棄という過程を経た遺物になり、またその途中の物も遺物になる。それを念頭におないと出土した石器全ての使用目的を考えなくてはならない。この様な事から製作工程を解明し、遺物を各工程に位置づけることが必要と思う。本遺跡出土の石匙について第17図を作成した目的もここにあった。しかし、最終工程の資料しか示すことが出来ないのが残念である。
- ③ 磨石については、使用痕が二次加工なのか不明な点が多くて困るところでは扱わなかった。
- ④ 松原遺跡の場合石匙は10点あり形態、剥離技術が本遺跡の資料と同じ物が8点ある。8点のうち使用痕が観察された4点は、第17図-4と同じ所に使用痕があった。
- ⑤ この様な形態の石匙がいつ頃出現したのか分らないが、大木1・2式土器を出土する遺跡より少くなり、片面加工が多くなる事から大木1式前後で減少しはじめると考えられる。

参考文献

- 後藤 畏彦（1968）宮城県吉田浜遺跡調査報告、仙台湾周辺の考古学的研究
 秦 昭繁（1973）米沢市山形遺跡出土の土器と石器について 山形考古Ⅱ-2 PP. 29-30
 秦 昭繁（1971）米沢市山形遺跡概報 さあべい
 保角 里治（1973）山形県大石田町庚申町道跡の縄文土器について 山形考古Ⅱ-2 PP. 19-28
 加藤 孝（1961）宮城県山上1号貝塚の研究 宮城女子学院大学研究論文集1
 舟野 義一（1967）大木式土器理解のために（1）、月刊考古学ジーナル13 PP. 16-18
 佐々木洋治（1971）高畠町史 別巻 考古資料

第2節 No.26（堂森B）遺跡

1はじめに

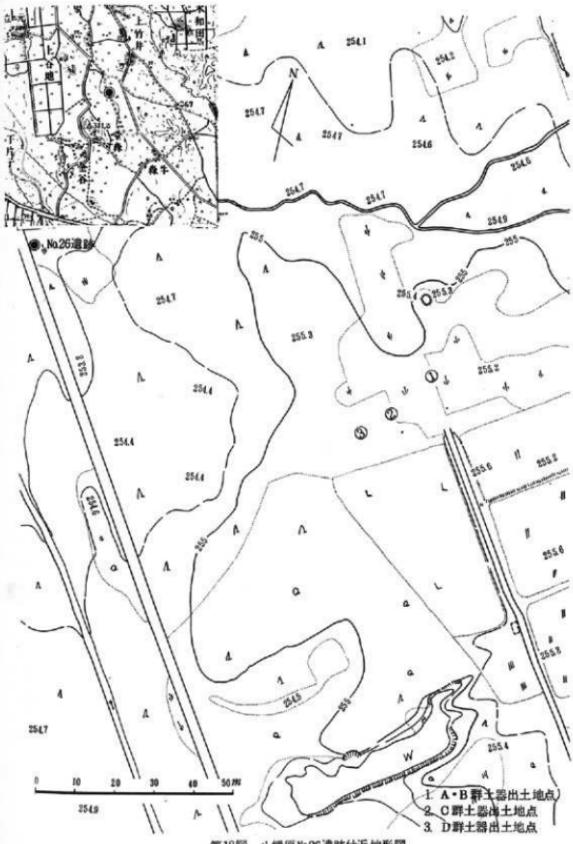
本遺跡は、八幡原周辺の遺跡の中でも最も広い範囲から遺物が出土する遺跡であり、八幡原遺跡群の中では最北西部に位置する。遺物も縄文時代の早期（約6千年前）から前期初頭、前期末、中期後葉期と現在までに筆者らによって確認されている。遺跡の発見は今から約10年前（昭和39年7月頃）であり、出土した遺物より縄文前期初頭の遺物であることが判明した（真室他 1969 p.8）。その後数年にわたって（他の遺跡も含む）調査を進め、他に縄文早期末、前期末の遺物も出土することが確認され（手塚他 1972 P.7-17）、昭和45年5月堅穴住居の一部と思われる遺構を発見し、そして数多くの縄文中期後葉土器を探査した（手塚 1972 P.21-31）。したがって本遺跡は中心部を縄文前期末の遺跡が占め、南西部に中期、北東部に早期、前期初頭の遺跡も、また南西部に広がる遺跡は、No.25遺跡出土遺物より、当遺跡と続くものと推定される。ところでこれらの出土遺物は、すでに遺跡紹介や調査概報として報告されており、その中には筆者らによって報告されたものもある。今回はそれらをもとにして先の小報に対して実測図や文中の不備な点などを考慮し、写真などを加えて今回再報告する。なおこの中で縄文早・前期は遺物の量が少量化な為に一括し、縄文早期末をA群土器、縄文前期初頭をB群土器、前期末をC群土器として、前回同様、上記の土器群と堅穴住居（出土土器を含む）を大別して述べる次第である。

2 遺跡の位置と地形

No.26遺跡は山形県米沢市万世町牛森大字八幡原5277-23~29に所在し、国鉄米沢駅の東方約2.3kmの地点にある（第18図）。遺跡は米沢盆地の現在、遺跡の東方約0.9kmを北西に流れ松川に合流する梓川によって形成された扇状地の扇端部の平地にあたり標高254mである。遺跡の基盤をなす地質は荒縞層（ザルソウ）と呼ばれる新第三紀中新世の軽石凝灰岩であり、その上に扇状地堆積物の砂質粘土層及び砂層などの冲積土が堆積している。付近には地下水が扇状地特有の被圧地下水となって湧き出してできた清水が多く存在する。

3 出土土器(1)

本遺跡出土の遺物としては中期（D群土器）が最も多く、ついで前期初頭（B群土器）、



第18図 八幡原No.26遺跡付近地形図

前期末（C群土器）早期末（A群土器）となっている。中期（D群土器）に関しては住居跡ならびに炉跡とともに述べることにして、他のA・B・C群の遺物を紹介する。

A群土器（第20図1～5）

土器体部にはやや多く禾本科の繊維を含み器形は口縁部で「く」の字に外反するのが特徴で土器の焼成は悪く、もろい感じである。

- (1) 表裏織文土器片、2片（第20図5）焼成はこの土器のみやや良いようである。
- (2) 表裏織文片で表面に一条の沈線がある。

(3) 口縁部で強く外反する様（第20図1～4）表面から口

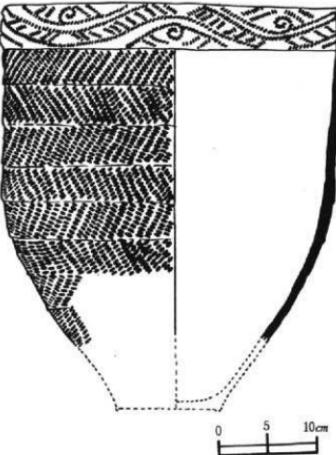
縁部付近につけられた表裏織文土器でありこの様な文様は比較的他の遺跡には見られないようである。多量の繊維を含み焼成は悪い。10片ほど出土した。この壺から耳飾や円盤状有孔磨製石器（第21図2～3）（第八図版3）も出土している。これらは一応表裏織文からみて織文早期末に属するものと考えられる。

B群土器（第20図6～22、第19図、第八図版5）

A・B・C群の中では最も多く出土している土器で、その中には完形土器（第19図、第八図版5）も含まれる。器形は口縁部から胴部にかけてゆるやかに内湾するもの(a)と、胴部でふくらみ口縁部にかけて直立するもの(b)、口縁部が外反するもの(c)が主であり、胎土は多量の繊維を含み焼成は悪い。

- (1) (第19図、第20図15、18、第八図版5)

口縁部から胴部にかけてゆるやかに内湾し、口縁部文様帶に蕨状捲糸圧痕文が施されている（器形a）のが特徴であり体部には比較的太めの繊維を含む。焼成は普通である。



第19図 八幡原№26遺跡出土の土器(1)（手塚他 1972 PI5より）

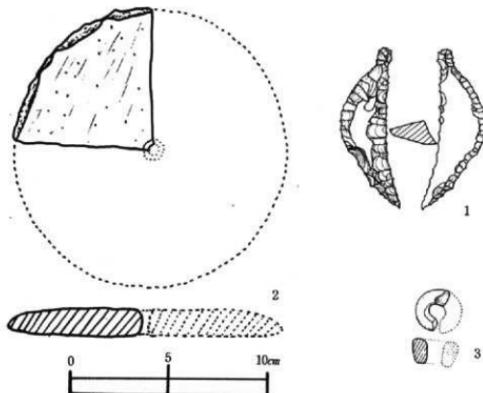


第20図 八幡原№26遺跡出土の土器(2)

（第19図、第八図版5）一完形土器である。口部に帯状の蕨状捲糸圧痕文を上下に8ヶ所有し、その下に太状の筋による羽状織文のくり返しになっている。器形は口縁部でゆるやかに内湾し、胴部でふくらみそのまま底部に向けて内曲する。

- (2) (第20図6、7、13、14)

口部に帯状の隆起線を有し、その下にくり広げられる羽状織文が特徴であり、隆起線には織文ならびに捲糸文によって〔キザミ〕が施されている。焼成は悪くもろい感じである。



第21図 八幡原№26遺跡の出土石器・石製品

器形、A・B・Cともにある。

(3)- (第20図9, 10, 20~22)

口縁部が外反する<唇形C>が主で、竹状工具(竹管)による爪形文や円文で文様を構成している。

(4)- (第20図8, 11, 17)

口縁部からすぐに縄文が施されているので羽状縦文や撚糸文が主である。なお器形として器形A, Bがある。

(5)- (第20図12, 16)

底部片で平底とあげ底の二点があり、底面には縄文や撚糸圧痕が施されている。

これらの土器群は撚糸圧痕文、羽状縦文からみて東北半の上川名上層(室浜)および関東地方の花積下層式に併行するものと思われ、同時に当遺跡での特異性を感じられる。

C 群 土 器 (第20図19)

土器約30片で口縁部が外反するのが大部分で、口縁部には波状口縁をなすものもあり、文様は爪形文、ボタン状の小突起、平行波線文、細い粘土縞を貼り付けたものが多い。こ

の類は縄文前期の大木5, 6式併行するものと思う。

4 出土石器(1)

出土石器としては、石鎌17点(三角形11点、基部にえぐりのあるもの3点、菱形1点、棒状1点、アメリカ型1点)、縦形石點5点、石槍4点、石箇2点、磨斧1点、搔器3点、凹石18点、磨石3点、凹石1点、石錐が出土している。その他に块状耳飾、円盤状有孔磨製石製品各1点が出土している。アメリカ型石鎌は鉄石英製で№24遺跡から100mしか離れていないので、おそらくそちらに関係したものであろう。块状耳飾(第21図-3、第八図版)は玉質製で肉厚の小形のものであり、縄文前期初頭によく見られるものである。円盤状有孔磨製石製品(第21図-2、第八図版3)は泥岩製であり、現形として4分1程度しかないが円形を有するものと思われ、中央部に窄穴されている。また端周辺には両面からの加工が加えられ本器自体も磨かれている。おそらく穴に紐でもつけ振り回す様に使用したものであろうか? 用途不明である。

5 遺 槽

第1号住居跡

(1) 槽 窪

遺跡付近でアカツの移植が行なわれた際に炉の一部が露出していた遺槽である。今回は、炉の検出を主目的としたもので、住居の平面形は不明である。南側で一部確認できた住居の壁は、直径4mほどで円形状を呈する。壁の高さは30~40cmで、ほぼ真っすぐに立ち上がる。住居跡内の埋土の状況はつきのようである(第22図参照)。ただし層位による遺物の明確な区分はできなかった。

第1層 黒褐色表土

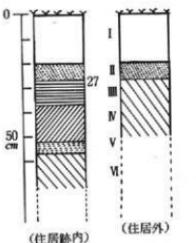
2層暗茶褐色裸層(後世の再堆積)

3層黒褐色砂質土層

4層茶褐色砂質土層

5層木炭層(部分的に存在)

6層黃褐色砂質粘土層



第22図 八幡原№26遺跡土層柱状図

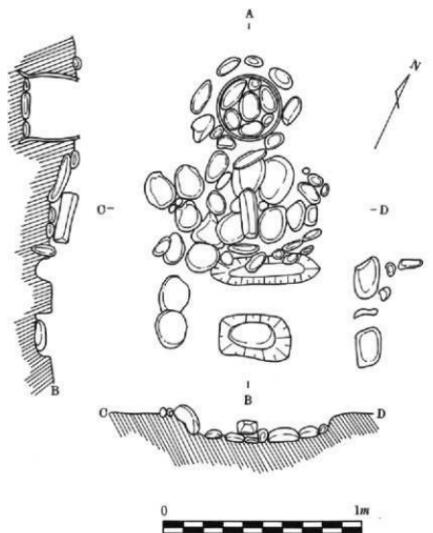
(2) 伊跡

長軸 1.5m、長軸 1m で南北に長い石組の複式炉である（第23図、第八図版1・2）。北側に石組をともなった埋設土器部は、体部下半を切られた深鉢が口縁部を下にして埋設されており、その外周に焼土が分布していた。土器の内部には、7 個の円礎が敷きつめられており、その上に多量の木炭が堆積していた。土器内部の石および埋設土器を円形に囲む石組は、焼けた痕跡を示している。敷石部は、扁平な円礎のみ配列したもので、北側と西側にだけ残っていた。石組部には、南北に並んで二つの落ち込み（第23図ピット1・2）があり、ピット1には木炭が堆積しており、ピット2内には扁平な円礎が入っていた。なお炉跡からは埋

設土器以外の土器
は発見されなかっ
た。

(3) ピット

住居跡内からは、大小4つのピットが検出された。ピット1・2については前述したが、これらが確実に炉跡に付属するものかどうかはわからない。ピット3は、長径 80cm、短径 45cm、深さ 20cm で楕円形を呈し、住居北側の隅にあり周溝の一部とも思われる。ピット内からは土器片4片、フレイク1片が発見された。ピット



第23図 八幡原№26遺跡第1号住居跡複式炉実測図

4は、長径 130cm、短径 100cm、深さ 80cm の掘り込みで、住居東側の隅にあり内から完形土器1点を含む土器片42片、フレイク5片が発見された。完形土器（第28図-1a）は、ピットの上部より器台（第28図-1b）と接着した状態で検出された。

6 出土土器について

№26遺跡のD群出土土器は、出土状態から4つのグループに分類できる。

第1のグループは、堅穴住居の構築によって破壊された（現象的には堅穴住居に切られた）ピット内の堆積土より出土した土器である。

第2のグループは、堅穴住居にあるピット内からの出土土器である。

第3のグループは、住居跡の堆積土（住居廃絶後埋った土）から出土した土器で、第2のグループをのぞいたもの。

第4のグループは、堅穴住居が機能していた（使用していた）時期に属すると思われる炉跡内の埋設土器である。

これらの土器はいずれも縄文時代中期後葉のものと考えられるが、ここでは器形、文様表出技法、単位文様構成等の諸点からさらに検討を加え、また出土状態等を参考にして詳しい年代を考えてみたいと思う。

1) 土器の分類

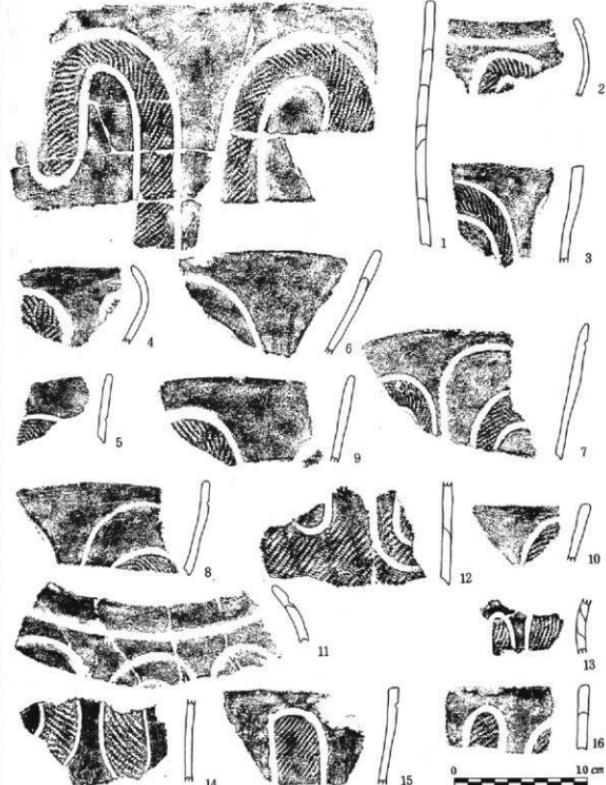
堂森遺跡の出土土器を器形からみると、口縁が外反する深鉢形（器形A）、口縁が内反する深鉢形（器形B）、彌字形土器（器形C）、浅鉢形土器（器形D）、注口土器（器形E）台付土器（器形F）、キャリバー形土器（器形G）などがある。この中で器形AとBには單節ならびに無節斜繩文のみが施された施られぬ土器（粗製土器）も含まれる。文様表出技法としては、地文となる楕円は $L \frac{R}{R}$ の楕円原体を回転させたものが多く、これに沈線および凹線、隆起線、ヘラ状工具によるミガキなどが加わる。単位文様は、懸垂文、円文、綫長の「C」字状文、さらには横位の「S」字状文などがある。前者の文様は綫方向に、後者は横方向に展開する場合が多い。ここでは単位文様と文様構成を中心として出土土器を分類してみたい。

・第1類土器（第25図15、16、第26図2~4、第29図4、5）

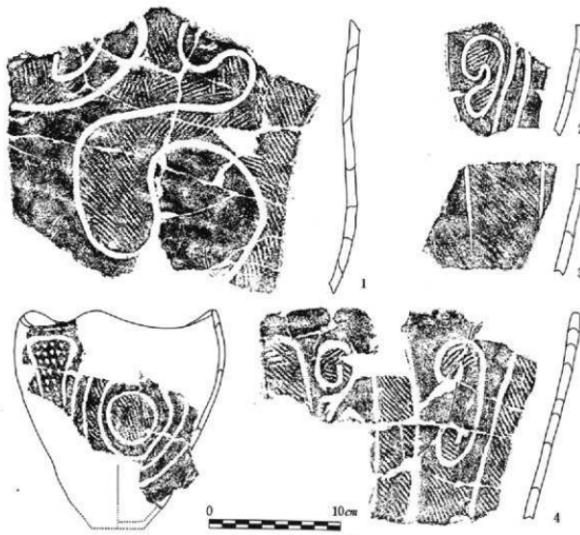
円文ないし懸垂文を単位文様として、文様が綫方向に展開する。器形には、口縁が外反する深鉢形（器形A）と口縁が内反する深鉢形（器形B）、キャリバー形（器形G）がある。



第24図 八幡原№26遺跡住居跡内出土の土器(1)



第25図 八幡原№26遺跡住居跡内出土の土器(2)



第26図 八幡原№26遺跡ピット内出土の土器

・第2類土器（第25図1～4、第29図1）

縦長の「C」字状ないし逆「C」字状文を単位文様とし、文様が縦方向に展開する。器形には、口縁が外反する深鉢形（器形A）、口縁が内反する深鉢形（器形B）、變形土器（器形C）等がある。

・第3類土器（第24図1～3、第26図1、第28図1～3、第29図7、8、第八図版4）

横長の「C」字、逆「C」字、横長の「S」字、逆「S」字状文等を単位文様として、文様が横方向に展開する。器形としては、口縁が外反する深鉢形（器形A）が多いが、口縁の内反する深鉢形（器形B）や注口器（器形E）、台付土器（器形F）もある。

・第4類土器（第27図、第29図3、6）

単節、無筋繩文が施されるだけで、特に文様は認められない。器形として口縁部の外反

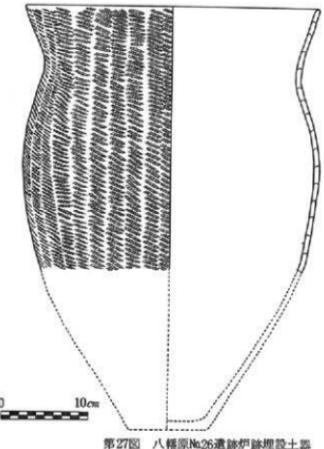
する深鉢形（器形A）と口縁の内反する深鉢形（器形B）がある。

・第5類土器

（第29図-2）
ヘラミガキなどによる無文の粗製土器で、器形としてキャバリー形（器形G）がある。

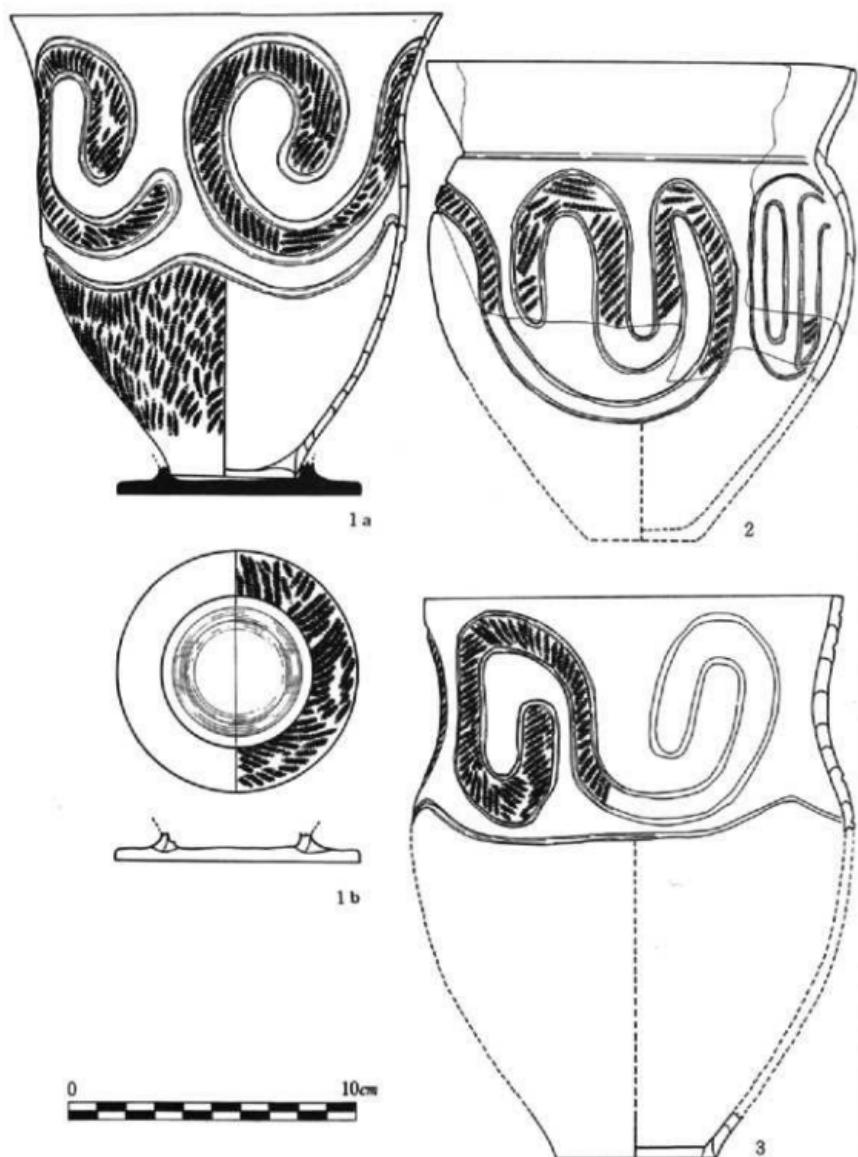
2) 各土器類型の年代について

以上のように分類された諸土器類型で、どのような

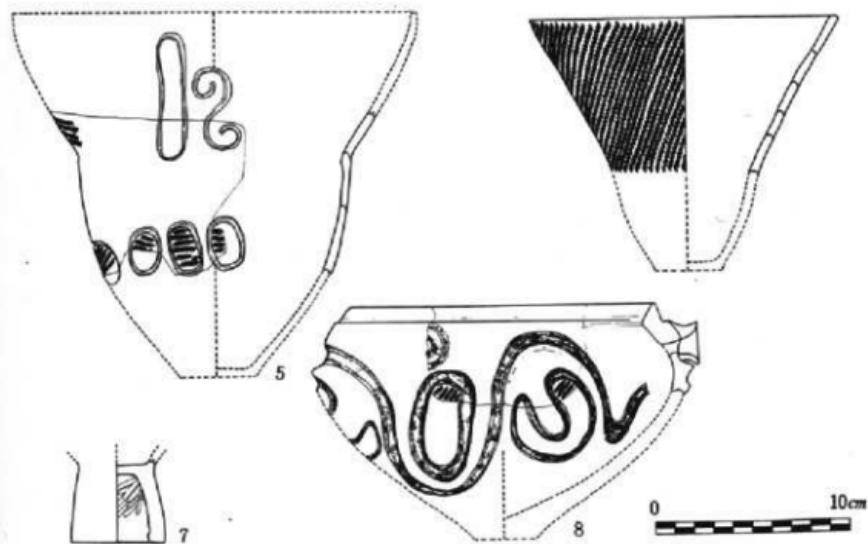
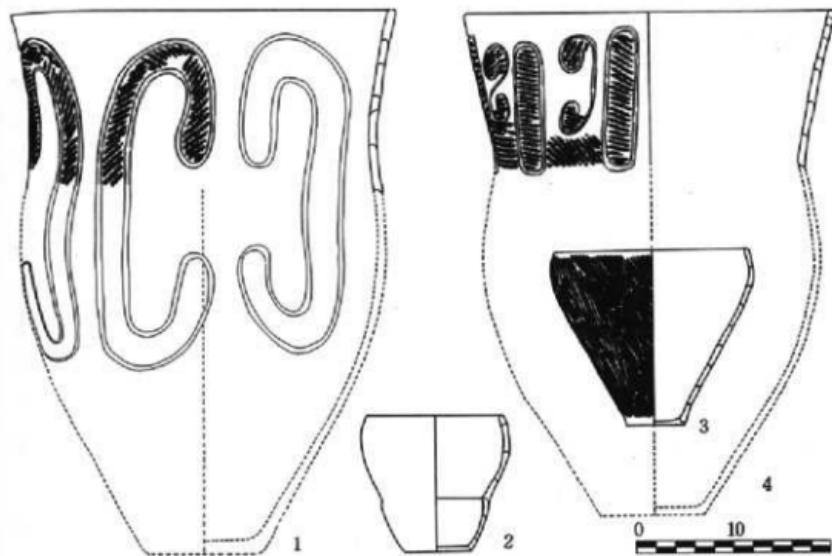


第27図 八幡原地26遺跡炉跡埋設土器

年代的地位が与えられるべきかについて述べる。堅穴住居跡内からは、第2、3類土器を中心となして出土しているが、堅穴住居跡によって切られているピット内の出土土器は、ほとんどが第1類土器であった。このことから第2、3類土器は、第1類土器よりも新しい時期のものであることが言えよう。これ以上の土器の時期決定は、他の遺跡の資料との比較にまたなければならないが、県内でのこの時期の資料は、なお明らかでない。そこでここでは宮城県および福島県等で明らかにされた成果と比較検討することにする。東北南部における縄文時代中期の土器群についてまとめた丹羽茂氏の成果（丹羽1971）によれば、第1類土器は大木10b式期、第3類土器は大木10古式期の土器とすることができます。また第2類土器は、大木9b式期でも比較的新しい要素をもつたもので、大木10古式期の土器との間を埋めるものと考えられる。「大木10古式期の土器の土器は、文様構成の上からさらに大木10a式と大木10b式期のものに細分化されるらしい。しかし本遺跡の資料は破片が多いため、その点の吟味は難しい。ただ堅穴住居内ピット4出土の完形土器（第29図-1(a, b)、ならびに（同図-3）は、第3類土器のうちでも大木10b式期の特徴をもつ第4類土器、第5類土器の明確な時期決定は困難である。とくに第4類土器は、炉の埋設土器で



第28図 八幡原No.26遺跡第1号住居跡内の出土の土器実測図(1)



第29図 八幡原No.26遺跡第1号住居跡内出土の土器実測図(2)

あり遺構の時期決定に重要な意味をもつが、これはつぎに考察することにする。

3) 遺構の年代決定について

ここでは年代的位置を与えられた土器が、どのように出土状態を示しているかを検討することによって年代を推定しておきたい。前節で、本遺跡出土の土器が、その出土状態から4つのグループに分かれることを指摘しておいた。

第1グループは、既に述べたように堅穴住居によって切られたピット内の堆積土より出土したものである。従って、この遺構は大木9b～10古式期に至る段階で埋ったものと考えることができる。

堅穴住居の年代を推定することが可能な資料は第2および第4グループのピット内出土土器で炉跡内埋設土器は粗製土器であるため詳細な年代の検討は困難である。そこで、ピット内から発見された完形の深鉢土器によって遺構の年代を推定することにする。この土器については既に述べたように大木10b式期土器の特徴をそなえている。従って、堅穴住居の年代も大木10b式期に求めるのが妥当であろう。

第3グループは住居跡内堆積土中より出土したもので、この中には第2類、第3類土器がほぼ等しく含まれている。従って大木10b式期のある時点で廃絶された住居跡に対し、それ程時間を経ないままで、大木10b式期の土器とともに第2類土器（大木9b式期でも比較的新しいもの）が捨てられたものと考えることができる。ただし堅穴住居内堆積土層が再堆積の可能性もあり、この点を考慮する必要がある。

7 出土石器(2)

No.26遺跡のD群出土石器としては、その大半が打製石製であり、石鎚1点、石匙2点、石錐1点、石斧3点、不定形石器10点、搔器2点、剥片（フレイク）等の石器が出土している。石質はすべて硬質頁岩である。その他磨石、圓石が11点出土している。大部分が圓石である。石質は安山岩、砂岩継灰岩などがある。これらの石器はすべて第1号住居跡より出土したものである。以下簡単な説明を加える。

・石鎚（せきぞく、やじり。第30図-1）

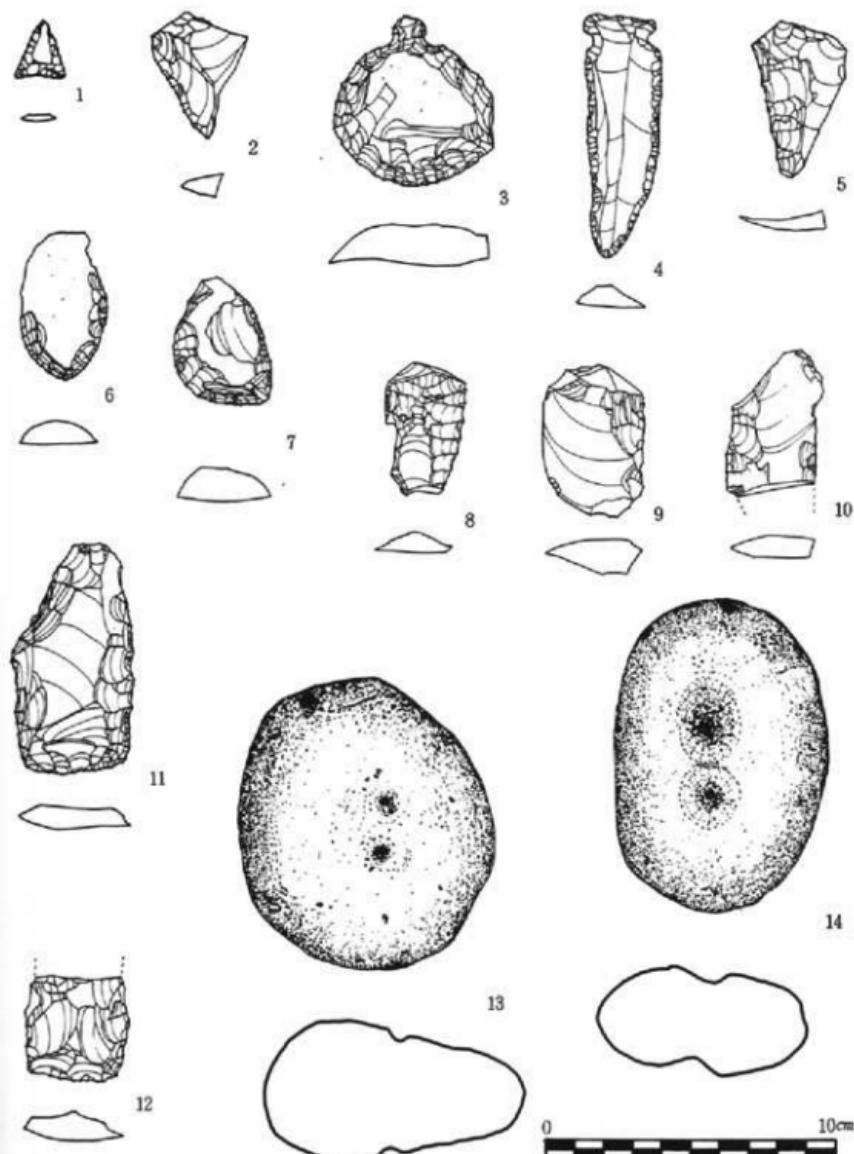
二等辺三角形を有する無茎石錐で基部が内湾するものである。

・石錐（せきすい、ドリル。第30図-2）

表面片側より加工が施され、反対側より鋭く彫器的に剥離が加えられて尖頭部を形成している。

・石匙（いしさじ。第30図-3, 4）

2 Na26遺跡



第30図 八幡原Na26遺跡第1号住居跡内出土の石器 実測図

IV 従来の考古学的調査

上部に対してつまみを有する石器であり、縦形と横形がペアで二点出土している。前者の縦形の石匙であるが表面に二条の隆線を残し周辺部より細加工されている。後者の横形の石匙は裏面にバルブを残し、前者と比べ鋭く片面周辺部より加工が加えられ、剥離法より刃部に対しては搔器的な様子さえうかがわれる石器である。

・搔器（第30図-6, 7）

一般にエンドスクレーバーと呼ばれるもので、片面からの加工が加えられている。

・石籠（いしふら）（第30図-11, 12）

刃部の末端は片面からのみ加工を加えるが側面は両面加工をしてあるもので、このような剥離技術のため末端の刃部の側面形は「く」の字形を示す。末端部も側面もすべて両面加工の石器も1点ある。

・不定形石器（第30図-5, 9, 10）

形が不定形であるということにより、この名称がある。剥離技術をもって分類する分類も可能であるが、今回は省略する。なお、第30図-5, 10に対しては両面加工品であり、第30図-9に対してはバルブを取り上部片面より加工が加えられている。

・剥片（はくへん、フレイク）

石材から石器を作るために剥離しただけのもので23点中約4割に何らかの加工がある。

・磨石および凹石（第30図-13, 14）

大部分が凹石であり、次表の凹石計測表を参照願いたい。

第5表 八幡原No.26遺跡凹石計測表

石器番号	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考
1	3.8	3.6	1.7	255	住居内
2	9.6	6.7	3.8	360	"
3	10.7	10.7	4.5	620	"
4	10.0	9.6	6.0	720	焼石、石組内
5	10.6	7.9	4.0	475	住居内（磨石）
6	15.2	7.5	4.3	380	住居内
7	10.0	6.9	4.5	425	"
8	14.4	11.0	4.7	855	"
9	12.2	8.3	6.6	750	住居外
10	9.6	5.5	3.0	220	"
11	10.6	6.7	3.5	420	"

8 あとがき

今回報告したNo26遺跡ははじめでも述べた様に先回の不備な点などを考慮し再報告することを目的とした。しかし限られた時間内と筆者の未熟さで図面や図版に予想以上の時間をかけてしまい十分検討するまでにはいたらなかった。したがって文中は前回とはほぼ同じである。この点深くお詫び申し上げたい。

しかしながら当遺跡は縄文早・前期にしてもさらには中期ならびに住居跡と非常に重要な遺跡であることが、この小文を通してわかつていただけるものと思う。今回は出土土器を中心に報告したが、いずれ本調査によりこの遺跡の明確な資料が得られることを期待したい。

最後にこの報文を作成するに当って、ご教示下さった佐藤鎮雄、須藤俊克、さらにご協力いただいた秦昭繁、佐々木美紀子、手塚孝信各氏に末筆ながら記して謝意を表する。

(手塚 孝)

注

- (1) No25遺跡より、大木9・10式の良好な資料が出土している。
- (2) 山形県「米沢一関5万分の1」「地質図」昭和45年3月発行
工業再配置、産炭地域振興公团「米沢八幡原中核工業団地平面図5百分の1」による。
- (3) 堂森H遺跡(No24遺跡)の発掘調査(昭和45年10月、加藤稔・佐藤庄一)の時の地質調査による。
- (4) 前回の報告では、丹羽茂・佐藤庄一の両氏には、数多くのご教示並びにご指導願った。

参考文献

- (1) 『置賜考古』創刊号 1969 <真室他> P.8
- (2) 『置賜考古』特別号 No.2 1970 <真室他> P.6
- 拙稿「米沢市<堂森B遺跡>予備調査報告」1972 置賜考古第3号 PP.21-31
- (3) 手塚孝・秦昭繁・安彦政信「米沢市<八幡原周辺の遺跡> 1972 置賜考古第3号 PP.7-17
- (4) 丹羽茂<東北地方南部における中期縄文時代・中期後葉土器群研究の現段階> 1971
福島考古第11号
- (5) 丹羽茂<縄文中期社会と堂森B遺跡> 1972 置賜考古第3号

第3節 No.31（竹井境B）遺跡調査の概要

1 遺跡の立地

本遺跡は、米沢八幡原中核工業団地内における天王川（梓川）西岸地域内下流部に位置する。市道竹井一細原線の中間上竹井寄りのところである。地籍は、米沢市大字竹井字玉ノ木 2528 の 15~17, 36, 84, 86 および大字牛森字竹井境 5164 ~ 5165 他となっている。

天王川は梓川ともいい、吾妻連峰に近い奥羽山系栗子山・駒ヶ岳に源を発し、万世地区梓山周辺で北に開ける置賜盆地に入る。ここで扇状地を形成し、東部の山裾にそって北流する。遺跡は扇状地末端の湧水地帯と現河川のぶつかりあうところの沖積段丘面に立地する。標高 256.5 m より 254.5 m のところで、広い平坦面を保ちながら北へ緩傾斜する地形のところである（第二回図）。

本遺跡の範囲は、東西約 60 m, 南北約 80 m で、面積は約 4,000 m² と推定される。現状は桑畠・ぶどう園・松林等であるが、礫が多く耕作されずに荒地となっているところもある（第31図）。

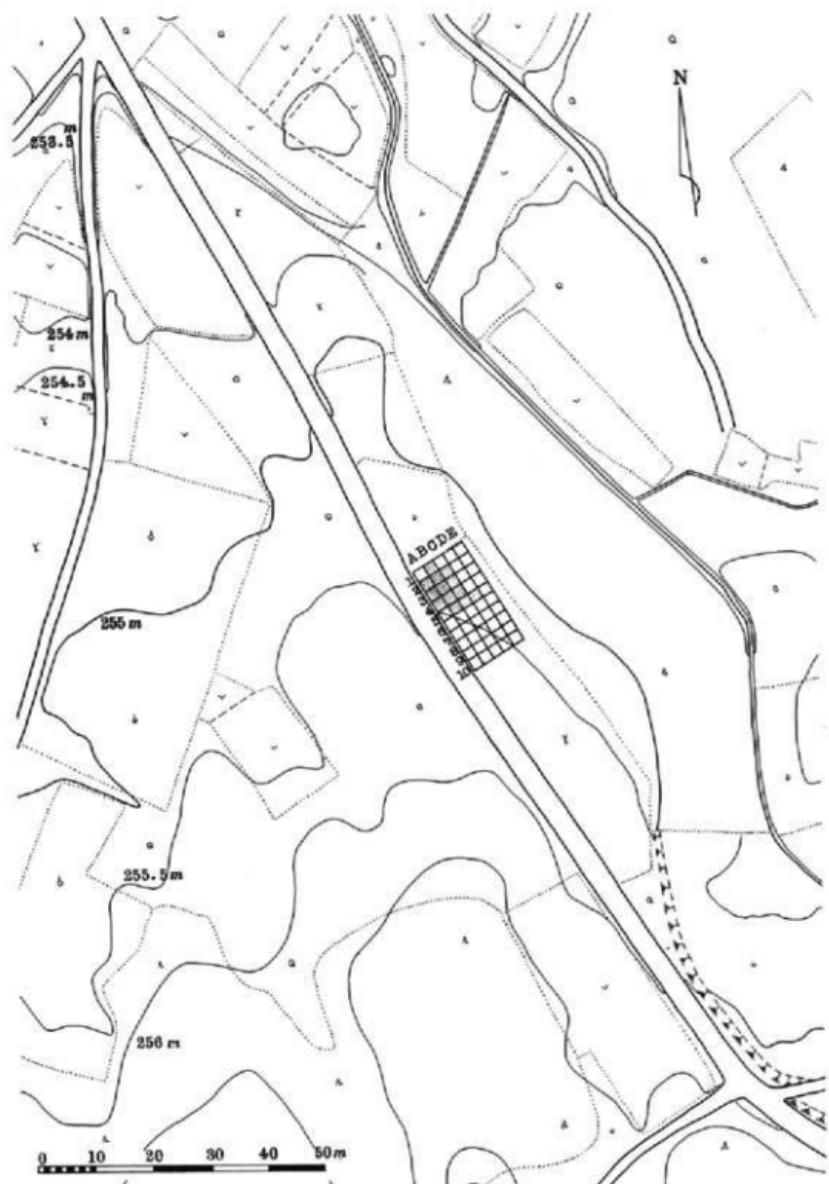
2 調査に至る経過

本遺跡は昭和46年7月に手塚孝・手塚孝信の両氏によって発見された。遺跡探査の折に現場の松林・荒地より遺物を採集したことによる。昭和46年11月、佐藤鎮雄は近くの木和田古窯跡調査を計画したとき、手塚孝氏よりその遺物を拝見する機会を得た。そして縄文時代後期初頭のものであることを明らかにした。その後昭和47年6月手塚孝氏は、安彦政信・秦昭繁両氏とともに「米沢市八幡原周辺の遺跡」として山形考古学会第1回総会研究発表会で発表した。その後、米沢市で開かれた「考古学習会」の席上で、発掘調査の提案がなされた。協議の結果、同好の士を募って調査を実施することに決定した。

調査体制として調査団を編成し、調査団が主体となって調査を進めることにし、同好の士を募ったところ橋爪健氏ら置賜考古学会の会員数名が応じてくれた。かくして急テンポに調査の準備は進行し、昭和47年8月に調査を実施することになったのである。

3 調査の経過

調査は予定通り昭和47年8月に実施された。その調査体制等はつきの通りである。



第31図 八幡原№31遺跡（竹井境B）遺跡全体図

M 従来の考古学的調査

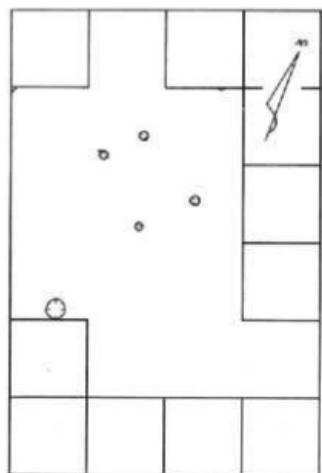
- a 調査期間 昭和47年8月6日・11日～18日、9月15日～17日・23日～24日、10月1日・8日・10日、11月5日（延18日間）
- b 調査箇所 手塚孝氏の遺物を探集した松林の手前道路との間、米沢市大字竹井字玉ノ木2885の15番地 未耕作の桑畑である。
- c 調査目的 本遺跡の内容・性格をつかむとともに縄文時代後期初頭の土器編年資料を得ること。
- d 調査主体 上竹井遺跡調査団
- e 後援 置賜考古学会
- f 調査体制 上竹井遺跡調査団
- | | |
|-------|---|
| 調査団長 | 橋爪 健（米沢市立愛宕小学校教諭） |
| 調査委員長 | 佐藤鎮雄（高畠町立第一中学校教諭） |
| 調査委員 | 亀田吳明（米沢女子高校教諭） |
| " | 真室公一（緑ヶ丘女子高校教諭） |
| " | 安彦政信（山形大学学生） |
| " | 手塚 孝（会社員） |
| " | 秦 昭繁（農業） |
| " | 手塚孝信（会社員） |
| 調査補助員 | 高畠町立第一中学校生徒有志 米沢市立第三中学校生徒有志
米沢市立上郷中学校生徒有志 県立米沢商業高校生徒有志 |
| 調査協力者 | 我妻武一（地主）
手塚武夫（農業） |

※ この他に高畠町史編さん委員 佐々木洋治氏にはご指導を賜り、宮城県教育庁文化財保護室技師 佐藤庄一氏および山形大学学生名和達朗氏には応援参加のご協力を賜った（所属はいずれも当時）。

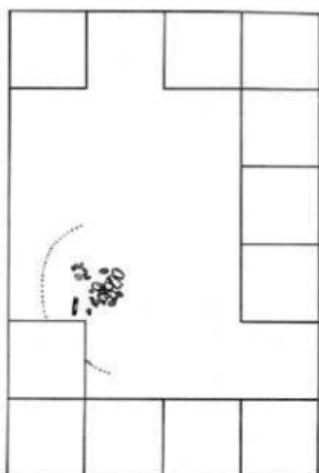
調査は、8月の炎暑の中で始まり、予想外の良好な成果を得て終了した。その主な経過は次の通りである（第32図）。

8月6日 地形測量に入る。一方調査地区に東西10m、南北20mの2mグリッドを設定する。

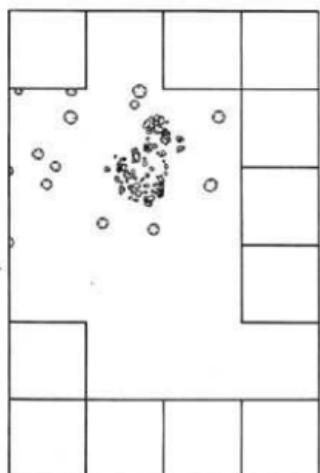
8月11日～8月18日 調査地区北半部分のA-2区・A-4区・B-1区・B-3区・B-5区・C-2区・C-4区・D-5区より発掘開始。第I層は耕土で搅乱層である。遺物多量。第IIa層は遺物包含層、遺物を多量に得る。A-4区、



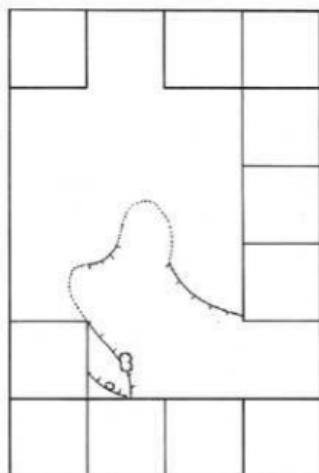
第Ⅰa層



第Ⅰb層



第Ⅱa層



第Ⅱb層

0 1 2 3 4 5m

第32図 八幡原№31遺跡 層位別遺構配置図

B-3区にピットを確認、遺構としてまとまらず。A-4区～B-3区～B-4区に第Ⅱb層を確認。遺物はより多量に得られた。炭化粒子が散り、A-4区～B-4区に六角形の棒石と配石遺構を確認。第Ⅲa層は最も遺物量の多い包含層である。ピットと焼けた石を検出したが、時間切れで調査を延長することにした。

- 9月15日～9月17日 第Ⅲa層のピットと焼け石を追究するため、A-3区・C-3区・C-4区に拡張。第Ⅲa層は黒味が強くてセクション細部をなかなかおさえられず難行する。
- 9月23日～9月24日 第Ⅳ層面に至って、A-2・3・4区～B-2・3区～C-2・3区にわたる住居跡を確認する。
- 10月1日 B-4・5区～C-4・5区に第Ⅲb層を確認し、掘り下げる。遺物は少なくなる。
- 10月8日 B-4・5区～C-4・5区に溝状のおちこみを確認し、そのプランを追究。
- 10月10日 溝状のおちこみを掘り終え、写真撮影および実測を行う。
- 11月5日 実測の残りを行う。
- 12月2日 埋戻す。D-5区は第Ⅲb層をもって中止する。

4 層序

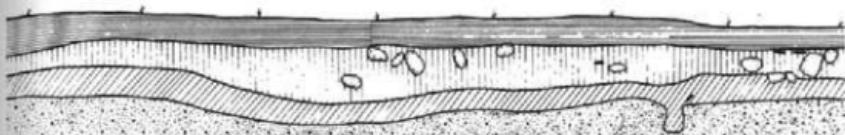
本遺跡は沖積段丘上に立地し、土層は比較的平らであるが、天王川上流の方より下流の方へ堆積している。即ち、南東に厚く、北西に薄くなる傾向をもつ。しかも礫を多く含む。そのため、地山層（ここでは第Ⅳ層の砂礫層）までそれほど深くないのに、耕作による擾乱は浅い（第33図）。

第Ⅰ層 表土。耕作によって分離された土層である。黒褐色を呈し、バサバサしている。小さな礫を少量含み、包含層より搅乱されて混入した遺物を包含する。下の第Ⅲa層と同じく、第Ⅲ群土器及び石器である。10～25cmの厚さ。

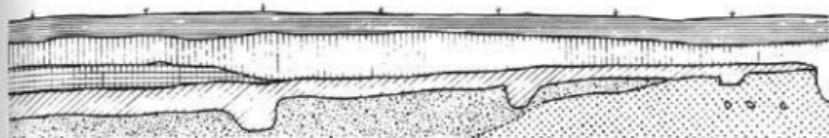
第Ⅰ層 黒色土。2層に分離できる。

a層 黒色土。黒ボク質でバサバサしている。φ10～18cm大の円礫を多量に含む。遺物が包含され、第Ⅲ群土器および磨製石斧・石鎌等の石器である。15～40cmの厚さ。

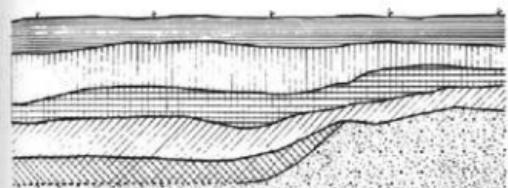
b層 明黒色土。砂およびφ8～12cm大の円礫を多量に含む。下部に木炭粒子を含む。ところどころに粗砂のブロックを有している。遺物が包含され、第Ⅲ群土器少量



C-2, B-2, A-2区南壁セクション図



A-4, A-3, A-2区西壁セクション図



C-5, B-5区南壁セクション図

■	第Ⅰ層
□	第Ⅱa層
▨	第Ⅱb層
▨	第Ⅲa層
▨	第Ⅲb層
▨	第Ⅳ層
▨▨	第Ⅴ層

0 1 2m

第33図 八幡原No31遺跡 層序

と第Ⅱ群土器多量を出土する。石器は凹石・石錐等である。12~15cmの厚さ。

第Ⅲ層 黒褐色土。2層に分離できる。

a層 黒褐色土。やや粘性をもち固くしまる傾向をもつ。 ϕ 4~8cm大の小さな円礫を少量含む。炭化粒子が散って入る。遺物を包含する。土器は第Ⅰ群土器で、石器は石匙・石錐等であり、全般的に非常に多量である。5~25cmの厚さである。

b層 暗黒褐色土。やや粘性をもちしまる傾向をもつ。やや粗砂質。礫をほとんど含まない。遺物を包含するが量は少ない。土器は第Ⅰ群土器で、石器は大形の磨製石斧等である。

第Ⅳ層 黄褐色細砂。砂粒は細かく、粘質である。遺物は包含されない。

第Ⅴ層 黄褐色砂礫。いわゆる砂利層である。砂粒は粗い。 ϕ 5~20cm大の砂利を含む。

無遺物層である。

5 遺構

a 配石遺構（第十図版、第34図）

調査地区西寄りの市道に近いところに位置する。第Ⅰb層においてA-4区～B-4区にかけて確認された。礫を多く含む地層にあるため、確認するのに難行した。しかし、集石された石の大きさや集石された状況からして、人為性を認めた。

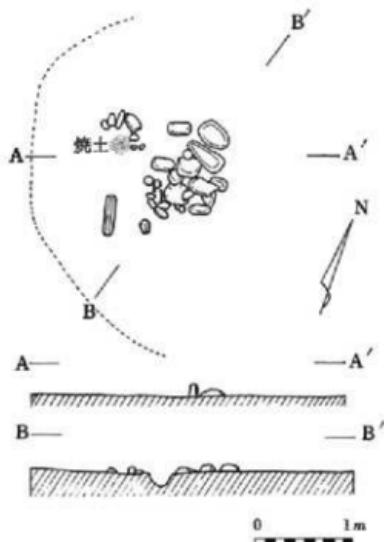
径25cmの円形ピットを中心にして北へ広く、長さ20～40cm大の河原石を図の通りに集石している。ピットは15cm程度の浅いものである。南西側に、横倒しの径10cm、長さ40cm大の六角柱形の石棒を確認。集石遺構に伴うものと考える。また北西側に焼土を囲む礫石を確認した。焼土は赤色で、径20cmの円形にまとまっている。集石～六角柱石～焼土の一帯は炭化粒子が多量に破線の範囲にわたって発見された。性格不明である。伴出土器は第Ⅱ群土器である。

b 第1号住居跡（第十一図版、第35図）

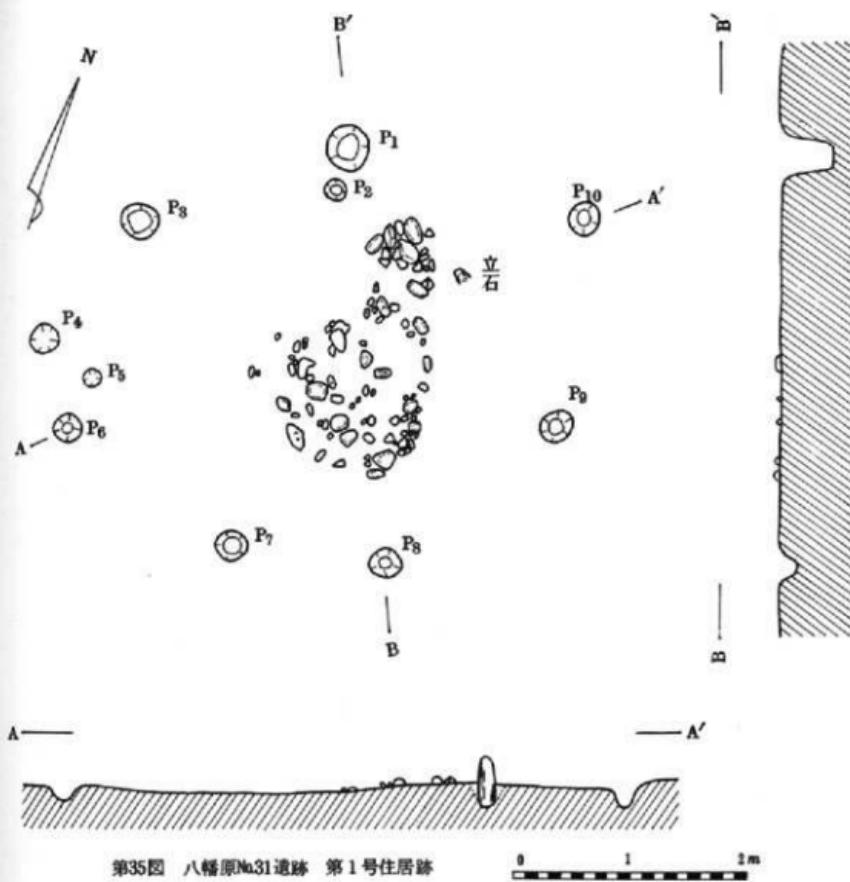
本住居跡は、調査地区北側で、A-2・3区～B-2・3区～C-2・3区にわたって第Ⅱa層下部と第Ⅲ層まで掘り下げて確認した。遺存状態は、北側に大木の根穴があつたことからピットの検出で苦労した他は何もない。一応良好といえる。

平面形は不明。柱穴の並びからして円形もしくは楕円形と考えられる。壁がないため柱穴の位置から考え約5×4mを測る。長軸はN-45°Eである。柱穴は10ヶ、径20～40cmで（殆んど30～40cm）、深さ20～50cmを測る（殆んど20～30cm）。覆土は黒褐色土である。第Ⅱa層と殆んど同じであるが礫が少ない。

住居のほぼ中央に三角形状の炉跡がある。こぶし大の河原石を配石してつくっている。石は焼けて赤くなっていた。その割に炉床は焼けていない。長軸220cm、短軸150cm。長軸の方向はN-5°Wである。この炉跡の東に自然石による立石が検出された。径約15cm、



第34図 八幡原N-31遺跡 配石遺構

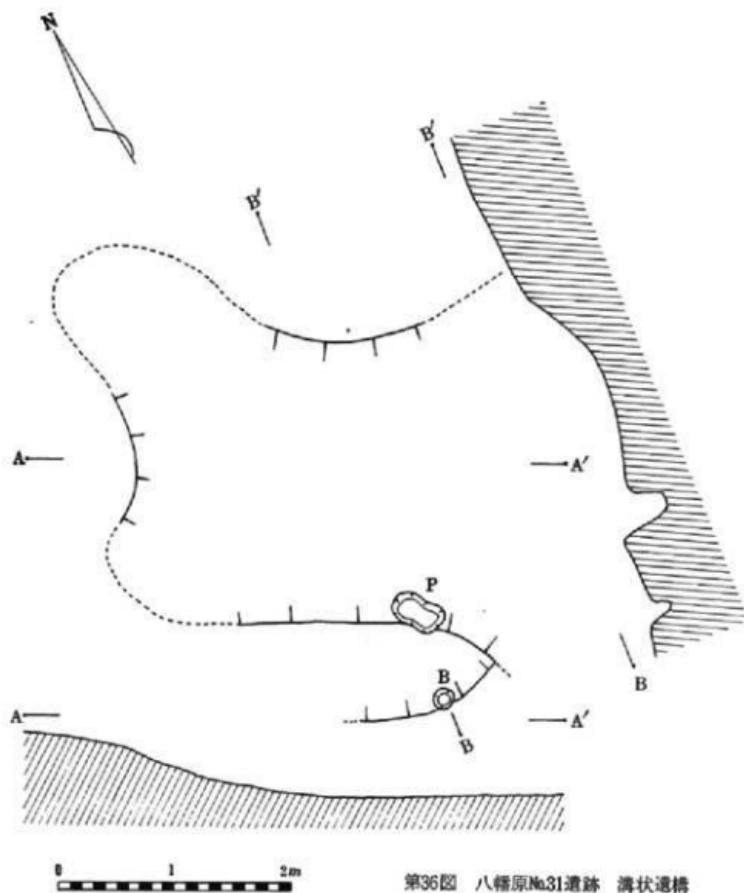


長さ40cm、下半部が床面に埋められていた。

床面は固くしめられてはいるが、あまり固くはない。中央がわずかにくぼむ。この床面より第Ⅰ群土器を確認している。したがってこの住居跡の時期は第Ⅰ群土器の時期となる。

c 溝状遺構（第36図）

第Ⅱ層上面においてB-4・5～C-4・5区にわたって確認された。幅240cm、長さ340cm以上の溝状を呈する。深さは最大で48cm、第36図断面におけるようなおちこみである。長軸線の方向はN-60°-Wである。覆土は第Ⅱb層としたものであり、この中より第Ⅰ群土器および大形の磨製石斧等が検出されている。したがって概ね遺構の時期は第Ⅰ群



第36図 八幡原No.31遺跡 溝状遺構

土器の時期ということになると考へられる。

この遺構によって切られた浅いおちこみと、径 42×28 cm、深さ34cmのピットおよび径18cm、深さ18cmのピットを確認した。覆土はやはり第Ⅱb層と同じであるが、炭化粒子を少しふくんでいた。遺構の性格は不明である。

6 出土遺物

本調査における出土遺物は発掘面積に比して量がきわめて多い。整理箱にして約30箱である。土器・土偶・土鍤・石器・石製品に五分される。最も多量で大半を占めるのが土器で

ある。次いで多量なのが石器である。その他は全部合わせ数点である。現在は遺物整理にとりかかったばかりで、報告の段階に至っていない。したがって本稿では、そのアウトラインにふれるつもりで、おもな遺物をとりあげてその概略を述べることにしたい。

A 土 器

土器は、概ね層序によって区分した結果4群に分類できる。しかし、全て層毎にはまとまらない面をも有するので、その点を考慮して4群に分けられた。いずれも破片で復原できるものはわずかである。したがって全容がわかりにくい。

第1群 土器（第39図1～7）

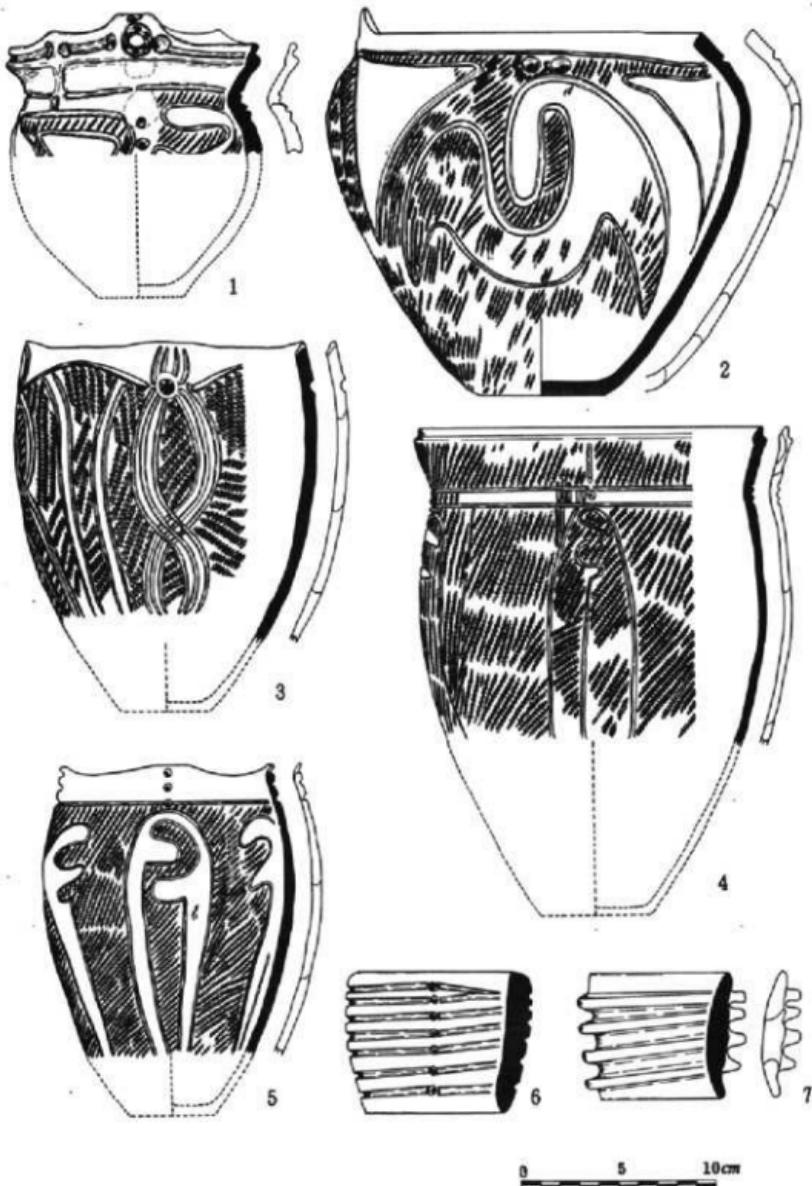
第Ⅱb層出土の縄文時代中期末の一組である。殆んどが特有の磨消縄文を有する土器である。この一群の土器は、B-1区等の一部で第Ⅱa層からも出土しているが、木根による部分搅乱のところである。したがって第Ⅱb層出土といえる。およそ三つに細分される。

a類 土器（第39図1～2）

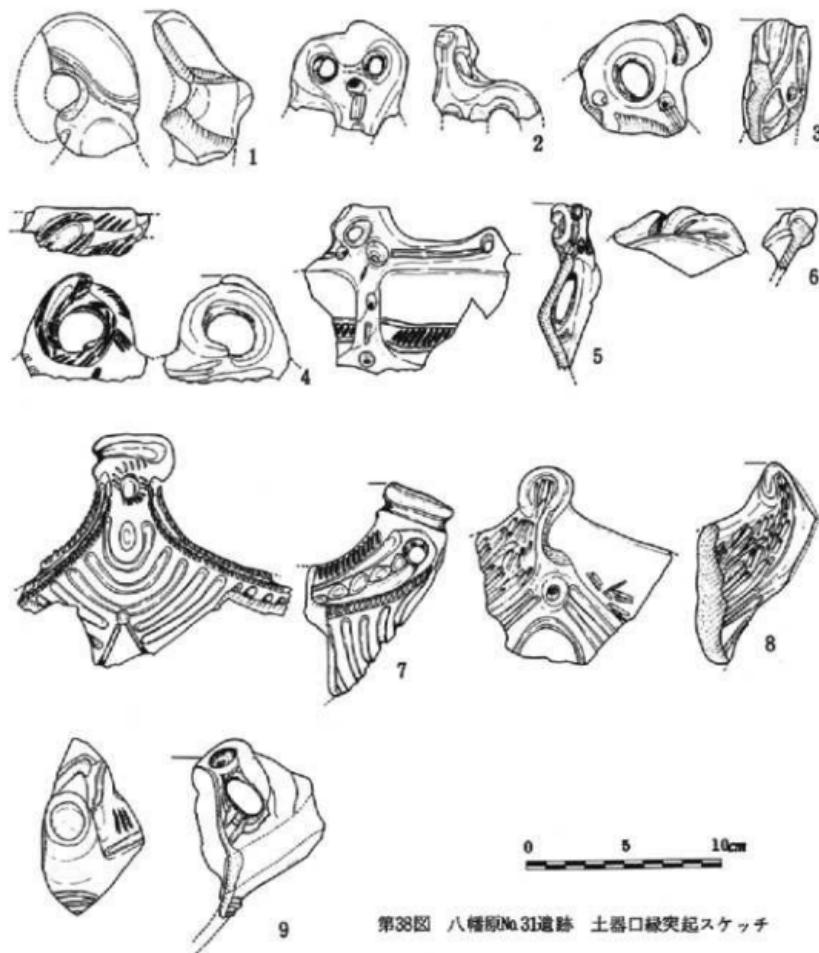
二重沈線による磨消縄文をもつものである。一般にやや赤味を帯びた褐色で、胎土には雲母や微細粒子を少量含む。しかし、良く精選された粘土である。全般的に器面がへうで研磨されている。器形の詳細は不明。1は、平らなわずかに肥厚した口縁が内済し、口を大きく開く鉢か浅鉢にみえる。2は、頸部でくびれる深鉢にみえる。いずれも文様は、二重沈線で区画された上下に走る曲線的な磨消縄文である。沈線は浅く太い。先端が丸味をもつ工具で施されている。磨消縄文の手法は、縄文施文→沈線施文→磨消研磨の順序をもつとみられる。縄文はR Lの縦位回転施文である。

b類 土器（第39図3～4）

隆線貼付文に二重沈線を加えて施す磨消縄文をもつものである。黄赤褐色で、胎土には雲母や石英粒子を少量含む。焼成はa類よりやや劣る。器面調整はa類より良くない。器面の磨消部分にわずかな凹凸がみられるほどである。器形は不明。概ね外反し頸部でしまる胴張りの深鉢とみられる。磨消縄文は第a類と似た曲線的なものである。沈線はやや太く深い。先端が丸味を帯びた工具を用いている。施文法は、縄文施文→隆線貼付→沈線施文→磨消の順序をもつ。縄文はL R, R Lの縦位回転施文である。



第37図 八幡原No.31遺跡 土器実測図



第38図 八幡原№31遺跡 土器口縁突起スケッチ

C類土器（第39図5～6）

刺突文を有するものである。赤褐色で、胎土には雲母片・石英粒子を少量含む。精選された胎土である。器面はヘラで調整されているが、b類同様やや凹凸を残している。器形は、やや肥厚した平らな口縁の外反する深鉢らしい。刺突文を磨消繩文の一部に施文するものらしい。沈線は、やはり丸味のある先端をもつ工具で、太く深く施されている。本群土器では最も太い。刺突は斜位に行ない、工具を斜位にはずして施文してある。5



第39図 八幡原No.31遺跡 土器拓影図(1)

はヘラもしくは棒状工具であるが、6は草茎状の工具を用いている。施文法は、器面粗研磨→刺突→磨消部の研磨である。手法的にはa類・b類に同じである。

第2群土器（第十三図版2、第38図8、第39図8～24、第40図、第41図）

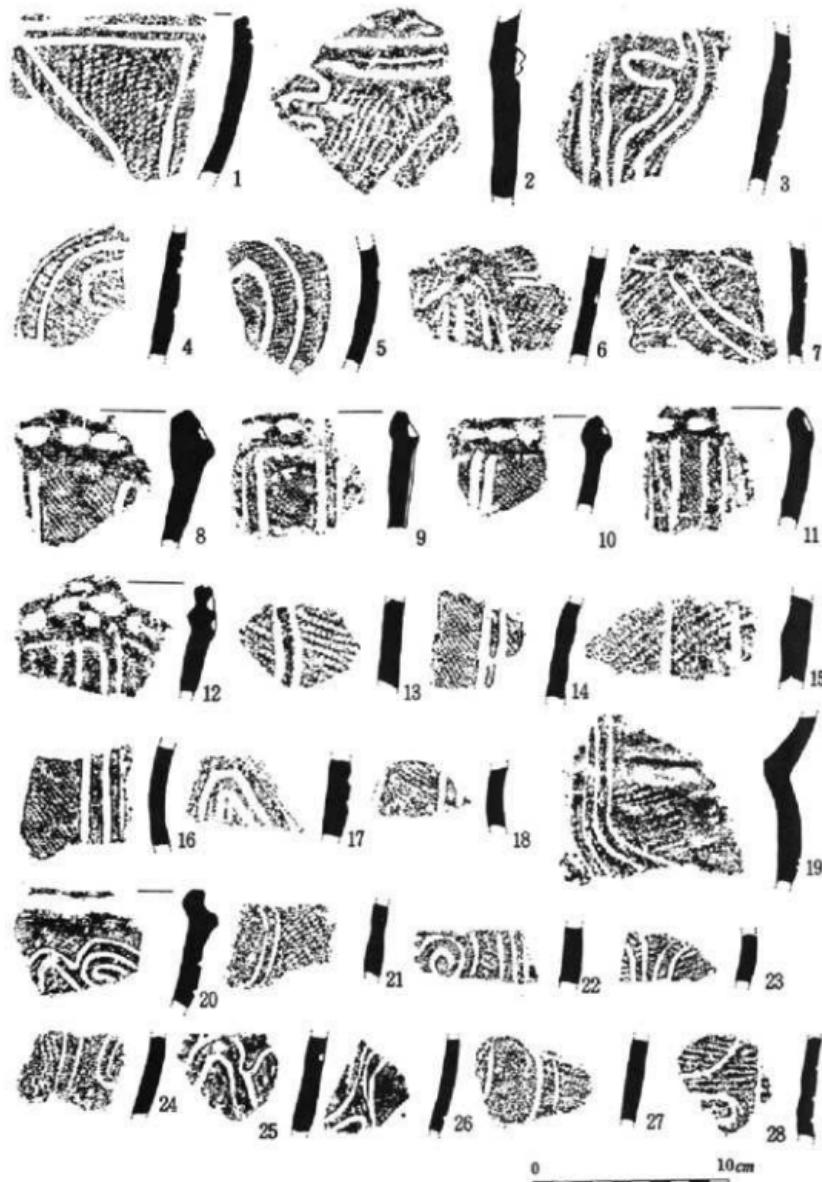
第Ⅱa層より出土した一群である。一部第Ⅱb層より出土したものもある。全般に磨消繩文が一部分にしか用いられない。殆んど口縁に集中して用いられている。体部一面を覆う文様は、粗い斜繩文の地文に曲線的な沈線文を加えたものである。口頭部以外は殆んど縦走する。口縁に突起をもつものが多く、いずれも円状の刺突を加えてある。概ね8類に細分できる。

a類土器（第38図8、第39図8～19）

波状口縁で、口縁突起間に結ぶ隆線貼文に連続刺突文を加えた文様を有するものである。明褐色を呈し、胎土には雲母片をわずかに、石英等細粒子を少量含んでいる。しかし、胎土は良く選ばれ、焼きも悪くはない。器面調整は口縁部を中心しているが、やや難なところもある。器形の詳細は不明であるが、概ね大きく波うつ波状口縁がやや開き気味に内湾しながら下降し、ややしまり気味に底部に至る深鉢であろう。口縁突起はおそらく4個で、S字状隆線が被り、円い大きな穴をもっている。穴は器壁を抜くものではなく、刺突様のものである。この隆線は胸の口縁突起にむかって口縁にそって走る。その上に、数mm位の円棒状工具で器面に直角に刺突して施した連続刺突文が走る。口縁突起の下部に垂下する曲線的な沈線文が施され、体部一面に曲線文が展開される。沈線は太く深く、円味をもつ棒状工具によって施されている。地文の繩文は、LR, RLの単節斜繩文で縦位に回転施文されている。

b類土器（第37図4～5、第39図20～24、第40図1～7）

やはり波状口縁の地文の繩文に曲線的な沈線文を展開したもので、いわゆるステッキ状文を有するものである。色調は全般に褐色で、胎土に雲母片を含み、細粒子を少量含む。石英粒子はごくわずかである。器面調整はやや難であるが、口縁部はそれほどでもない。焼成は普通である。器形は、大きく波うつ口縁（わずかに肥厚する）がやや外反し、頸部で軽くしまり胴部でやや張る深鉢とみられる。口縁に2～4本の並行する沈線文を施す他は、いずれも縦走する沈線文である。沈線文はステッキ状の文様として単位にまとめられ、器面をいくつかに等分して配置される。第37図の4は、6単位である。沈線は太く深いものが殆んどである。いずれにしても、先端が丸味をもつ棒状工具を用いてある。地文は、LRおよびRLの単節斜繩文で、縦位回転施文のものと横斜位回転



第40図 八幡原No.31遺跡 土器拓影図(2)

施文のものの両方を含む。また、量的に少ないが、口唇に一条の溝を有するもの（第37図の4）や口縁部およびステッキ状文の一部をきれいに磨消したもの（第37図の5）もある。口縁突起をもたないこと、刺突文が少ないとことはa類土器と対象的でさえある。

c 類 土 器 （第40図8～19）

口唇が肥厚し、稜をもち、連続刺突文を施したグループである。文様は地文の斜繩文に加えた沈線文である。色調はやや赤味をおびた褐色で、胎土には砂粒を多く含む。雲母片はわずかながら含まれる。概して器面調整はやや雑で、内面はとくに雑である。焼成は普通と見られる。口唇の刺突は太い草茎様の工具をやや斜めから刺したものである。体部の沈線文は2～3本組で並行して垂下し、部分にカーブを描くものでモチーフは不明。これも太く深く先端が丸味をもつ棒状工具を用い施文されている。地文の繩文は、LR・LRの単節斜繩文で綴斜位に回転施文されたものである。

d 類 土 器 （第40図20～28）

口唇に一条の溝をもち、器面いっぱいに曲線的な沈線文を有するものである。色調は明褐色で、胎土に雲母片や石英等の砂粒を含む。概して器面調整は良好で焼成も悪くはない。器形は、口唇を「く」の字に内傾させた平らな口縁が外反する深鉢であるとみられる。細く浅い沈線でもって曲線的な文様を展開させる。一部渦巻状を呈するものもある。地文の斜繩文の上をある程度こすって沈線文を施したとみえ、地文の斜繩文が少し消されている。一見無文の器面に沈線を描いたものとまちがうものもある。斜繩文は、LR単節の原体を縦位・横位に回転施文している。

e 類 土 器 （第37図3、第41図1～4）

口縁に沈線文を横走させて口縁全体をしめ、要所要所に房状に垂下する沈線文を有するものである。色調はやや赤味を帯びた褐色であり、胎土には、雲母片・砂粒を少量含む。概して器面調整は良く、焼きも良い方である。器形は、口唇が全般に少し肥厚し、平らな口縁が緩く内湾して少し開く鉢形土器とみられる。文様は、器面にいくつか等間隔で配された、ふさ状（紐の束の上部をしばったような）の沈線文である。第41図1～3はこの類に含めたが、やや趣きを異にしている。沈線文は太く深く、先端の丸い棒状工具によるものである。第37図3、4とも共通して繩文が磨消されている。地文の斜繩文は、LRの単節の短かい原体を横位・斜位に回転施文している。

f 類 土 器 （第37図6～7、第41図5～17）

沈線文のみのものを一括した。資料が増すにつれて分離できるとみられるものも含めてある。色調は全般に黄褐色又は明褐色で、胎土には雲母片や砂粒を少量含む。器面は